

野分

夏目漱石

青空文庫

白井道也しらいどうやは文学者である。

八年前まえ大学を卒業してから田舎いなかの中学を二三箇所かしよ流して歩いた末、去年の春飄ひようぜん然ぜんと東京へ戻つて来た。流すとは門かどづけ附つけに用いる言葉で飄然とは徂徠そらいに拘かかわらぬ意味とも取れる。道也の進退をかく形容するの適否は作者といえども受合もつわぬ。纏もつれたる糸の片端かたはしも眼ちやくを着ちやくすればただ一筋しゆつしよの末とあらわるるに過ぎぎぬ。ただ一筋しゆつしよの出しゆつしよ処しよの裏には十重とえはたえ二十重いんねんの因いんねん縁からが絡からんでいるかも知れぬ。鴻雁こうがんの北きたに去いりて乙い鳥ちようの南きたに來きたるさえ、鳥の身みにな

つては相当の弁解があるはずじゃ。

始めて赴任ふにんしたのは越後えちごのどこかであった。越後は石油の名所である。学校の在ある町を四五町隔てて大きな石油会社があった。

学校のある町の繁栄は三分二ぶ以上この会社の御蔭おかげで維持されていた。町のものに取つては幾個の中学校よりもこの石油会社の方が遥はるかにありがたい。会社の役員は金のある点において紳士しんしである。

中学の教師は貧乏なところが下等に見える。この下等な教師と金のある紳士が衝突すれば勝しょうはい敗はいは誰が眼あきりにも明かである。道也はある時の演説会で、金きん力りよくと品性ひんせいと云いう題目のもとに、両

者の必ずしも一致せざる理由を説明して、暗あんに会社の役員らの暴慢と、青年子弟の何らの定見もなくしていたこうはくばんのうしずらに黄白万能

主義ゆぎを信奉するの弊へいとを戒いましめた。

役員やくいんらは生意なまいき気きな奴やつだと云った。町の新聞は無能の教師が高慢な不平を吐はくと評した。彼の同僚すら余計な事をして学校の位地を危あやうくするのは愚ぐだと思つた。校長は町と会社との關係を説いて、漫みだりに平地に風波を起すのは得策でないと言論した。道也の最後に望しよくを属しよくしていた生徒すらも、父兄の意見を聞いて、身のほどを知らぬ馬鹿教師と云い出した。道也は飄ひよう然ぜんとして越後を去つた。

次に渡つたのは九州である。九州を中断してその北部から工業を除けば九州は白紙となる。炭たん礦こうの煙りを浴びて、黒い呼吸いきをせぬ者は人間の資格はない。垢あか光びりのする背広の上へ蒼あおい顔を

出して、世の中がこうの、社会がああの、未来の国民がなんの
のと白銅一個にさえ換算の出来ぬ不生産的な言説を弄するもの
存在の権利のあらうはずがない。権利のないものに存在を許す
は実業家の御慈悲である。無駄口を叩く学者や、蓄音機の代理を
する教師が露命をつなぐ月々幾片の紙幣は、どこから湧いてく
る。手の掌をぼんと叩けば、自から降る幾億の富の、塵の塵の末
を舐めさして、生かして置くのが学者である、文士である、さて
は教師である。

金の力で生きておりながら、金を誹るのは、生んで貰った親に
悪体をつくと同じ事である。その金を作つてくれる実業家を軽
んずるなら食わずに死んで見るがいい。死ねるか、死に切れずに

降参をするか、試^ためして見ようと云つて抛^{ほう}り出された時、道也はまた飄然と九州を去つた。

第三に出現したのは中国^{へん}辺の田舎^{いなか}である。ここの気風はさほどに猛烈な現金主義ではなかつた。ただ土着のものがむやみに幅を利^きかして、他県のを外国人と呼ぶ。外国人と呼ぶだけならそれまでであるが、いろいろに手を廻^まわしてこの外国人を征服しようとする。宴会があれば宴会でひやかす。演説があれば演説であつてこする。それから新聞で厭味^{いやみ}を並べる。生徒にからかわせる。そうしてそれが何のためでもない。ただ他県のものが自分と同化せぬのが氣^かに懸^かるからである。同化は社会の要素に違^{ちが}ない。仏蘭^{フラ}西^{ンス}のタルドと云う学者は社会は模倣なりとさえ云うたくらいだ。

同化は大切かも知れぬ。その大切さ加減は道也といえども心得ている。心得ているどころではない、高等な教育を受けて、広義な社会観を有している彼は、凡俗以上に同化の功德くどくを認めている。ただ高いものに同化するか低いものに同化するかが問題である。この問題を解釈しないでいたずらに同化するのは世のためにならぬ。自分から云えば一分いちぶんが立たぬ。

ある時旧藩主が学校を参観に来た。旧藩主は殿様で華族様である。所のものから云えば神様である。この神様が道也の教室へ這は入いつて来た時、道也は別に意にも留めず授業を継続していた。神様の方では無論挨拶あいさつもしなかつた。これから事が六むずかしくなつた。教場は神聖である。教師が教壇に立って業を授けるのは侍さむらい

が物の具ものぐに身を固めて戦場に臨むようなものである。いくら華族でも旧藩主でも、授業を中絶させる権利はないとは道也の主張であつた。この主張のために道也はまた飄ひようぜん然ぜんとして任地を去つた。去る時に土地のものは彼を目して頑愚もんぐだと評し合つたさうである。頑愚と云われたる道也はこの嘲罵ちやうばを背に受けながら飄然として去つた。

三みたび飄然と中学を去つた道也は飄然と東京へ戻つたなり再び動く景色けしきがない。東京は日本で一番世地せちがら辛い所である。田舎にいるほどの俸給を受けてさえ樂には暮せない。まして教職なげうを抛つて両手を袂たもとへ入れたままで遣り切きるのは、立ちながらみいらとなる工夫くふうと評するよりほかに賞ほめようのない方法である。

道也には妻さいがある。妻と名がつく以上は養うべき義務は附随してくる。自みづからみいらとなるのを甘んじても妻を干乾ひほしにする訳わけには行かぬ。干乾かんけんにならぬよほど前から妻君はすでに不平である。

始めて越後えちごを去る時には妻君に一部いちぶ始終しじゆうを話した。その時妻君はごもつともでござんすと云つて、甲斐かい甲斐がいしく荷物てごしらの手て拵えを始めた。九州を去る時にもその顛てん末まつを云つて聞かせた。

今度はまたですかと云つたぎり何にも口を開かなかつた。中国を出る時の妻君の言葉は、あなたのように頑固がんこではどこへいらしても落ちつけっこありませんわと云う訓戒的あいさつの挨拶あいさつに変化していた。七年の間に三たび漂泊とあのして、三たび漂泊するうちに妻君はしだいと自分の傍とあのを遠退とのおくようになった。

妻君が自分の傍を遠退くのは漂泊のためであろうか、俸禄を棄てるためであろうか。何度漂泊しても、漂泊するたびに月給が上がったらどうだろう。妻君は依然として「あなたのように……」と不服がましい言葉を洩らしたろうか。博士にでもなつて、大学教授に転任してもやはり「あなたのように……」が繰り返されるであろうか。妻君の了簡は聞いて見なければ分らぬ。

博士になり、教授になり、空しき名を空しく世間に謳われるがため、その反響が妻君の胸に轟いて、急に夫の待遇を変えるならばこの細君は夫の知己とは云えぬ。世の中が夫を遇する朝夕の模様で、夫の価値を朝夕に変える細君は、夫を評価する上において、世間並の一人である。嫁がぬ前、名を知らぬ前、の己れ

と異なるところがない。従つて夫から見ればあかの他人である。夫を知る点において嫁ぐ前と嫁ぐ後^{のち}とに變りがなければ、少なくともこの点において細君らしいところがないのである。世界はこの細君らしからぬ細君をもつて充滿している。道也は自分の妻^{さい}をやはりこの同類と心得ているだろうか。至る所に容^いれられぬ上に、至る所に起居を共にする細君さえ自分を解してくれないのだと悟つたら、定めて心細いだろう。

世の中はかかる細君をもつて充滿していると云つた。かかる細君をもつて充滿しておりながら、皆円満にくらしている。順境にある者が細君の心事をここまで解剖する必要がない。皮膚病に罹^かればこそ皮膚の研究が必要になる。病氣も無いのに汚ないもの

を頭けんびきよう微鏡で眺ながめるのは、事なきに苦しんで肥柄杓こえびしやくを振り廻すと一般である。ただこの順境が一転して逆落さかおとしに運命の淵ふちへころがり込む時、いかな夫婦の間にも気まずい事が起る。親子の羈き絆ずなもぼつりと切れる。美くしいのは血の上を薄く蔽おほう皮の事であったと気がつく。道也はどこまで気がついたか知らぬ。

道也の三たび去つたのは、好んで自から窮地おちいに陥るためではない。罪もない妻に苦勞を掛けるためではなおさらない。世間が己おのれを容れぬから仕方がないのである。世が容れぬならなぜこちらから世に容れられようとはせぬ？ 世に容れられようとする刹那せつなに道也は奇麗きれいに消滅してしまふからである。道也は人格において流俗りゆうぞくより高いと自信している。流俗より高ければ高いほど、

低いものの手を引いて、高い方へ導いてやるのが責任である。高いと知りながらも低きにつくのは、自から多年の教育を受けながら、この教育の結果がもたらした財宝を床ゆかした下に埋うずむるようなものである。自分の人格を他に及ぼさぬ以上は、せつかくに築き上げた人格は、築きあげぬ昔と同じく無功力で、築き上げた労力だけを徒費した訳になる。英語を教え、歴史を教え、ある時は倫理さえ教えたのは、人格の修養に附随して蓄たくわえられた、芸を教えたのである。単にこの芸を目的にして学問をしたならば、教場で書物を開いてさえいれば済む。書物を開いて飯を食って満足しているのは綱渡りが綱を渡って飯を食い、皿廻しが皿を廻わして飯を食うのと理論において異なるところはない。学問は綱渡りや皿廻

しとは違う。芸を覚えるのは末の事である。人間が出来上るのが目的である。大小の区別のつく、けいちよう軽重の等差を知る、こうお好悪の判然する、善悪の分界を呑み込んだ、賢愚、真偽、正邪の批判をあや謬まらざる大丈夫が出来上がるのが目的である。

道也はこう考えている。だから芸をう售つて口を糊するのを恥辱とせぬと同時に、学問の根底たる立脚地を離るるのを深くろうれつ陋劣と心得た。彼が至る所に容れられぬのは、学問の本体に根拠地を構えての上の去きよしゆう就であるから、彼自身は内にかえり顧みてやま疚しいところもなければ、意気地がないとも思いつかぬ。頑愚がんぐなどと云うちようば嘲罵は、てのひらの掌へ載せて、夏の日の南軒なんけんに、虫眼鏡むしめがねで検査しても了解が出来ん。

三度みたび教師となつて三度追ひ出された彼は、追ひ出されるたびに博士よりも偉大な手柄てがらを立てたつもりでいる。博士はえらからう、しかしたかが芸で取る称号である。富豪が製艦費を献納して従五位ごいをちようだいするのと大した変りはない。道也が追ひ出されたのは道也の人物が高いからである。正しき人は神の造れるすべてのうちにて最も尊きものなりとは西の国の詩人の言葉だ。道を守るものは神よりも貴たつとしとは道也が追われるごとに心のうちで繰り返す文句である。ただし妻君はかつてこの文句を道也の口から聞いた事がない。聞いても分かるまい。

わからねばこそ餓え死じにもせぬ先から、夫に対して不平なのである。不平な妻さいを気の毒と思わぬほどの道也ではない。ただ妻の

歡心を得るために吾わが行く道を曲げぬだけが普通の夫と違うのである。世は単に人と呼ぶ。娶めとれば夫である。交まじわれば友である。手を引けば兄、引かるれば弟である。社会に立てば先覚者にもなる。校舎に入れば教師に違いない。さるを単に人と呼ぶ。人と呼んで事足るほどの世間なら単純である。妻君は常にこの単純な世界に住んでいる。妻君の世界には夫としての道也のほかには学者としての道也もない、志士としての道也もない。道を守り俗に抗する道也はなおさらない。夫が行く先き先きで評判が悪くなるのは、夫の才が足らぬからで、到いたる所に職を辞するのは、自から求むる醉すいきよう興きようにほかならんとまで考えている。

酔興を三たび重ねて、東京へ出て来た道也は、もう田舎いなかへは行

かぬと言い出した。教師ももうやらぬと妻君に打ち明けた。学校に愛想をつかした彼は、愛想をつかした社会状態を矯きようせい正するには筆の力によらねばならぬと悟ったのである。今まではいずこの果で、^{はて}どんな職業をしようとも、己おのれさえ真直であれば曲がつたものは芋殻おがらのように向うで折れべきものと心得ていた。盛名はわが望むところではない。威望もわが欲するところではない。ただわが人格の力で、未来の国民をかたちづくる青年に、向上の眼まなこを開かしむるため、取捨しゆしゃ分ぶん別べつの好例を自家身上に示せば足るとのみ思い込んで、思い込んだ通りを六年余り実行して、見事に失敗したのである。渡る世間に鬼はないと云うから、同情は正しき所、高き所、物の理窟りくつのよく分かる所に聚あつまると早合点はやがてんして、

この年月としつきを今度こそ、今度こそ、と経験の足らぬ吾身わがみに、待ち受けたのは生しょうが涯がいの誤りである。世はわが思うほどに高尚なものではない、鑑識けんしのあるものでもない。同情とは強きもの、富めるもののみ随したがう影かげにほかならぬ。

ここまで進んでおらぬ世を買い被かぶつて、一足飛いっそくとびに田舎へ行つたのは、地ならしをせぬ地面の上へ丈夫な家を建てようとあせるようなものだ。建てかけるが早いか、風と云い雨と云う曲くせもの者が来て壊こわしてしまふ。地ならしをするか、雨あめかぜ風かぜを退治たいじるかせぬうちは、落ちついてこの世に住めぬ。落ちついて住めぬ世を住めるようにしてやるのが天下の士の仕事である。

金かねも勢いきおいもないものが天下の士に恥じぬ事業を成すには筆の力に

頼らねばならぬ。舌の援を藉らねばならぬ。脳味噌をのうみそ圧搾あつさくして
 利他りたの智慧ちえを絞しぼらねばならぬ。脳味噌はか涸れる、舌はただ爛れる、筆
 は何本でも折れる、それでも世の中が云う事を聞かなければそれ
 までである。

しかし天下の士といえども食わずには働けない。よし自分だけ
 は食わんで済むとしても、妻は食わずに辛抱しんぼうする気遣きづかいはない。
 豊かに妻を養わぬ夫は、妻の眼から見れば大罪人である。今年の
 春、田舎から出て来て、芝琴しばことひらちよう平町の安宿へ着いた時、道也と
 妻君の間にはこんな会話が起つた。

「教師をおやめなさるって、これから何をなさるおつもりですか」
 「別にこれと云うつもりもないがね、まあ、そのうち、どうかな

るだろう」

「その内^{うち}どうかなるだろうって、それじゃまるで雲を攫^{つか}むような話しじゃありませんか」

「そうさな。あんまり判^{はん}然^{ぜん}としちやいない」

「そう呑^{のん}氣^きじゃ困りますわ。あなたは男だからそれでようござんしようが、ちつとは私の身にもなつて見て下さらなくつちやあ：
…」

「だからさ、もう田舎へは行かない、教師にもならない事にきめたんだよ」

「きめるのは御勝手ですけれども、きめたつて月給が取れなけりや仕方がないじゃありませんか」

「月給がとれなくつても金がとれれば、よかろう」

「金がとれれば……そりやようござんすとも」

「そんなら、いいさ」

「いいさつて、御金がとれるんですか、あなた」

「そうさ、まあ取れるだろうと思うのさ」

「どうして？」

「そこは今考え中だ。そう着、ちやく早々そうそう計画が立つものか」

「だから心配になるんですわ。いくら東京にいるときめたつて、
きめただけの思案しあんじゃ仕方がないじゃありませんか」

「おまえどうも御前はむやみに心配性でいけない」

「心配もしますわ、どこへいらしても折おりあい合がわるくつちや、

おやめになるんですもの。私が心配性なら、あなたはよっぽど癩んしゃくも持もちですわ」

「そうかも知れない。しかしおれの癩癩は……まあ、いいや。どうにか東京で食えるようにするから」

「御お兄あにさんの所へいらしって御頼みなすったら、どうでしょう」

「うん、それも好いがね。兄はいつたい人の世話なんかする男じゃないよ」

「あら、そう何でも一人できめて御おしまいになるから悪るいんですわ。昨日きのうもあんなに親切にいろいろ言つて下さつたじゃありませんか」

「昨日か。昨日はいろいろ世話を焼くような事を言つた。言つた

がね……」

「言ってもいけないんですか」

「いけないよ。言うのは結構だが……あんまり当あてにならないからな」

「なぜ？」

「なぜって、その内だんだんわかるさ」

「じゃ御友達の方にも願って、あしたからでも運動をなすつたらいいでしょう」

「友達って別に友達なんかありやしない。同級生はみんな散ってしまった」

「だって毎年年始状を御寄およこしになる足立あだちさんなんか東京で立派

にしていらつしやるじゃありませんか」

「足立か、うん、大学教授だね」

「そう、あなたのように高くばかり構えていらつしやるから人に嫌きらわれるんですよ。大学教授だねって、大学の先生になりや結構じゃありませんか」

「そうかね。じゃ足立の所へでも行つて頼んで見ようよ。しかし金さえ取れば必ず足立の所へ行く必要はなからう」

「あら、まだあんな事を云つていらつしやる。あなたはよつぽど強情ね」

「うん、おれはよつぽど強情だよ」

二

午ごに逼せまる秋の日は、頂いただく帽とを透とおして頭ず蓋がい骨こつのなかさえ朗ほがらかならしめたかの感がある。公園の口ハ台はその口ハ台たるの故ゆえをもつてことごとく口ハ的に占領されてしまった。高たか柳やなぎ君くんは、どこぞ空あいた所はあるまいかと、さつきからちようど三度日比谷を巡回した。三度巡回して一脚の腰掛も思うように我を迎えないのを発見した時、重そうな足を正門のかたへ向けた。すると反対の方から同年輩の青年が早足に這はい入いつて来て、やあと声を掛けた。「やあ」と高柳君も同じような挨拶あいさつをした。「どこへ行つたんだい」と青年が聞く。

「今ぐるぐる巡まわつて、休もうと思つたが、どこも空あいていない。

駄目だめだ、ただで掛けられる所はみんな人が先へかけている。なか
なか抜目ぬけめはないもんだな」

「天氣がいいせいだよ。なるほど随分人が出ているね。——おい、
あの孟宗藪もうそうやぶを回つて噴水の方へ行く人を見たまえ」

「どれ。あの女か。君の知つてる人かね」

「知るものか」

「それじゃ何で見る必要があるのだい」

「あの着物の色さ」

「何だか立派なものを着ているじゃないか」

「あの色を竹藪の傍へ持つて行くと非常にあざやかに見える。あ

れは、こう云う透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ」

「そうかな」

「そうかなって、君そう感じないか」

「別に感じない。しかし奇麗きれいは奇麗だ」

「ただ奇麗だけじゃ可哀かわいそう想だ。君はこれから作家になるんだらう」

「そうさ」

「それじゃもう少し感じが鋭敏でなくつちや駄目だぜ」

「なに、あんな方は鈍くつてもいいんだ。ほかに鋭敏なところが
沢山あるんだから」

「ハハハハそう自信があれば結構だ。時に君せつかく逢つたものだから、もう一遍あるこうじやないか」

「あるくのは、真平だ。これからすぐ電車へ乗つて帰えらないと午食を食い損なう」

「その午食を奢ろうじやないか」

「うん、また今度にしよう」

「なぜ？ いやかい」

「厭じやない——厭じやないが、始終御馳走にばかりなるから」

「ハハハ遠慮か。まあ来たまえ」と青年は否応なしに高柳君を

公園の真中の西洋料理屋へ引つ張り込んで、眺望のいい二階

へ陣を取る。

注文の来る間、高柳君は蒼い顔へ両手で突つかい棒をして、さもつかれたと云う風に往来を見ている。青年は独りで「ふんだいぶ広いな」「なかなか繁昌すると見える」「なんだ、妙な所へ姿見の広告などを出して」などと半分口のうちに云うかと思つたら、やがて洋袴の隠袋へ手を入れて「や、しまった。煙草を買つてくるのを忘れた」と大きな声を出した。

「煙草なら、ここにあるよ」と高柳君は「敷島」の袋を白い卓布の上へ抛り出す。

ところへ下女が御詔を持って来る。煙草に火を点ける間はなかつた。

「これは樽麦酒だね。おい君樽麦酒の祝杯を一つ挙げようじゃ

ないか」と青年は琥珀色こはくいろの底から湧わき上がる泡あわをぐいと飲む。

「何の祝杯を挙げるのだい」と高柳君は一口飲みながら青年に聞いた。

「卒業祝いさ」

「今頃卒業祝いか」と高柳君は手のついた洋盃コップを下へおろしてしまつた。

「卒業は生涯しょうがいにたった一度しかないんだから、いつまで祝つてもいいさ」

「たった一度しかないんだから祝わないでもいいくらいだ」

「僕とまるで反対だね。——姉さん、このフライは何だい。え？

鮭さけか。ここん所ところへ君、このオレンジの露をかけて見たまえ」と

青年は人指指ひとさしゆびと親指の間からちゆうと黄色い汁を鮭こころもの衣の上へ落す。庭の面おもてにはらはらと降る時雨しぐれのごとく、すぐ油の中へ吸い込まれてしまった。

「なるほどそうして食うものか。僕は裝飾についてるのかと思つた」

姿見の札幌麦酒さっぽろビールの広告の本もとに、大きくなつて構えていた二人の男が、この時急に大きな破われるような声を出して笑い始めた。高柳君はオレンジをつまんだまま、厭な顔をして二人を見る。二人はいつこう構わない。

「いや行くよ。いつでも行くよ。エへへへ。今夜行こう。あんまり気が早い。ハハハハハ」

「エへへへへ。いえね、実はね、今夜あたり君を誘って繰り出そうと思つていたんだ。え？　ハハハハ。なにそれほどでもない。

ハハハハ。そら例のが、あれでしょう。だから、どうにもこうにもやり切れないのさ。エへへへへ、アハハハハハハ」

土鍋どなべの底のような赭あかい顔が広告の姿見に写つて崩くずれたり、かたまつたり、伸びたり縮んだり、傍ぼう若無じやくぶじん人に動揺どうごうしている。高

柳君は一種異様な厭な眼つきを転じて、相手の青年を見た。

「商人だよ」と青年が小声に云う。

「実業家かな」と高柳君も小声に答えながら、とうとうオレンジしほを絞しぼるのをやめてしまった。

土鍋の底は、やがて勘定を払って、ついでに下女にからかつて、

二階を買い切ったような大きな声を出して、そうして出て行った。

「おい中野君」

「むむ？」と青年は鳥の肉を口いっぱい頬張ほおばっている。

「あの連れんじゆう中は世の中を何と思ってるだろう」

「何とも思うものかね。ただああやって暮らしているのさ」

「羨うらやましいな。どうかして——どうもいかな」

「あんなものが羨しくつちや大変だ。そんな考だから卒業祝に同意しないんだろう。さあもう一杯景気よく飲んだ」

「あの人が羨ましいのじゃないが、ああ云う風に余裕があるような身分が羨ましい。いくら卒業したってこう奔命ほんめいに疲れちや、少しも卒業のありがた味はない」

「そうかなあ、僕なんざ嬉しくつてたまらないがなあ。我々の生命はこれからだぜ。今からそんな心細い事を云つちやあしようがない」

「我々の生命はこれからだのに、これから先が覚束ないから厭おぼつかになつてしまふのさ」

「なぜ？ 何もそう悲観する必要はないじゃないか、大おおにやるさ。

僕もやる気だ、いっしよにやろう。大に西洋料理でも食つて——
 そらビステキが来た。これでおしまいだよ。君ビステキの生焼なまやき
 は消化がいいって云うぜ。こいつはどうかな」と中野君は洋刀ナイフ
 揮ふるつて厚切あつぎりの一いっぺん片まんなかを中央から切断した。

「なあるほど、赤い。赤いよ君、見たまえ。血が出るよ」

高柳君は何にも答えずにむしやむしや赤いビステキを食い始めた。いくら赤くてもけつして消化がよさそうには思えなかつた。

人にわが不平を訴えんとするとき、わが不平が徹底せぬうち、

先方から中途半把ちゆうとはんぱな慰藉いしやを与えらるるのは快こころよくないものだ。

わが不平が通じたのか、通じないのか、本当に気の毒がるのか、

御世辞おせじに気の毒がるのか分らない。高柳君はビステキの赤さ加減

を眺ながめながら、相手はなぜこう感情が粗大そだいだろうと思つた。もう

少し切り込みたいと云う矢先やさきへ持つて来て、ざああと水を懸かける

のが中野君の例である。不親切な人、冷淡な人ならば始めからそ

れ相応の用意をしてかかるから、いくら冷たくても驚きづろく気遣かい

はない。中野君がかような人であつたなら、出鼻をはたかれても

さほどに口惜くやしくはなかつたろう。しかし高柳君の眼に映なずる中野輝かのきいち一は美しい、賢かい、よく人情を解わして事理を弁まえた秀才である。この秀才が折々この癖を出すのは解かいしにくい。

彼らは同じ高等学校の、同じ寄宿舎の、同じ窓に机を並べて生活して、同じ文科に同じ教授の講義を聴いて、同じ年のこの夏に同じく学校を卒業したのである。同じ年に卒業したものは両手の指を二三度屈するほどいる。しかしこの二人ぐらい親しいものはなかつた。

高柳君は口数をきかぬ、ひとまじわ人交りをせぬ、えんせい厭世家の皮肉屋と云われた男である。中野君は鷹揚おうような、円満な、趣味に富んだ秀才である。この兩人ふたりが卒然まじわりていと交を訂してから、はため傍目にも不審と

思われるくらい昵懇じつこんな間柄あいだがらとなつた。運命は大島おおしまの表と秩父ちちぶの裏とを縫い合せる。

天下に親しきものがただ一人ひとりあつて、ただこの一人よりほかに親しきものを見出し得ぬとき、この一人は親でもある、兄弟でもある。さては愛人である。高柳君は単なる朋友ほうゆうをもつて中野君をもく目してはおらぬ。その中野君がわが不平を残りなく聞いてくれぬのは残念である。途中で夕立に逢つて思う所へ行かずに引き返したようなものである。残りなく聞いてくれぬ上に、呑気のんきな慰藉いしやをかぶせられるのはなおさら残念だ。膿うみを出してくれと頼んだ腫し物を、いい加減の真綿まわたで、撫なで廻まわわされたつてむず痒がゆいばかりである。

しかしこう思うのは高柳君の無理である。御雛様おひなさまに芸者の立たて引ひきがないと云つて攻撃するのは御雛様の恋を解かいせぬもの言いいぐさ草である。中野君は富裕ふゆうな名門に生れて、暖かい家庭に育つたほか、浮世の雨風は、炬燵こたつへあたって、椽えんがわ側の硝子戸ガラスどこし越なぎに眺ながめたびかりである。友禅ゆうぜんの模様はわかる、金屏きんびようの冴さえも解せらる、銀燭ぎんしょくの耀かがやきもまばゆく思う。生きた女の美しさはなおさらに眼に映る。親の恩、兄弟の情、朋友の信、これらを知らぬほどの木強漢ぼつきやうかんでは無論ない。ただ彼の住む半球には今までいつでも日が照っていた。日の照っている半球に住んでいるものが、片足をとんと地に突いて、この足の下に真暗な半球があると気がつくのは地理学を習つた時ばかりである。たまには歩いていて、

気がつかぬとも限らぬ。しかしさぞ暗い事だろうと身に沁しみみてぞつとする事はあるまい。高柳君はこの暗い所に淋しく住んでいる人間である。中野君とはただ大地を踏まえる足の裏が向き合っているというほかに何らの交渉もない。縫い合わされた大島の表と秩父の裏とは覚おぼつか束なき針の目を忍んで繋つなぐ、細い糸の御蔭おかげである。この細いものを、するすると抜けば鹿児島県と埼玉県の間には依然として何百里の山河さんがよこたが横わっている。歯を病やんだ事のないものに、歯の痛みを持って行くよりも、早く歯医者に馳かけつけるのが近道だ。そう痛がらんでもいいさと云われる病人は、けつして慰藉を受けたとは思うまい。

「君などは悲観する必要がないから結構だ」と、ビステキを半分

で断念した高柳君は敷島をふかしながら、相手の顔を眺めた。相手は口をもがもがさせながら、右の手を首と共に左右に振ったのは、高柳君に同意を表しないのと見える。

「僕が悲観する必要がある？　悲観する必要があるとすると、つまりおめでたい人間と云う意味になるね」

高柳君は覚ええず、薄い唇くちびるを動かしかけたが、微かすかな漣さざなみは頬ほおまで広がらぬ先に消えた。相手はなお言葉をつづける。

「僕だって三年も大学にいて多少の哲学書や文学書を読んでるじゃないか。こう見えても世の中が、どれほど悲観すべきものであるかぐらいは知ってるつもりだ」

「書物の上でだろう」と高柳君は高い山から谷底を見下ろしたよ

うに云う。

「書物の上——書物の上では無論だが、実際だって、これでなかなか苦痛もあり煩悶はんもんもあるんだよ」

「だって、生活には困らないし、時間は充分あるし、勉強はしたいだけ出来るし、述作は思う通りにやれるし。僕に較くらべると君は実に幸福だ」と高柳君今度はさも羨うらやましそうに嘆息する。

「ところが裏面はなかなかそんな気楽なんじゃないさ。これでもいろいろ心配があつて、いやになるのだよ」と中野君は強しいて心配の所有権を主張している。

「そうかなあ」と相手は、なかなか信じない。

「そう君まで茶かしちや、いよいよつまらなくなる。実は今日あ

たり、君の所へでも出掛けて、大に同情してもらおうかと思つていたところさ」

「訳わけをきかせなくつちや同情も出来ないね」

「訳はだんだん話すよ。あんまり、くさくさするから、こうやつて散歩に来たくらいなものさ。ちつとは察するがいい」

高柳君は今度は公然とにやにやと笑つた。ちつとは察するつもりでも、察しようがないのである。

「そうして、君はまたなんで今頃公園なんか散歩しているんだね」と中野君は正面から高柳君の顔を見たが、

「や、君の顔は妙だ。日の射さしている右側の方は大変血色がいいが、影になつてゐる方は非常に色いろつや沢が悪い。奇妙だな。鼻を境に

矛盾が睨めこをしている。悲劇と喜劇の仮面を半々につぎ合せたようだ」と息もつがず、述べ立てた。

この無心の評を聞いた、高柳君は心の秘密を顔の上で読まれたように、はっと思うと、右の手で額の方から顎のあたりまで、ぐりりと撫で廻わした。こうして顔の上の矛盾をかき混ぜるつもりなのかも知れない。

「いくら天気がよくつても、散歩なんかする暇はない。今日は新橋の先まで遺失品を探がしに行つてその帰りがけにちよつとついだから、ここで休んで行こうと思つて来たのさ」と顔を攪き廻した手を顎の下へかかつて依然として浮かぬ様子をする。悲劇の面と喜劇の面をまぜ返えたから通例の顔になるはずであるのに、

妙に濁ったものが出来上ってしまった。

「遺失品で、何を落したんだい」

「昨日電車の中で草稿きこうを失って——」

「草稿？ そりや大変だ。僕は書き上げた原稿が雑誌へ出るまでは心配でたまらない。実際草稿なんてものは、吾々われわれに取って、命より大切なものだからね」

「なに、そんな大切な草稿でも書ける暇があるようだといいんだけれども——駄目だ」と自分を軽蔑けいべつしたような口調くちようで云う。

「じゃ何の草稿だい」

「地理教授法の訳やくだ。あしたまでに届けるはずにしてあるのだから、今なくなっちゃ原稿料も貰えず、またやり直さなくっちゃな

らず、実に厭いやになつちまう」

「それで、探さがしに行つても出て来こないのかい」

「来ない」

「どうしたんだろう」

「おおかた車掌が、うちへ持つて行つて、はたきでも拵こしらえただ
ろう」

「まさか、しかし出なくつちや困るね」

「困るなあ自分の不注意と我慢するが、その遺失品係りの厭いやな奴
だ事つて——実に不親切で、形式的で——まるで版はん行こうにおした

ような事をぺらぺらと一通り述べたが以上、何を聞いても知りま
せん知りませんで持ち切っている。あいつは廿世紀の日本人を代

表している模範的人物だ。あすこの社長もきつとあんな奴ちがに違がいない」

「ひどく癩しやくさわに障さわつたものだね。しかし世の中はその遺失品係りのようなのばかりじゃないからいいじゃないか」

「もう少し人間らしいのがいるかい」

「皮肉な事を云う」

「なに世の中が皮肉なのさ。今の世のなかは冷酷の競進きようしん会かい見たよなものだ」と云いながら呑みかけの「敷島」を二階の欄干てすりから、下へ抛なげる途端とたんに、ありがとうと云う声こゑがして、ぬつと門か口ぐちを出た二人連ふたりづれの中折帽の上へ、うまい具合もえがらに燃殻もえがらが乗のつかった。男は帽子から煙を吐いて得意得意になつて行く。

「おい、ひどい事をするぜ」と中野君が云う。

「なに過あやまちだ。——ありや、さっきの実業家だ。構うもんか抛ほうつて置け」

「なるほどさっきの男だ。何で今までぐずぐずしていたんだらう。下で球たまでも突いていたのか知らん」

「どうせ遺失品係りの同類だから何でもするだらう」

「そら気がついた——帽子を取ってはたいている」

「ハハハハ滑こっけい稽だ」と高柳君は愉快そうに笑った。

「随分人が悪いなあ」と中野君が云う。

「なるほど善くないね。偶然とは申しながら、あんな事かたきで仇かたきを打つのは下等だ。こんな真似をして嬉しがるようでは文学士の価値ねうち

もめちやめちやだ」と高柳君は瞬時にしてまた元の浮かぬ顔にかえる。

「そうさ」と中野君は非難するような賛成するような返事をする。「しかし文学士は名前だけで、その実は筆耕ひつこうだからな。文学士にもなつて、地理教授法の翻訳の下働したばたらきをやつてるようじゃ、心細い訳わけだ。それでも僕が卒業したら、卒業したらつて待つてくれた親もあるんだからな。考えると気の毒なものだ。この様子じゃいつまで待つてくれたつて仕方がない」

「まだ卒業したばかりだから、そう急に有名にはなれないさ。そのうち立派な作物さくぶつを出して、大に本領おおいを發揮する時に天下は我々のものとなるんだよ」

「いつの事やら」

「そう急せいたつて、いけない。追々新陳代謝してくるんだから、何でも気を永くして尻すを据すえてかからなくっちゃ、駄目だ。なに、世間じゃ追々我々の真価を認めて来るんだからね。僕なんぞでもこうやって始し終ゆう書ゆういと少しは人の口に乗るからね」

「君はいいさ。自分の好きな事を書く余裕があるんだから。僕なんか書きたい事はいくらでもあるんだけど落ちついて述作なぞをする暇はとてもない。実に残念でたまらない。保護者でもあって、気楽に勉強が出来ると名作も出して見せるがな。せめて、何でもいいから、月々きまつて六十円ばかり取れる口があるといいのだけでも、卒業前から自活はしていたのだが、卒業しても

やっぱりこんなに困難するだろうとは思わなかった」

「そう困難じゃ仕方がない。僕のうちの財産が僕の自由になると、保護者になってやるんだがな」

「どうか願います。——実に厭いやになってしまふ。君、今考えると田舎の中学の教師の口だって、容易にあるもんじゃないな」

「そうだろうな」

「僕の友人の哲学科を出たものなんか、卒業してから三年になるが、まだ遊あそんでるぜ」

「そうかな」

「それを考えると、子供の時なんか、訳もわからずに悪い事をしたもんだね。もつとも今とその頃とは時勢が違うから、教師の口

も今ほど^{ふつてい}払底でなかつたかも知れないが」

「何をしたんだい」

「僕の国の中学校に白井道也^{しらいどうや}と云う英語の教師がいたんだがね」

「道也た妙な名だね。釜^{かま}の銘^{めい}にありそうじゃないか」

「道也^{どうや}と読むんだか、何だか知らないが、僕らは道也、道也つて

呼んだものだ。その道也先生がね——やっぱり君、文学士だぜ。

その先生をとうとうみんなして追い出してしまった」

「どうして」

「どうしてつて、ただいじめて追い出しちまったのさ。なに良い^い

先生なんだよ。人物や何かは、子供だからまるでわからなかつたが、どうも悪るい人じゃなかつたらしい……」

「それで、なぜ追い出したんだい」

「それがさ、中学校の教師なんて、あれでなかなか悪るい奴がいるもんだぜ。僕らあ煽せんどう動どうされたんだね、つまり。今でも覚えてるが、夜よる十五六人で隊を組んで道也先生の家の前うちへ行つてワ
ーって呐とつかん喊かんして二つ三つ石を投げ込んで来るんだ」

「乱暴だね。何だって、そんな馬鹿な真似まねをするんだい」

「なぜだかわからない。ただ面白いからやるのさ。おそらく吾々の仲間でなぜやるんだか知つてたものは誰もあるまい」

「気楽だね」

「実に気楽さ。知つてるのは僕らを煽せんどう動どうした教師ばかりだろう。

何でも生意氣なまいきだからやれつて云うのさ」

「ひどい奴だな。そんな奴が教師にいるかい」

「いるとも。相手が子供だから、どうしても云う事を聞くからかも知れないが、いるよ」

「それで道也先生どうしたい」

「辞職しちまった」

「可かわいそう哀そう想到」

「実に気の毒な事をしたもんだ。定めし転任先をさがす間かっけい活計に困ったろうと思つてね。今度逢つたら大おおに謝罪の意を表するつもりだ」

「今どこにいるんだい」

「どこにいるか知らない」

「じやいつ逢うか知れないじやないか」

「しかしいつ逢うかわからない。ことによると教師の口がなくなつて死んでしまったかも知れないね。——何でも先生辞職する前に教場へ出て来て云つた事がある」

「何て」

「諸君、吾々は教師のために生きべきものではない。道のために生きべきものである。道は尊たつといものである。この理窟りくつがわからない。うちの、まだ一人前になつたのではない。諸君も精出してわかるようにおなり」

「へえ」

「僕らは不あいかわらず相変教場内でワーッと笑つたあね。生意氣だ、生意

気だつて笑つたあね。——どつちが生意気か分りやしない」

「随分田舎の学校などにや妙な事があるものだね」

「なに東京だつて、あるんだよ。学校ばかりじやない。世の中はみんなこれなんだ。つまらない」

「時にだいぶ長話しをした。どうだ君。これから品川の妙花園みょうかえんまで行かないか」

「何しに」

「花を見にさ」

「これから帰つて地理教授法を訳さなくつちやならない」

「いちんち一日ぐらい遊んだつてよかろう。ああ云う美しい所へ行く
と、好い心持ちになつて、翻訳もはかが行くぜ」

「そうかな。君は遊びに行くのかい」

「遊あそびかたがたさ。あすこへ行つて、ちよつと写生して来て、材料にしようと思つてるんだがね」

「何の材料に」

「出来たら見せるよ。小説をかいているんだ。そのうちの一章に女が花はな園ぞののなかに立つて、小さな赤い花を余念よねんなく見詰みつめると、その赤い花がだんだん薄くなつてしまいに真白になつてしまふと云うところを書いて見たいと思うんだがね」

「空想小説かい」

「空想的で神秘的で、それで遠い昔しが何だかなつかしいような気持のするものが書きたい。うまく感じが出ればいいが。まあ出

来たら読んでくれたまえ」

「妙花園なんざ、そんな参考にやならないよ。それよりかうちへ帰ってホルマン・ハントの画えでも見る方がいい。ああ、僕も書きたい事があるんだがな。どうしても時がない」

「君は全体自然がきらいだから、いけない」

「自然なんて、どうでもいいじゃないか。この痛切な二十世紀にそんな気楽な事が云っていられるものか。僕のは書けば、そんな夢見たようなものじゃないんだからな。奇麗きれいでなくつても、痛くつても、苦しくつても、僕の内面の消息にどこか、触れていればそれで満足するんだ。詩的でも詩的でなくつても、そんな事は構わない。たとい飛び立つほど痛くつても、自分で自分の身体からだを切

つて見て、なるほど痛いなど云うところを充分書いて、人に知らせてやりたい。呑気のんきなものや気楽なものはどうてい夢にも想像し得られぬ奥の方にこんな事実がある、人間の本体はここにあるのを知らないかと、世の道楽ものに教えて、おやそうか、おれは、まさか、こんなものとは思っていなかったが、云われて見るとなるほど一言いちごんもない、恐れ入ったと頭を下げさせるのが僕の願なんだ。君とはだいたい方角が違う」

「しかしそんな文学は何だか心持ちがわるい。——そりや御随意だが、どうだい妙花園みょうかえんに行く気はないかい」

「妙花園へ行くひまがあれば一頁ペーヅでも僕の主張をかくがなあ。何だか考えると身体がむずむずするようだ。実際こんなに呑気のんきにし

て、生焼なまやきのビステツキなどを食つちやいられないんだ」

「ハハハハまたあせる。いいじゃないか、さつきの商人見たよう
な連れんじゆう中もいるんだから」

「あんなのがいるから、こつちはなお仕事をしたくなる。せめて、
あの連中の十分ぶ一の金と時があれば、書いて見せるがな」

「じゃ、どうしても妙花園は不賛成かね」

「遅くなるもの。君は冬服を着ているが、僕はいまだに夏服だか
ら帰りに寒くなって風でも引くといけない」

「ハハハハ妙な逃げ路を発見したね。もう冬服の時節だあね。着
換えればいい事を。君は万事無精ぶしようだよ」

「無精で着換えないんじゃない。ないから着換えないんだ。この

夏服だつて、まだ一文も払つていやしない」

「そうなのか」と中野君は氣の毒な顔をした。

午飯ひるめしの客は皆去り尽して、二人が椅子いすを離れた頃はところどころの卓布たくふの上に麵麩屑パンくずが淋しく散らばつていた。公園の中は最

前よりも一層賑にぎやかである。ロハ台は依然として、どこの何某なにがしか知らぬ男と知らぬ女で占領されている。秋の日は赫かつとして夏服の背中を通す。

三

櫓ひのきとびらの扉に銀のような瓦かわらを載せた門を這入ると、御影みかげの敷石に水

を打つて、斜ななめに十歩ばかり歩あゆませる。敷石の尽きた所に擦すり硝ガ子の開ラスき戸が左右から寂じやくねん然とぎと鎖とぎされて、秋の更ふくるに任まかすがごとく邸内は物静かである。

磨みがき上げた、柁まさの柱ぞうげに象牙へその臍へそをちよつと押すと、しばらくして奥の方から足音が近づいてくる。がちやと鍵かぎをひねる。玄関の扉は左右に開かれて、下は鏡のようなたたきとなる。右の方に周ま圍わり一尺しやくよ余いの朱泥しゆでいまがいの鉢はちがあつて、鉢はちのなかには棕しゆくちく栝くわく竹ちくが二三本ななび靡なびくべき風も受けずに、ひそやかに控えている。正面には高さ四尺の金きん屏びやうに、三さん条じやうの小鍛冶こかじが、異い形ぎやうのものを相あい槌づちに、靈夢れいむに叶かなう、御門みかどの太刀たちを丁ちやうと打ち、丁ちやうと打っている。取次に出たのは十八九のしとやかな下女である。白井道也しらいどうやと云い

う名刺を受取つたまま、あの若旦那様で？ と聞く。道也先生は首を傾かたむけてちよつと考えた。若旦那にも大旦那にも中野と云う人に逢うのは今が始めてである。ことによるとまるで逢えないで帰るかも計はかられん。若旦那が大旦那かは逢つて始めてわかるのである。あるいは分らないで生しょうが涯がいそれぎりになるかも知れない。今まで訪問に出懸でかけて、年寄か、小供か、跛ちんぱか、眼つかちか、要領を得る前に門前から追い還かえされた事は何遍もある。追い還されさえしなければ大旦那か若旦那かは問うところでない。しかし聞かれた以上はどつちか片づけなければならん。どうでもいい事を、どうでもよくないように決断しろと逼せまらるる事は賢けんじゃ者が愚物ぐぶつに對して払う租税である。

「大学を御卒業になつた方の……」とまで云つたが、ことによると、おやじも大学を卒業しているかも知れんと心づいたから

「あの文学をおやりになる」と訂正した。下女は何とも云わずに御辞儀おじぎをして立つて行く。白足袋しろたびの裏だけが目立ってよごれて見える。道也先生の頭の上には丸く鉄を鑄い抜ぬいた、かな灯籠どうろうがぶら下がっている。波に千鳥をすかして、すかした所に紙が張つてある。このなかへ、どうしたら灯ひがつけられるのかと、先生は仰あ向むいて長い鎖くさりを眺ながめながら考えた。

下女がまた出てくる。どうぞこちらへと云う。道也先生は親指くぼの凹くぼんで、前緒まえおのゆるんだ下駄くつを立派な沓くつぬぎ脱ぬぎへ残して、ひよろ長い糸瓜へちまのようなからだを下女の後ろから運んで行く。

応接間は西洋式に出来ている。丸い卓テーブルには、薔薇ばらの花を模様かに崩くずした五六輪を、淡い色で織り出したテーブル掛かけを、雑作ぞうさもなく引き被かぶせて、末は同じ色合の絨じゆうたん毯とと、続つづくがごとく、切れたるがごとく、波えがを描えがいて床ゆかの上に落おちている。暖炉だんろは塞ふさいだままの一尺前に、二枚折にまいおりの小屏風こびようぶを穴隠あなかくしに立ててある。窓掛どんすは緞子えびちやいろの海老茶色だから少々全体の装飾上調和を破るようだが、そんな事は道也先生の眼には入いらない。先生は生れてからいまだかつてこんな奇麗きれいな室へやへ這入はいった事はないのである。

先生は仰いで壁間へきかんの額を見た。京の舞子が友禅ゆうぜんの振袖ふりそでに鼓つづみを調べている。今打うって、鼓から、白い指が弾はじき返されたばかりの姿が、小指の先までよくあらわれている。しかし、そんな事

に氣のつく道也先生ではない。先生はただ氣品のない画えを掛けたものだと思つたばかりである。向むこうの隅すみにヌーボー式の書棚があつて、美しい洋書の一部が、窓掛の隙間すきまから洩もれて射さす光線に、金文字の甲羅こうらを干ほしている。なかなか立派である。しかし道也先生これには毫ごうも辟易へきえきしなかつた。

ところへ中野君が出てくる。紬つむぎの綿入ちりめんに縮緬へこおびの兵子帯へこおびをぐるぐる巻きつけて、金縁きんぶちの眼鏡めがね越こしに、道也先生をまぼしそうに見て、「や、御待たせ申しまして」と椅子へ腰をおろす。

道也先生は、あやしげな、銘仙めいせんの上おほを蔽おほうに黒木綿くろもめんの紋付をもつてして、嘉平次平かへいじひらの下へ両手を入れたまま、

「どうも御邪魔をします」と挨拶あいさつをする。泰然たいぜんたるものだ。

中野君は挨拶が済んでからも、依然としてまぼしそうにしていたが、やがて思い切った調子で

「あなたが、白井道也とおっしゃるんで」と大なる好奇心をもつて聞いた。聞かんでも名刺を見ればわかるはずだ。それをかように聞くのは世馴れぬ文学士だからである。

「はい」と道也先生は落ちついている。中野君のあては外れた。

中野君は名刺を見た時はつと思つて、頭のなかは追い出された中学校の教師だけになっている。可哀想だと云う念頭に尾羽うち枯らした姿を目前に見て、あなたが、あの中学校で生徒からいじめられた白井さんですかと聞き糺したくてならない。いくら気の毒でも白井違いで気の毒がったのでは役に立たない。気の毒がる

ためには、聞き糺すためには「あなたが白井道也とおつしやるんで」と切り出さなくつてはならなかつた。しかしせつかくの切り出しようも泰然たる「はい」のために無駄死むだじにをしてしまった。初しよしん
心なる文学士は二の句をつぐ元氣も作さりやく略もないのである。人に同情を寄せたいと思うとき、向むこうが泰然の具足で身を固めていては芝居にはならん。器用なものはこの泰然の一角いっかくを針で突き透とおしても思おもを遂いげる。中野君は好人物ながらそれほどに人を取り扱あつかい得るほど世の中を知らない。

「実は今日御邪魔に上がったのは、少々御願があつて参つたのですが」と今度は道也先生の方から打つて出る。御願は同情の好敵手である。御願を持たない人には同情する張り合がない。

「はあ、何でも出来ます事なら」と中野君は快く承知した。

「実は今度江湖雜誌こうこざつしで現代青年の煩悶はんもんに対する解決と云う題で諸先生方の御高説を発表する計画がありました、それで普通の大家ばかりでは面白くないと云うので、なるべく新しい方もそれぞれ訪問する訳になりましたので——そこで実はちよつと往つて来てくれと頼まれて来たのですが、御差支おさしつかえがなければ、御話を筆記して参りたいと思います」

道也先生は静かに懐ふところから手帳と鉛筆を取り出した。取り出しはしたものの別に筆記したい様子もなければ強しいて話させたい景色けしきも見えない。彼はかかる愚ぐな問題を、かかる青年の口から解決して貰もらいたいとは考えていない。

「なるほど」と青年は、耀かがやく眼を挙あげて、道也先生を見たが、先生は宵よいごし越の麦酒ビールのごとく気の抜けた顔をしているので、今度は「さよう」と長く引つ張つて下を向いてしまった。

「どうでしょう、何か御説はありますまいか」と催促を義理ずくめにする。ありませんと云つたら、すぐ帰る気かも知れない。

「そうですね。あつたつて、僕のようなものの云う事は雑誌へ載のせる価値はありませんよ」

「いえ結構です」

「全体どこから、聞いていらしたんです。あまり突然じや纏まとまつた話の出来るはずがないですから」

「御名前は社主が折々雑誌の上で拝見するそうで」

「いえ、どうしまして」と中野君は横を向いた。

「何でもよいですから、少し御話し下さい」

「そうですね」と青年は窓の外を見て 躊躇ちゆうちよしている。

「せっかく来たものですから」

「じゃ何か話しましょう」

「はあ、どうぞ」と道也先生鉛筆を取り上げた。

「いったい煩悶と云う言葉は近頃だいぶはやるようだが、大抵は当座のもので、いわゆる三日坊主みっかぼうずのものが多。そんな種類の煩悶は世の中が始まってから、世の中がなくなるまで続くので、ちつとも問題にはならないでしょう」

「ふん」と道也先生は下を向いたなり、鉛筆を動かしている。紙

の上を滑らす音が耳立って聞える。

「しかし多くの青年が一度は必ず陥る、また必ず陥るべく自然から要求せられている深刻な煩悶が一つある。……」

鉛筆の音がする。

「それは何だと云うと——恋である……」

道也先生はぴたりと筆記をやめて、妙な顔をして、相手を見た。中野君は、今さら気がついたようにちよつとしよげ返つたが、すぐ気を取り直して、あとをつづけた。

「ただ恋と云うと妙に御聞きになるかも知れない。また近頃はあまり恋愛呼ばりをするのを人が遠慮するようであるが、この種の煩悶は大なる事実であつて、事実の前にはいかなるものも頭を

下げねばならぬ訳だからどうする事も出来ないのである」

道也先生はまた顔をあげた。しかし彼の長い蒼白あおしろい相貌そうぼうの

一微塵いちみじんだも動いておらんから、彼の心のうちは無論わからない。

「我々が生しょう涯がいを通じて受ける煩悶はんもんのうちで、もつとも痛切

なもつとも深刻な、またもつとも劇烈な煩悶は恋よりほかにない

だろうと思うのです。それです、こう云う強大な威力のある

ものだから、我々が一度ひとたびこの煩悶の炎火えんかのうちに入ると非常な

変形をうけるのです」

「変形？　ですか」

「ええ形を変ずるのです。今まではただふわふわ浮いていた。世の中と自分の関係がよくわからないで、のんびんぐらりに暮ら

していたのが、急に自分が明瞭めいりょうになるんです」

「自分が明瞭とは？」

「自分の存在がです。自分が生きているような心持ちが確然と出てくるのです。だから恋は一方から云えば煩悶ぼんもんに相違ないが、しかしこの煩悶を経過しないと自分の存在を生涯悟さとる事が出来ないのです。この淨罪界に足を入れたものでなければ、天国へは登れまいと思うのです。ただ楽な天だつてしようがない。恋の苦くるみを嘗なめて人生の意義を確かめた上の楽天でなくっちゃ、うそです。それだから恋の煩悶は、けつして他の方法によつて解決されない。恋を解決するものは恋よりほかにないです。恋は吾人ごじんをして煩悶せしめて、また吾人をして解脱げだつせしむるのである。……」

「そのくらいなところで」と道也先生は三度目に顔を挙げた。

「まだ少しあるんですが……」

うけたまわ

「承るのはいいですが、だいぶ多人数の意見を載せるつもりですから、かえつてあとから削除さくじよすると失礼になりますから」

「そうですか、それじゃそのくらいにして置きましょう。何だかこんな話をするのは始めてですから、さぞ筆記しにくかったですよう」

「いいえ」と道也先生は手帳ふところを懐へ入れた。

青年は筆記者が自分の説を聴いて、感心の余り少しは賛辞でも呈するかと思つたが、相手は例のごとく泰然としてたたいいえと云つたのみである。

「いやこれは御邪魔をしました」と客は立ちかける。

「まあいいでしょう」と中野君はとめた。せめて自分の説を少々でも批評して行つて貰いたいのである。それでなくても、せんだつて日比谷で聞いた高柳君の事をちよつと好奇心から、あたつて見たいのである。一言いちごんにして云えば中野君はひまなのである。

「いえ、せつかくですが少々急ぎますから」と客はもう椅子いすを離れて、一步テーブルを退しりぞいた。いかにひまな中野君も「それでは」とついに降参して御辞儀おじぎをする。玄関まで送つて出た時思い切つて

「あなたは、もしや高柳たかやなぎしゅうさく周作しゅうさくと云う男を御存じじやないですか」と念晴ねんばらしのため聞いて見る。

「高柳？ どうも知らんようです」と沓脱くつぬぎから片足をタタキへおろして、高い背を半分後ろへ振り向けた。

「ことし大学を卒業した……」

「それじゃ知らん訳だ」と両足ともタタキの上へ運んだ。

中野君はまだ何か云おうとした時、敷石をがらがらと車の軋きしる音がして梶かじ棒ぼうは硝子の扉ガラスとびらの前にとまった。道也先生が扉を開く途端とたんに車上の人はひらり厚い雪駄せったを御影みかげの上に落した。五色の雲がわが眼を掠かすめて過ぎた心持ちで往来へ出る。

時計はもう四時過ぎである。深い碧みどりりの上へ薄いセピヤを流した空のなかに、はつきりせぬ鳶とびが一羽舞っている。雁かりはまだ渡つて来ぬ。向むこうから袴はかまの股立ちももだを取った小供が唱歌うたを謡いながら愉快

そうにあるいて来た。肩かたに担かいだ笹ささの枝には草の穂で作つくった梟ふくろうが踊りながらぶら下がって行く。おおかた雑ぞうし子しヶ谷やへでも行いつたのだらう。軒の深い菓物屋くだものやの奥の方に柿ばかりがあかるく見える。夕暮ゆふぐに近づくと何となくうそ寒い。

薬王寺やくおうじまゑ前に来たのは、帽子ぼうしの庇ひさしの下から往來ゆききの人の顔がしかと見分けのつかぬ頃である。三十三所じゅうじゅうさんと彫ほつてある石せき標ひょうを右みぎに見て、紺屋こんやの横町を半丁ほど西へ這入はいるとわが家やの門かど口ぐちへ出る、家いえのなかは暗い。

「おや御ご帰かへり」と細君が台所で云う。台所も玄関も大した相違さむのないほど小さな家である。

「下女はどっかへ行いつたのか」と二畳の玄関から、六畳の座敷へ

通る。

「ちよつと、柳町まで使に行きました」と細君はまた台所へ引き返す。

道也先生は正面の床の片隅（とこ）に寄せてあつた、洋灯（ランプ）を取つて、椽（え）側（んがわ）へ出て、手ずから掃除（そうじ）を始めた。何か原稿用紙のようなもので、油壺（あぶらつぼ）を拭（ふ）き、ほやを拭（ふ）き、最後に心の黒い所を好い加減になすくつて、丸めた紙は庭へ棄（す）てた。庭は暗くなつて様子が頓（とん）とわからない。

机の前へ坐つた先生は燐寸（マッチ）を擦（す）つて、しゆつと云う間（ま）に火をランプに移した。室（へや）はたちまち明（あきら）かになる。道也先生のために云えばむしろ明かるくならぬ方が増しである。床はあるが、言（い）訳（わけ）ば

かりで、現げんに幅ふくも何も懸かかつておらん。その代り累る々るいと書物やら、原稿紙やら、手帳やらが積んである。机は白木しらきの三さん宝ぼうを大きくしたくらいな単たん簡かんなもので、インキ壺つぼと粗末ひつけんな筆ひつけん、硯けんのほかには何物をも載のせておらぬ。装飾は道也先生にとつて不必要であるのか、または必要でもこれに耽ふける余裕がないのかは疑問である。ただ道也先生がこの一点おんきの温おん氣きなき陋ろう室しつに、晏あん如じよとして筆硯けんを呵かするの勇氣あるは、外部より見て争うべからざる事實である。ことによると先生は装飾以外のあるものを目的にして、生活しているのかも知れない。ただこの争うべからざる事實を確めれば、確かめるほど細君は不愉快である。女は装飾をもつて生れ、装飾をもつて死ぬ。多数の女はわが運命を支配する恋さえも装飾視し

て憚^{はば}からぬものだ。恋が装飾ならば恋の本尊たる愛人は無論装飾品である。否^{いな}、自己自身すら装飾品をもって甘んずるのみならず、装飾品をもって自己を^{もく}目してくれぬ人を評して馬鹿と云う。しかし多数の女はしかく人世を^{かん}観ずるにもかかわらず、しかく^{かん}観ずるとはけっして思わない。ただ自己の周囲を^{てんめん}纏綿する事物や人間がこの装飾用の目的に^{かな}叶わぬを^{かん}発見するとき、何となく不愉快を受ける。不愉快を受けると云うのに周囲の事物人間が依然として旧態をあらためぬ時、わが眼に映ずる不愉快を左右前後に反射して、これでも改めぬかと云う。ついにはこれでもか、これでもかと念入りの不愉快を反射する。道也の細君がここまで進歩しているかは疑問である。しかし普通一般の女性であるからには装飾気

なきこの空気のうちに生息せいそくする結果として、自然この方向に進行するのが順当であろう。現に進行しつつあるかも知れぬ。

道也先生はやがて懐ふところから例の筆記帳を出して、原稿紙の上へ写し始めた。袴はかまを着けたままである。かしまつたままである。袴を着けたまま、かしまつたまま、中野輝一なかのきいちの恋愛論を筆記している。恋とこの室へや、恋とこの道也とはどうてい調和しない。道也は何と思つて浄書しているかしらん。人は様々である、世も様々である。様々の世に、様々の人が動くのもまた自然の理である。ただ大きく動くものが勝ち、深く動くものが勝たねばならぬ。道也は、あの金縁きんぶちの眼鏡めがねを掛けた恋愛論よりも、小さくかつ浅いと自覚して、かく慎重に筆記を写し直しているのであるか。床とこ

の後ろでうしが鳴こおろぎいている。

細君が襖ふすまをすうと開けた。道也は振り向きもしない。「まあ」と云ったなり細君の顔は隠れた。

下女は帰ったようである。煮豆にまめが切れたから、てつか味噌みそを買って来たと云っている。豆腐とうふが五厘高くなつたと云っている。裏の専念寺で夕ゆうべの御務おつとめをかあんかあんやつている。

細君の顔がまた襖の後ろから出た。

「あなた」

道也先生は、いつの間にやら、筆記帳を閉じて、今度はまた別の紙へ、何か熱心したたに認めている。

「あなた」と妻君は二度呼んだ。

「何だい」

「御飯です」

「そうか、今行くよ」

道也先生はちよつと細君と顔を合せたぎり、すぐ机へ向つた。

細君の顔もすぐ消えた。台所の方でくすくす笑う声がある。道也先生はこの一節をかき終るまでは飯も食いたくないのだろう。やがて句切りのよい所へ来たと見えて、ちよつと筆を擱いて、傍へ積んだ草稿をはぐつて見て「二百三十一頁」と独語した。著述でもしていると見える。

立つて次の間へ這入る。小さな長火鉢に平鍋がかかつて、白い豆腐が煙りを吐いて、ふるふる顫えている。

「湯豆腐かい」

「はあ、何にもなくて、御気の毒ですが……」

「何、なんでもいい。食つてさえいれば何でも構わない」と、膳ぜんにして重じゅうぼこ箱をかねたるごとき四角なものの前へ坐つて箸はしを執とる。

「あら、まだ袴はかまを御脱ぎなさらないの、随分ね」と細君は飯を盛つた茶碗を出す。

「忙いそがしいものだから、つい忘れた」

「求めて、忙おそがしい思おもいをしていらつしやるのだから、……」と云つたぎり、細君は、湯豆腐の鍋なべと鉄てつ瓶びんとを懸かけ換かえる。

「そう見えるかい」と道也先生は存外平気である。

「だって、楽で御金の取れる口は断っておしまいなすって、忙がしくって、一文にもならない事ばかりなさるんですもの、誰だつて酔興すいきようと思いますわ」

「思われてもしようがない。これがおれの主義なんだから」

「あなたは主義だからそれでいいでしょうさ。しかし私わたくしは……」

「御前は主義きらいが嫌だと云うのかね」

「嫌すきも好もないんですけれども、せめて——人並には——なんぼ私だつて……」

「食えさえすればいいじゃないか、贅ぜいたく沢を云や誰だつて際限はない」

「どうせ、そうでしょう。私なんざどんなになつても御構おかまいなす

つちや下さらないのでしよう」

「このてつか味噌は非常に辛いな。どこで買つて来たのだ」

「どこですか」

道也先生は頭をあげて向の壁を見た。鼠色の寒い色の上に

大きな細君の影が写っている。その影と妻君とは同じように無意義に道也の眼に映じた。

影の隣りに糸織かとも思われる、女の晴衣が衣紋竹につる

してかけてある。細君のものにしては少し派出所過ぎるが、これは

多少景気のいい時、田舎で買つてやったものだ。今だに記憶して

いる。あの時分は今とはだいぶ考えも違っていた。己れと同じよ

うな思想やら、感情やら持っているものは珍らしくあるまいと信

じていた。したがって文筆の力で自分から卒そつ先せんして世間を警けい醒せいしようとする気にもならなかった。

今はまるで反対だ。世は名門を謳歌おうかする、世は富豪を謳歌する、世は博士、学士までも謳歌する。しかし公正な人格に逢うて、位地を無にし、金銭を無にし、もしくははその学力、才芸を無にして、人格そのものを尊敬する事を解しておらん。人間の根本義たる人格に批判の標準を置かずして、その上うわ皮かわたる附属物をもつてすべてを律しようとする。この附属物と、公正なる人格と戦うとき世間は必ず、この附属物に雷らい同どうして他の人格を蹂躪じゅうりんせんと試みる。天下一人いちにんの公正なる人格を失うとき、天下一段の光明を失う。公正なる人格は百の華族、百の紳商しんしょう、百の博士を

もつてするも償つぐないがたきほど貴たつときものである。われはこの人格を維持せんがために生れたるのほか、人世において何らの意義をも認め得ぬ。寒かんに衣いし、餓うえに食しょくするはこの人格を維持するの一便法に過ぎぬ。筆を呵かし硯すずりを磨まするのもまたこの人格を他の面上に貫徹するの方策に過ぎぬ。——これが今の道也の信念である。この信念を抱いだいて世に処する道也は細君の御機嫌ごきげんばかり取つてはおれぬ。

壁に掛けてあつた小袖こそでを眺めていた道也はしばらくして、夕ゆうめ飯しを済しまししながら、

「どこぞへ行つたのかい」と聞く。

「ええ」と細君は二字の返事を与えた。道也は黙つて、茶を飲ん

でいる。未枯うらがるる秋の時節だけにすこぶる閑静な問答である。

「そう、べんべんと真田さなだの方を引つ張つとく訳わけにも行きませず、家主の方もどうかしなければならず、今月の末になると米薪こめまきの払はらいでまた心配しなくつちやなりませんから、算段さんだんに出掛でかけたんです」と今度は細君の方から切り出した。

「そうか、質屋へでも行つたのかい」

「質に入れるようなものは、もうありやしませんわ」と細君は恨うらめしように夫の顔を見る。

「じゃ、どこへ行つたんだい」

「どこつて、別に行く所ありませんから、御兄おあにいさんの所へ行きました」

「兄の所とこ? 駄目だめだよ。兄の所ところなんぞへ行つたつて、何になるものか」

「そう、あなたは、何でも始から、けなしておしまいなさるから、よくないんです。いくら教育が違うからつて、気性きしょうが合わないからつて、血を分けた兄弟じゃありませんか」

「兄弟は兄弟さ。兄弟でないとは云わん」

「だからさ、膝ひざとも談合と云うじやありませんか。こんな時には、ちつと相談にいらつしやるがいいじやありませんか」

「おれは、行かんよ」

「それが瘦やせ我慢がまんですよ。あなたはそれが癖くせなんですよ。損じやあ、ありませんか、好んで人に嫌きらわれて……」

道也先生は空然くうぜんとして壁に動く細君の影を見ている。

「それで才覚が出来たのかい」

「あなたは何でも一足飛いっそくとびね」

「なにが」

「だって、才覚が出来る前にはそれぞれ魂胆こんたんもあれば工面くめんもあるじゃありませんか」

「そうか、それじゃ最初から聞き直そう。で、御前が兄のうちへ行なったんだね。おれに内所ないしよで」

「内所だって、あなたのためじゃありませんか」

「いいよ、ためでいいよ。それから」

「で御兄おあにいさんに、御目に懸かっているいろいろ今までの御無沙汰ごぶさたの御お

詫わびやら、何やらして、それから一部いちぶ始終しじゆうの御話をしたんです」

「それから」

「すると御おあにい兄さんが、そりや御前には大變氣の毒だつて大變私わたくしに同情して下さつて……」

「御前に同情した。ふうん。——ちよつとその炭取を取れ。炭をつがないと火種ひだねが切れる」

「で、そりや早く整理しなくつちや駄目だ。全体なぜ今まで抛ほうつて置いたんだつておつしやるんです」

「旨うまい事を云わあ」

「まだ、あなたは御おあにい兄さんを疑つていらつしやるのね。罰があたりますよ」

「それで、金でも貸したのかい」

「ほらまた一足いっそくと飛びをなさる」

道也先生は少々おかしくなつたと見えて、にやりと下を向きながら、黒く積んだ炭を吹き出した。

「まあどのくらいあれば、これまでの穴が奇麗きれいに埋うまるのかと御聞きになるから、——よつぽど言い悪にくかつたんですけれども——ととう思い切つてね……」でちよつと留めた。道也はしきりに吹いている。

「ねえ、あなた。とうとう思い切つてね——あなた。聞いていらつしやらないの」

「聞いてるよ」と赫かっき気で赤くなつた顔をあげた。

「思い切つて百円ばかりと云つたの」

「そうか。兄は驚ろいたろう」

「そうしたらね。ふうんて考えて、百円と云う金は、なかなか容易に都合がつく訳のものじゃない……」

「兄の云いそうな事だ」

「まあ聞いていらつしやい。まだ、あとが有るんです。——しかし、ほかの事とは違うから、是非なければ困ると云うならおれが保証人になつて、人から借りてやつてもいいって仰しやるんです」

「あやしいものだ」

「まあさ、しまいまで御聞きなさい。——それで、ともかくも本人に逢つて篤ととく了りようけん簡を聞いた上にしようと言うところまでに

漕ぎつけて来たのです」

細君は大功名をしたように頬骨ほおほねの高い顔を持ち上げて、夫おつとを覗のぞき込んだ。細君の眼つきが云う。夫は意気地いくじなしである。終日終夜、机と首つ引をして、兀々こつこつと出精しゅっせいしながら、妻さいと自分を安らかに養うほどの働きもない。

「そうか」と道也は云ったぎり、この手腕に対して、別段に感謝の意を表しようともせぬ。

「そうかじゃ困りますわ。私がここまで拵こしらえたのだから、あとはあなたが、どうとも為なささなくなつちやあ。あなたの楯かじのとりようでせつかくの私の苦心も何の役にも立たなくなりますわ」

「いいさ、そう心配するな。もう一カ月もすれば百や貳百の金は

手に這入る見込があるから」と道也先生は何の苦もなく云つて退けた。

江湖雑誌の編輯で二十円、英和字典の編纂で十五円、これが道也のきまつた収入である。但しこのほかに仕事はいくらでもする。新聞にかく、雑誌にかく。かく事においては毎日毎夜筆を休ませた事はないくらいである。しかし金にはならない。たまさか二円、三円の報酬が彼の懐に落つる時、彼はかえつて不思議に思うのみである。

この物質的に何らの機能もない述作的労力の裡には彼の生命がある。彼の気魄が滴々の墨汁と化して、一字一画に満腔の精神が飛動している。この断篇が読者の眼に映じた時、瞳裏に

一道の電流を呼び起して、全身の骨肉が刹那に震えかすと念じて、道也は筆を執る。吾輩は道を載す。道を遮ぎるものは神といえども許さずと誓つて紙に向う。誠は指頭より迸つて、尖る毛穎の端に紙を焼く熱気あるがごとき心地にて句を綴る。白紙が人格と化して、淋漓として飛騰する文章があるとすれば道也の文章はまさにこれである。されども世は華族、紳商、博士、学士の世である。附属物が本体を踏み潰す世である。道也の文章は出るたびに黙殺せられている。妻君は金にならぬ文章を道楽文章と云う。道楽文章を作るものを意気地なしと云う。

道也の言葉を聞いた妻君は、火箸を灰のなかに刺したまま、「今でも、そんな御金が這入る見込があるんですか」と不思議そ

うに尋ねた。

「今は昔より下落したと云うのかい。ハハハハハ」と道也先生は大きな声を出して笑った。妻君は毒氣どつきを抜かれて口をあける。

「どうりやひとべんきよう一勉強ひとべんきようやろうか」と道也は立ち上がる。その夜彼

は彼の著述人格論を二百五十頁までかいた。寝たのは二時過である。

四

「どこへ行く」と中野君が高柳君をつらまえた。所は動物園の前である。太い桜の幹みきが黒ずんだ色のなかから、銀のような光りを

秋の日に射返して、梢こずえを離れる病葉わくらばは風なき折々行こうじん人の肩にかかる。足元には、ここかしこに枝を辞したる古い奴やつががさついでいる。

色は様々である。鮮血を日に曝さらして、七日の間日ひごとにその変化を葉裏に印して、注意なく一枚のなかに畳み込めたら、こんな色になるだろうと高柳君はさつきから眺ながめていた。血を連想した時高柳君は腋わきの下から何か冷たいものが襯衣シヤツに伝わるような気がした。ごほんと取り締りのない咳せきを一つする。

形も様々である。火にあぶったかき餅もちの状は千差万別であるが、我も我もとみんな反そり返かえる。桜の落葉もがさがさに反そり返かえつて、反り返ったまま吹く風に誘われて行く。水気みずけのないものには未練

も執着もない。飄々ひょうひょうとしてわが行末を覚束おぼつかない風に任せて平気なのは、死んだ後の祭りに、から騒ぎにはしやぐ了りよう簡けんかも知れぬ。風にめぐる落葉と攫さらわれて行くかな層くずとは一種の気き狂ちがいである。ただ死したるものの気狂である。高柳君は死と気狂とを自然界に点綴てんてつした時、瘠やせた両肩を聳そびやかして、またごほんせきと云ううつろな咳を一つした。

高柳君はこの瞬間に中野君からつらまえられたのである。ふと気がついて見ると世は太平である。空は朗らかである。美しい着物をきた人が続々行く。相手は薄羅紗うすらしやの外がい套とうに恰好かつこうのいい姿を包んで、顚あごの下に真珠の留針とめばりを輝かしている。——高柳君は相手の姿を見守ったなり黙っていた。

「どこへ行く」と青年は再び問うた。

「今図書館へ行った帰りだ」と相手はようやく答えた。

「また地理学教授法じゃないか。ハハハハ。何だか不景気な顔をしているね。どうかしたかい」

「近頃は喜劇の面をどこかへ遺失してしまった」

「また新橋の先まで探がしに行つて、拳突を喰つたんじやないか。つまらない」

「新橋どころか、世界中探がしてあるいても落ちていそうもない。もう、御やめだ」

「何を」

「何でも御やめだ」

「万事御やめか。当分御やめがよかろう。万事御やめにして僕と
いっしょに来たまえ」

「どこへ」

「今日はそこに慈善音楽会があるんで、切符を二枚買わされたん
だが、ほかに誰も行き手が^いないから、ちようどいい。君行きたま
え」

「いらぬ切符などを買うのかい。もつたいない事をするんだな」
「なに義理だから仕方がない。おやじが買ったんだが、おやじは
西洋音楽なんかわからないからね」

「それじゃ余った方を送ってやればいいのに」

「実は君の所へ送ろうと思つたんだが……」

「いいえ。あすこへさ」

「あすことは。——うん。あすこか。何、ありや、いいんだ。自分でも買ったんだ」

高柳君は何とも返事をしないで、相手を真正面から見ている。

中野君は少々恐縮の微笑を洩らして、右の手に握ったままの、山ぎ羊の手袋で外がいとう套の胸をぴしやぴしや敲たたき始めた。

「穿はめもしない手袋を握ってあるのは何のためだい」

「なに、今ちよつと隠ポツケツト袋から出したんだ」と云いながら中野君は、すぐ手袋をかくしの裏うちに収めた。高柳君の癩かんしゃく癩はこれで少々

治おさまったようである。

ところへ後ろからエーイと云う掛声ひづめがして蹄の音が風を動かし

てくる。兩人は足早に道傍へ立ち退いた。黒塗のランドーの蓋を、秋の日の暖かきに、払い退けた、中には絹帽が一つ、美しい紅いの日傘が一つ見えながら、兩人の前を通り過ぎる。「ああ云う連中が行くのかい」と高柳君が顎で馬車の後ろ影を指す。

「あれは徳川侯爵だよ」と中野君は教えた。

「よく、知ってるね。君はあの人の家来かい」

「家来じゃない」と中野君は真面目に弁解した。高柳君は腹のなかでまたちよつと愉快を覚えた。

「どうだい行こうじゃないか。時間がおくれるよ」

「おくれると逢えないと云うのかね」

中野君は、すこし赤くなつた。怒つたのか、弱点をつかれたた
めか、恥ずかしかつたのか、わかるのは高柳君だけである。

「とにかく行こう。君はなんでも人の集まる所やなにかを嫌つて
ばかりいるから、一人坊ひとりぼつちになつてしまふんだよ」

打つものは打たれる。参るのは今度こそ高柳君の番である。一
人坊つちと云う言葉を聞いた彼は、耳がしいんと鳴つて、非常に
淋しい氣持がした。

「いやかい。いやなら仕方がない。僕は失敬する」

相手は同情の笑を湛たえながら半歩踵くびすをめぐらしかけた。高柳君
はまた打たれた。

「いこう」と単簡たんかんに降参する。彼が音楽会へ臨むのは生れてか

ら、これが始めてである。

玄関にかかった時は受付が右へ左りへの案内で忙殺ぼうさつされて、接待掛りの胸につけた、青いリボンを見失うほど込み合っていた。突き当りを右へ折れるのが上等で、左りへ曲がるのが並等である。下等はないようだ。中野君は無論上等である。高柳君を顧みながら、こつちだよと、さも物馴ものなれたさまに云う。今日に限って、特別に下等席を設けて貰って、そこへ自分だけ這入はいって聴きいて見たいと一人坊つちの青年は、中野君のあとをつきながら階段を上ぼりつつ考えた。己おのれの右を上のほる人も、左りを上る人も、またあとからぞろぞろついて来るものも、皆異種類の動物で、わざと自分を包围して、のっぴきさせず二階の大広間へ押し上げた上、あと

から、慰み半分に手を拍うつて笑う。策さくりやく略りやくのように思われた。後ろを振り向くと、下から緑みどりの滴したたる束そく髪はつの脳のう巔てんが見える。コスメチックで奇麗きれいな一直線を七分三分の割合に鍊ねり出した頭づがい蓋骨こつが見える。これらの頭が十も二十も重なり合つて、もう高柳周作は一步でも退く事はならぬとせり上がってくる。

樂堂の入口を這はい入ると、霞かすみに酔うた人のようにぼうつとした。空を隠す茂みのなかを通り抜けて頂いたに攀たじ登のぼった時、思いも寄らぬ、眼の下に百里なの眺ながめが展開する時の感じはこれである。演奏台は遙はるかの谷底にある。近づくためには、登り詰めた頂から、規則正しく排列された人間の間を一直線に縫うがごとくに下りて、自然と逼せまる擂鉢すりばちの底に近寄らねばならぬ。擂鉢すりばちの底は半円形

を劃して空に向つて広がる内側面には人間の堀へいが段々に横輪をえがいている。七八段を下りた高柳君は念のために振り返つて播鉢の側面を天てんじょう井まで見上げた時、目がちらちらしてちよつと留つた。excuse me と云つて、大きな異人が、高柳君を蔽おほいかぶせるようにして、一段下へ通り抜けた。駝だちよう鳥の白い毛が鼻の先にふらついて、品のいい香りがふんとする。あとから、脳のうてん巔の禿はげた大男が絹シルクハット帽を大事そうに抱えて身を横にして女につきながら、二人を擦すり抜ける。

「おい、あすこに椅子が二つ空あいている」と物馴ものなれた中野君は階段を横へ切れる。並んでいる人は席を立て二人を通す。自分だけであつたら、誰も席を立てくれるものはあるまいと高柳君は

思つた。

「大変な人だね」と椅子に腰をおろしながら中野君は満場を見廻わす。やがて相手の服装に気がついた時、急に小声になつて、

「おい、帽子をとらなくっちゃ、いけないよ」と云う。

高柳君は卒然として帽子を取つて、左右をちよつと見た。三四人の眼が自分の頭の上に注がれていたのでを発見した時、やつぱり包圍攻撃だと思つた。なるほど帽子を被つていたものはこの広い演奏場に自分一人である。

「外套がいとうは着ていてもいいのか」と中野君に聞いて見る。

「外套は構わないんだ。しかしあつ過ぎるから脱えりごうか」と中野君はちよつと立ち上がつて、外套の襟えりを三寸ばかり颯さと返したら、

左の袖そでがするりと抜けた、右の袖を抜くとき、領えりのあたりをつまんだと思つたら、裏おもを表おもてに、外套ははや畳まれて、椅子いすの背せなか中を早くも隠した。下は仕立したておろしのフロックに、近頃流行はやる白いスリッパが胸衣チヨツキの胸開むねあきを沿きうて細い筋きらいを奇麗きれいにあらわしている。高柳君はなるほどいい手際てぎわだと羨うらやましく眺ながめていた。中野君はどう云いうものか容易いに坐まらない。片手を椅子いすの背せなかに凭もたせて、立ちながら後ろから、左右へかけて眺ながめている。多くの人の視線は彼の上に落ちた。中野君は平気である。高柳君はこの平気をまうらやた羨うらやましく感じた。

しばらくすると、中野君は千以上陳列せられたる顔かほのなかで、ようやくあるものを物色し得たごとく、豊かなる双そうきよう頬ほに愛あいき

嬌ようの渦うずを浮かして、軽かろく何なんびと人にか会えしやく釈やくした。高柳君は振り向かざるを得ない。友の挨拶あいさつはどの辺へんに落ちたのだろうと、こそばゆくも首を振ねじ向けて、斜ななめに三段ばかり上を見ると、たちまち目つかった。黒い髪のだだ中に黄の勝った大きなリボンの蝶ちようを颯さつとひらめかして、細くうねる頸筋くびすじを今真直に立て直す女の姿が目つかった。紅くれないは眼の縁ふちを薄く染めて、潤うるおった眼睫まつげの奥から、人の世を夢の底に吸い込むような光りを中野君の方に注いでいる。高柳君はすわやと思つた。

わが穿はく袴はかまは小倉こくらである。羽織は染めが剥はげて、濁つた色の上に垢あかが容赦ようしやなく日光を反射する。湯には五日前に這入はいつたぎりだ。襯衣シヤツを洗わざる事は久しい。音楽会と自分とはどうてい両立

するものでない。わが友と自分とは？——やはり両立しない。友のハイカラ姿とこの魔力ある眼の所有者とは、千里を隔てても無線の電気がかかるべく作られている。この一堂の裡うちに綺羅きらの香りかおを嗅かぎ、和楽あたらの温かみを吸うて、落ち合うからは、二人の魂は無論の事、溶とけて流れて、かき鳴らす箏ことの線いとの細きうちにも、めぐり合わねばならぬ。演奏会は数千の人を集めて、数千の人はことごとく双そう手しゅを挙あげながらこの二人を歓迎している。同じ数千の人はことごとく五指しを弾はじいて、われ一人を排斥している。高柳君はこんな所へ来なければよかつたと思つた。友はそんな事を知りようがない。

「もう時間だ、始まるよ」と活版に刷つた曲目を見ながら云う。

「そうか」と高柳君は器械的に眼を活版の上に落した。

一、バイオリン、セロ、ピアノ合奏とある。高柳君はセロの何物たるを知らぬ。二、ソナタ……ベートーベン作とある。名前だけは心得ている。三、アダジヨ……パアージュアル作とある。これも知らぬ。四、と読みかけた時拍手はくしゅの音が急に梁はりを動かして起つた。演奏者はすでに台上に現われている。

やがて三部合奏曲は始まつた。満場は化石したかのごとく静かである。右手の窓の外に、高い樅もみの木が半分見えて後ろは遐はるかの空の国に入る。左手の碧みどりりの窓掛けを洩もれて、澄み切つた秋の日が斜ななめに白い壁を明らかに照らす。

曲は静かなる自然と、静かなる人間のうちに、快よく進行する。

中野は絢爛たる空気の振動を鼓膜に聞いた。声にも色があると嬉しく感じている。高柳は樅の枝を離るる鳶の舞う様を眺めている。鳶が音楽に調子を合せて飛んでいる妙だなど思った。

拍手がまた盛に起る。高柳君ははつと気がついた。自分はやはり異種類の動物のなかに一人坊つちでおったのである。隣りを見ると中野君は一生懸命に叩いている。高い高い鳶の空から、己れをこの窮屈な谷底に呼び返したものの一人は、われを無理矢理にここへ連れ込んだ友達である。

演奏は第二に移る。千余人の呼吸は一度にやむ。高柳君の心はまた豊かになった。窓の外を見ると鳶はもう舞っておらぬ。眼を移して天井を見る。周囲一尺もあろうと思われる梁の六角形

に削けずられたのが三本ほど、楽堂を豎たてに貫つらぬいてゐる、後ろはどこまで通とつてゐるか、頭かしらを回めぐらさないから分わらぬ。所々に模様くずに崩くずした草花が、長い蔓つると共に六角を絡からんでゐる。仰向あおもむいて見みてゐると広い御寺ごうぢのなかへでも這はい入いつた心持こころもちになる。そうして黄色い声や青い声こゑが、梁はりを纏まとう唐草からくさのように、纏もつれ合あつて、天井てんじやうから降ふつてくる。高柳君たかやなぎは無む人にんの境きように一人坊ひとりぼうつちで佇たたずんでゐる。

三度目の拍手あはれが、断つわりもなくまた起たる。隣となりりの友とも達は人一倍ひとばいけたたましい敲たたき方かたをする。無人むにんの境きようにおつた一人坊ひとりぼうつちが急いそに霰あられのごとき拍手あはれのなかに包圍まきされた一人坊ひとりぼうつちとなる。包圍まきはなかなか已やまぬ。演奏者えんそうが闔たつを排はいしてわが室しつに入いらんとする間際まぎわになおなお烈はげしくなつた。ヴァイオリンを温ぬかに右みぎの腋えき下かに護まもりた

る演奏者は、ぐるりと戸側とぎわに体たいを回めぐらして、薄紅葉うすもみじを点じたる裾模様すそもようを台上に動かして来る。狂うばかりに咲き乱れたる白菊の花束を、飄ひるがえる袖そでの影に受けとつて、なよやかなる上じょうく軀くを聴衆の前に、少しくかがめたる時、高柳は感じた。——この女の樂を聴きいたのは、聴かされたのではない。聴かさぬと云うを、ひそかに忍び寄りて、偷ぬすみ聴いたのである。

演奏は喝かつさい采さいのどよめきの静まらぬうちにまた始まる。聴衆はとつさの際にことごとく死んでしまう。高柳君はまた自由になつた。何だか広い原にただ一人立つて、遥はるかの向うから熟柿じゅくしのような色の暖かい太陽が、のつと上のぼつてくる心持ちがする。小供のうちにはこんな感じがよくあつた。今はなぜこう窮屈になつたらう。

右を見ても左を見ても人は我を擯斥ひんせきしているように見える。たつた一人の友達さえ肝心かんじんのところは無残むざんの手をぱちぱちたた敲く。たよる所がなければ親の所へ逃げ帰れと云う話もある。その親があれば始からこんなにはならなかつたろう。七つの時おやじは、どこかへ行つたなり帰つて来ない。友達はそれから自分と遊ばなくなつた。母に聞くと、おとつさんは今に帰る今に帰ると云つた。母は帰らぬ父を、帰ると云つてだましたのである。その母は今でもいる。住み古ふるるした家を引き払つて、生れた町から三里の山奥に一人侘わびしく暮らしている。卒業をすれば立派になつて、東京へでも引き取るのが子の義務である。逃げて帰れば親子共とも餓えて死ななければならん。——たちまち拍手の音が一面に湧わき返る。

「今のは面白かった。今までのうち一番よく出来た。非常に感じをよく出す人だ。——どうだい君」と中野君が聞く。

「うん」

「君面白くないか」

「そうさな」

「そうさなじや困ったな。——おいあすこの西洋人の隣りにいる、
細こまかい友ゆう禅ぜんの着物を着ている女があるだろう。——あんな模様が近頃流行はやるんだ。派出はでだろう」

「そうかなあ」

「君はカラー・センスのない男だね。ああ云う派出な着物は、集会の時や何かにはごくいいのだね。遠くから見て、見醒みざめがしな

い。うつくしくつていい」

「君のあれも、同じようなのを着ているね」

「え、そうかしら、何、ありや、いい加減かげんに着ているんだろう」

「いい加減に着ていれば弁解になるのかい」

中野君はちよつと会話をやめた。左の方に鼻眼鏡はなめがねをかけて揉もみあげみあげを容赦ようしやなく、耳の上で剃り落した男が帳面を出してしきりに何か書いている。

「ありや、音楽の批評でもする男かな」と今度は高柳君が聞いた。「どれ、——あの男か、あの黒服を着た。なあに、あれはね。画え工かきだよ。いつでも来る男だがね、来るたんびに写生帖を持って来て、人の顔を写している」

「断わりなしにか」

「まあ、そうだろう」

「泥棒だね。顔泥棒だ」

中野君は小さい声でくくと笑った。休憩時間は十分である。廊下へ出るもの、喫煙に行くもの、用を足して帰るもの、が高柳君の眼に写る。女は小供の時見た、豊国の田舎源氏を一枚一枚はぐって行く時の心持である。男は芳年の書いた討ち入り当夜の義士が動いてるようだ。ただ自分が彼らの眼にどう写るであろうかと思うと、早く帰りたくなる。自分の左右前後は活動している。うつくしく活動している。しかし衣食のために活動しているのではない。娯楽のために活動している。胡蝶の花に戯むるがご

とく、浮藻うきもの漣さざなみに靡なびくがごとく、実用上の活動を示している。

この堂に入るものは実用上に余裕のある人でなくてはならぬ。

自分の活動は食うか食わぬかの活動である。和煦わくの作用ではな

い肅しゆくさつ殺ころの運行である。儼げんたる天命に制せられて、無条件に生

を享うけたる罪業ざいごうを償つぐなわんがために働らくのである。頭から云え

ば胡蝶のごとく、かく翩へん々べんたる公衆のいずれを捕とらえ来きたつて比較

されても、少しも恥はぢかしいとは思わぬ。云いたき事、云うて人が

点頭うなずく事、云うて人が尊たつとぶ事はないから云わぬのではない。生活

の競争にすべての時間を捧ささげて、云うべき機会を与えてくれぬか

らである。吾われが云いたくて云われぬ事は、世が聞きたくても聞か

れぬ事は、天がわが手を縛ばくするからである。人がわが口かんを箝かんする

からである。巨万の富をわれに与えて、一錢も使うなかれと命ぜられたる時は富なき昔むかしの心安きに帰る能あたわずして、命めいを下せる人を逆さかしまに詛のろわんとす。われは呪のろい死しにに死なねばならぬか。——たちまち咽喉のどが塞ふさがって、ごほんごほんせと咳せき入いる。袂たもとからハンケチを出して痰たんを取る。買った時の白いのが、妙な茶色に變つてゐる。顔を挙あげると、肩から觀世かんぜよりのように細い金鎖きんぐさりを懸かけて、朱に黄まじを交えた厚板の帯の間に時計を隠した女が、列のはずれに立つて、中野君に挨拶あいさつしている。

「よう、いらつしやいました」と可愛らしい二重瞼ふたえまぶたを細めに云う。

「いや、だいぶ盛会ですね。冬田さんは非常な出来でしたな」と

中野君は半身を、女の方へ向けながら云う。

「ええ、大喜びで……」と云い捨てて下りて行く。

「あの女を知ってるかい」

「知るものかね」と高柳君は拳けん突つを喰くわす。

相手は驚ろいて黙ってしまった。途端とたんに休憩後の演奏は始まる。

「四葉よつばの苜蓿花うまごやし」とか云うものである。曲の続く間は高柳君は

うつらうつらと聴いている。ぱちぱちと手が鳴ると熱病の人が夢から醒さめたように我に帰る。この過程を二三次繰り返して、最後の幻覚から喚よび醒よまされた時は、タンホイゼルのマーチで銅鑼どらを敲たたき大喇叭おおらっぱを吹くところであつた。

やがて、千余人の影は一度に動き出した。二人の青年は揉もまれ

ながらに門を出た。

日はようやく暮れかかる。図書館の横手に聳そびえる松の林が緑りの色を微かすかに残して、しだいに黒い影に変わって行く。

「寒くなつたね」

高柳君の答は力の抜けた咳せき二つであつた。

「君さつきから、咳をするね。妙な咳だぜ。医者にでも見て貰つたら、どうだい」

「何、大丈夫だ」と云いながら高柳君は尖とがつた肩を二三度ゆすぶつた。松林を横切つて、博物館の前に出る。大きな銀杏いちょうに墨ぼくじ汁ゆうを点てんじたような滴てきてき々の烏からすが乱れている。暮れて行く空に輝くは無数の落葉である。今は風さえ出た。

「君二三日前ににさんちまえ白井道也しらいどうやと云う人が来たぜ」

「道也先生？」

「だろうと思うのさ。余り沢山ある名じゃないから」

「聞いて見たかい」

「聞こうと思つたが、何だかきまりが悪るかつたからやめた」

「なぜ」

「だって、あなたは中学校で生徒から追い出された事はありませんかとも聞けまいじゃないか」

「追い出されましたかと聞かなくつてもいいさ」

「しかし容易に聞きにくい男だよ。ありや、困る人だ。用事よりほかに云わない人だ」

「そんなになつたかも知れない。元來何の用で君の所へなんぞ来たのだい」

「なあに、こうこざつし江湖雜誌の記者だつて、僕の所へ談話の筆記に来たのさ」

「君の談話をかい。——世の中も妙な事になるものだ。やつぱり金が勝つんだね」

「なぜ」

「なぜつて。——可かわいそう哀想に、そんなに零落れいらくしたかなあ。——

君道也先生、どんな、なり服装をしていた」

「そうさ、あんまり立派じゃないね」

「立派でなくつても、まあどのくらいな服装をしていた」

「そうさ。どのくらいとも云い悪いが、そうさ、まあ君ぐらいなところだろう」

「え、このくらいか、この羽織ぐらいなところか」

「羽織はもう少し色が好いよ」

「袴はかまは」

「袴は木綿もめんじゃないが、その代りもつと皺しわ苦茶だ」

「要するに僕と伯仲はくちゆうの間か」

「要するに君と伯仲の間だ」

「そうかなあ。——君、背せいの高い、ひよろ長い人だぜ」

「背の高い、顔の細長い人だ」

「じゃ道也先生に違ない。——世の中は随分無慈悲むじひなものだなあ。

——君番地を知ってるだろう」

「番地は聞かなかつた」

「聞かなかつた？」

「うん。しかし江湖雜誌こうこざっしで聞けばすぐわかるさ。何でもほかの雜

誌や新聞にも関係しているかも知れないよ。どこかで白井道也と云う名を見たようだ」

音楽会の帰りの馬車や車は最前さいぜんから絡繹らくえきとして二人を後ろから追い越して夕暮を吾家わがやへ急ぐ。勇ましく馳かけて来た二挺ちようの人じ力りきがまた追い越すのかと思つたら、大仏を横に見て、西洋軒のなかに掛声かけこゑながら引き込んだ。黄昏たそがれの白き靄もやのなかに、逼せまり来る暮色はしを弾はじき返すほどの目覚めざましき衣きぬは由よしある女に相違ない。中野

君はびたりと留まった。

「僕はこれで失敬する。少し待ち合せている人があるから」

「西洋軒で会食すると云う約束か」

「うんまあ、そうさ。じゃ失敬」と中野君は向へ歩き出す。高柳君は往来の真中へたつた一人残された。

淋しい世の中を池の端へ下る。その時一人坊つちの周作はこう思った。「恋をする時間があれば、この自分の苦痛をかいて、一篇の創作を天下に伝える事が出来るだろうに」

見上げたら西洋軒の二階に奇麗な花瓦斯がついていた。

ミルクホールに這入る。上下を擦り硝子にして中一枚を透き通しにした腰障子に近く据えた一脚の椅子に腰をおろす。焼麴パンを嚙つて、牛乳を飲む。懐中には二十円五十銭ある。ただ今地理学教授法の原稿を四十一頁渡して金に換えて来たばかりである。一頁五十銭の割合になる。一頁五十銭を超ゆべからず、一カ月五十頁を超ゆべからずと申し渡されてある。

これで今月はどうか、どうか食える。ほかからくれる十円近くの金は故里ふるさとの母に送らなければならぬ。故里ふるさとはもう落鮎おちあゆの時節である。ことによると崩れかかった藁屋根わらやねに初霜はつしもが降つたかも知れない。鶏にわとりが菊の根方を暴らしている事だろう。母は丈

夫かしら。

向うの机を占領している学生が二人、西洋菓子を食べながら、
団子坂だんござかの菊人形の収入について大に論じている。左に蜜柑みかんをむ
きながら、その汁しるを牛乳の中へたらしている書生がある。一房ひとつぶ
絞しぼつては、文芸倶楽部ぶんげいくらぶの芸者の写真を一枚はぐり、一房絞しぼつては
一枚はぐる。芸者の絵が尽きた時、彼はコップの中を匙さじで攪かき廻
して妙な顔をしている。酸さんで牛乳が固まったので驚ろいているの
だろう。

高柳君はそこに重ねてある新聞の下から雑誌を引きずり出して、
あれこれと見る。目的の江湖雑誌こうこざっしは朝日新聞の下に折れていた。
折れてはいるがまだ新らしい。四五日前に出たばかりのである。

折れた所は六号活字で何だか色鉛筆の赤い圈けんでん点てんが一面についている。僕の恋愛観と云う表題の下に中野春台なかのしゅんたいとある。春台は無論輝一きいちの号である。高柳君は食い欠いた焼麵やきパン麩ぼを皿の上へ置いたなり「僕の恋愛観」を見ていたがやがて、にやりと笑った。恋愛観の結末に同じく色鉛筆で色情狂※と書いてある。高柳君は頁をはぐった。六号活字はだいぶ長い。もつともいろいろの人の名前が出ている。一番始めには現代青年の煩悶はんもんに対する諸家の解決とある。高柳君は急に読んで見る気になった。——第一は静せい心しんの工夫くふうを積みと云う注意だ。積みとはどう積むのかちつともわからない。第二は運動をして冷水摩擦れいすいまさつをやれと云う。簡単なものである。第三は読書もせず、世間も知らぬ青年が煩悶はんもんする

法がないと論じている。無いと云つても有れば仕方がない。第四は休暇ごとに必ず旅行せよと勧告している。しかし旅費の出処は明記してない。——高柳君はあとを読むのが厭いやになった。颯さつと引ひつくりかえして、第一頁をあける。「解脱げだつと拘泥こうでい……憂世子ゆうせいし」と云うのがある。標題が面白いのでちよつと目を通す。

「身体からだの局部がどこぞ悪いと気にかかる。何をしていても、それがコダワつて来る。ところが非常に健康な人は行住坐臥ぎようじゆうざがともにわが身体からだの存在を忘れてる。一点の局部だにわが注意を集注すべき患かんしよ所しよがないから、かく安々と胖ゆたかなのである。瘡やせて蒼あおい顔かほをしている人に、君は胃が悪いだろうと尋ねて見た事がある。するとその男が答えて、胃は少しも故障がない、その証拠には僕

はこの年になるが、いまだに胃がどこにあるか知らないと言うた。その時は笑つて済んだが、後あとで考えて見ると大おおに悟おつた言葉である。この人は全く胃が健康だから胃に拘こう泥でいする必要がない、必要がないから胃がどこにあつても構わないのと見える。自在じざい飲いん、自在じざい食しょく、いつかう平気である。この男は胃において悟さとを開いたものである。……」

高柳君はこれは少し妙だよと口のなかで云つた。胃の悟りは妙だと云つた。

「胃について道いい得べき事は、惣そう身しんについても道いい得べき事である。惣そう身しんについて道いい得べき事は、精神についても道いい得べき事である。ただ精神生活においては得失の両面において等しく拘こ

うでい
泥まぬを免まぬかれぬところが、身体からだより煩わづらいになる。

「一いちのう能のうの士しは一能こうでいに拘こう泥でいし、一いちげい芸げいの人ひとは一芸おのに拘こう泥でいして己おのれを苦しめている。芸能げいは氣きの持もちちようではすぐ忘わすれる事ことも出来る。わが欠点けつてんに至いたつては容易げだつに解脫げだつは出来ぬ。

「百円ひゃくえんや二百円にひゃくえんもする帯おびをしめて女おんなが音楽会おんがくかいへ行くとこの帯おびが妙たぎに氣きになつて音楽おんがくが耳みみに入いらぬ事ことがある。これは帯おびに拘こう泥でいするからである。しかしこれは自慢こゝろの例れいじや。得意とくいの方は前まへ云いう通り崇たりを避よけ易やすい。しかし不面ふめん目ぼくの側がわはなかなか強情きやうじやうに崇たる。昔むかししきる所ところで一人ひとりの客きやくに紹介しょうかいされた時とき、御互ごごに椅子いすの上うへで礼れいをして双方共頭かたがたを下くだげた。下くだげながら、向むかうの足あしを見るとその男おとこの靴足くつ袋たびの片かた々かたが破やぶれて親指おやぢの爪つめが出てゐる。こちらが頭あたまを下くだげると

同時に彼は満足な足をあげて、破れ足袋たびの上に加えた。この人は足袋の穴に拘泥こどしていたのである。……」

おれも拘泥こどしている。おれのからだは穴だらけだと高柳君は思おもいながら先へ進む。

「拘泥こどは苦痛である。避けなければならぬ。苦痛そのものは避けがたい世であろう。しかし拘泥こどの苦痛は一日で済む苦痛を五日いつか、七日なぬかに延長する苦痛である。いらざる苦痛である。避けなければならぬ。」

「自己が拘泥こどするのは他人が自己に注意を集注すると思おもうからで、つまりは他人が拘泥こどするからである。……」

高柳君は音楽会の事を思おもいだした。

「したがって拘泥を解脱するには二つの方法がある。他人がいくら拘泥しても自分は拘泥せぬのが一つの解脱法である。人が目を^{そばだ}峙^{そばだ}ても、耳を聳^{そび}やかしても、冷評しても罵^{ばり}詈^{ばり}しても自分だけは拘泥せず^うにさつさと事を運んで行く。大久保彦左衛門は盥^うで登^{とじよ}城^うした事がある。……」

高柳君は彦左衛門が羨^{うらや}ましくなつた。

「立派な衣^{いしやう}装^{まご}を馬士^{まご}に着せると馬士はすぐ拘泥してしまう。華族や大名はこの点において解脱の方を得ている。華族や大名に馬士の腹^{はらがけ}掛^{はらがけ}をかけさすと、すぐ拘泥してしまう。釈迦^{しやか}や孔子^{こうし}はこの点において解脱を心得ている。物質界^{おもき}に重^{おもき}を置かぬものは物質界に拘泥する必要がないからである。……」

高柳君は冷めかかった牛乳をぐつと飲んで、ううと云った。

「第二の解脱法は常じょうじん人の解脱法である。常人の解脱法は拘泥まぬを免まぬかるるのではない、拘泥せねばならぬような苦しい地位に身を置くのを避けるのである。人の視聴を惹ひくの結果、われより苦痛が反射せぬようにと始めから用心するのである。したがって始めより流りゅうぞく俗こに媚こびて一世に附和ふわする心底しんていがなければ成功せぬ。江戸風な町人はこの解脱法を心得ている。芸妓げいぎ通客つうかくはこの解脱法を心得たものである。……」

芸者ゼントルマンと紳士ゼントルマンがいつしよになつてゐるのは、面白いと、青年はまた焼麵やきパン麩ぺんの一片を、横合から半円形に食い欠いた。親指についた牛バ

酩酊タをそのまま袴はかまひざの膝へなすりつけた。

「芸妓、紳士、通人つうじんから耶蘇孔子釈迦ヤソこうししゃかを見れば全然たる狂人である。耶蘇、孔子、釈迦から芸妓、紳士、通人を見れば依然として拘泥こうでいしている。拘泥のうちに拘泥を脱し得たりと得意なるものは彼らである。両者の解脱げだつは根本義において一致すべからざるものである。……」

高柳君は今まで解脱の二字においてかつて考えた事はなかつた。ただ文界に立つて、ある物になりたい、なりたいたがなれない、なれんのではない、金がない、時がない、世間が寄つてたかつて己おのれを苦しめる、残念だ無念だとばかり思つていた。あとを讀む気になる。

「解脱は便法べんぼうに過ぎぬ。下くだれる世に立つて、わが真を貫徹し、わが善を標ひょう榜ぼうし、わが美を提唱するの際、泥た帶で水すいの弊へいをまぬがれ、勇ゆう猛もう精しょう進じんの志こころざしを固かくして、現代下根げこんの衆しゅ生じょうより受くる迫害の苦痛を委いき却やくするための便法である。この便法を証しょう得とくし得えざる時、英靈えいれいの俊兒しゆんじ、またついに鬼窟裏きくつりに墮だ在ざいしはばて彼のいわゆる芸妓紳士通人と得失を較こするの愚ぐを演じて憚はばからず。国家のため悲しむべき事である。

「解脱は便法である。この方便門ほうべんもんを通じて出しゅつ頭とうし来る行為、動作、言説の是非は解脱の関するところではない。したがって吾人は解脱を修得する前に正せい鵠こくにあたれる趣味を養成せねばならぬ。下劣なる趣味を拘泥なく一代に塗抹とまつするは学人の恥辱である。

彼らが貴重なる十年二十年を挙げて故紙堆裏に兀々たるは、衣食のためではない、名聞のためではない、ないし爵禄財宝のためではない。微かなる墨痕のうちに、光明の一炬を点じ得て、点じ得たる道火を解脱の方便門より担い出して暗黒世界を遍照せんがためである。

「このゆえに真に自家証得底の見解あるもののために、拘泥の煩を払って、でき得る限り彼らをして第一種の解脱に近づかせるを道德と云う。道德とは有道の士をして道を行わしめんがために、吾人がこれに対して与うる自由の異名である。この大道德を解せざるものを俗人と云う。

「天下の多数は俗人である。わが位に着するがためにこの大道德

を解し得ぬ。わが富に着するがためにこの大道德を解し得ぬ。下
 れるものは、わが酒とわが女に着するがためにこの大道德を解し
 得ぬ。

「光明は趣味の先駆である。趣味は社会の油である。油なき社会
 は成立せぬ。汚れたる油に廻転する社会は墮落する。かの紳士、
 通人、芸妓の徒は、汚れたる油の上を滑つて墓に入るものである。
 華族と云い貴顕きけんと云い豪商と云うものは門閥もんぼつの油、権勢けんせいの油、
 黄白こうはくの油をもつて一世を逆しまに廻転せんと欲するものである。
 「真正しんせいの油は彼らの知るところではない。彼らは生れてより以
 来この油について何らの工夫くふうも費やしておらん。何らの工夫を費
 やさぬものが、この大道德を解せぬのは許す。光明の学徒を圧迫

せんとするに至つては、俗人の域を超越して罪人の群むれに入る。

「三味線しゃみせんを習うにも五六年はかかる。巧拙こうせつを聴き分くるさえ一カ月の修業では出来ぬ。趣味の修養が三味しゃみの稽古けいこより易やすいと思うのは間違つてゐる。茶の湯を学ぶ彼らはいらざる儀式に貴重な時間を費やして、一々に師匠の云う通りになる。趣味は茶の湯より六むずかしいものじゃ。茶坊主に頭を下げる謙徳けんとくがあるならば、趣味の本家ほんけたる学者の考はなおさら傾聴せねばならぬ。

「趣味は人間に大切なものである。楽器を壊こぼつものは社会から音楽を奪う点において罪人である。書物を焼くものは社会から学問を奪う点において罪人である。趣味を崩くずすものは社会そのものを覆くつえす点において刑法の罪人よりもはなはだしき罪人である。音

樂はなくとも吾人は生きてゐる、學問がなくても吾人は生きてゐる。趣味がなくても生きておられるかも知れぬ。しかし趣味は生活の全体に渉るわた社会の根本要素である。これなくして生きんとするは野に入つて虎と共に生きんとすると一般である。

「ここに一人がある。いちにんこの一人が単に自己の思うようにならぬと云う原因のもとに、多勢たぜいが朝に晩に、この一人を突つき廻わして、幾年の後のちこの一人の人格を墮落せしめて、下劣なる趣味に誘ひ去りたる時、彼らは殺人より重い罪を犯したのである。人を殺せば殺される。殺されたものは社会から消えて行く。後患こうかんは遺さのこない。趣味の墮落したものは依然として現存する。現存する以上は墮落した趣味を伝染せねばやまぬ。彼はペストである。ペストを

製造したものはもちろん罪人である。

「趣味の世界にペストを製造して罰せられんのは人殺しをして罰せられんのと同様である。位地の高いものはもつともこの罪を犯おかしやすい。彼らは彼らの社会的地位からして、他に働きかける便宜んぎの多い場所に立っている。他に働きかける便宜んぎを有して、働きかける道を弁わきまえぬものは危険である。

「彼らは趣味において専門の学徒に及ばぬ。しかも学徒以上他に働きかけるの能力を有している。能力は権利ではない。彼らのあるものはこの区別さえ心得ておらん。彼らの趣味を教育すべくこの世に出現せる文学者を捕えてすらこれを逆さかしまに吾意のごとくせんとする。彼らは単に大道德を忘れたるのみならず、大不道德

を犯して恬然^{てんぜん}として社会に横行しつつあるのである。

「彼らの意のごとくなる学徒があれば、自己の天職を自覚せざる学徒である。彼らを教育する事の出来ぬ学徒があれば腰の抜けたる学徒である。学徒は光明を体せん事を要す。光明より流れ出ざる趣味を現実せん事を要す。しかしてこれを現実^{げんじつ}せんがために、拘泥^{こうでい}せざらん事を要す。拘泥せざらんがために解脱^{げだつ}を要す」

高柳君は雑誌を開いたまま、茫然^{ぼうぜん}として眼を挙げた。正面の柱にかかっている、八角時計がぼうんと一時を打つ。柱の下の椅子^いにぼつ然^{ねん}と腰を掛けていた小女郎^{こじよろう}が時計の音と共に立ち上がった。丸テーブルの上には安い京焼^{きょうやき}の花活^{はないき}に、浅ましく水仙を突きさして、葉の先が黄ばんでいるのを、いつまでもそのま

まに水をやらぬ気と見える。小女郎は水仙の花にちよつと手を触れて、花はないけ活かたわらのそばにある新聞をとり上げた。読むかと思つたら四つに畳んで傍かたわらに置いた。この女は用もないのに立ち上がったのである。退屈のあまり、ぼうんを聞いて器械的に立ち上がったのである。羨うらやましい女だと高柳君はすぐ思う。

菊人形の収入についての議論は片づいたと見えて、二人の学生は煙草たばこをふかして往来を見ている。

「おや、富田とみたが通る」と一人が云う。

「どこに」と一人が聞く。富田君は三寸ばかり開いていた硝子戸ガラスドの間をちらと通り抜けたのである。

「あれは、よく食う奴やつじやな」

「食う、食う」と答えたところによるとよほど食うと見える。

「人間は食う割わりに肥ふとらんものだな。あいつはあんなに食う癖こにいつこう肥えん」

「書物は沢山読むが、ちつとも、えろうならんのがおると同じ事じゃ」

「そうよ。御互に勉強はなるべくせん方がいいの」

「ハハハハ。そんなつもりで云つたんじゃない」

「僕はそう云うつもりにしたのさ」

「富田は肥ふとらんがなかなか敏びん捷しょうだ。やはり沢山食うだけの事はある」

「敏捷な事があるものか」

「いや、この間四丁目を通ったら、後ろから出し抜けに呼ぶものがあるから、振り反ると富田だ。頭を半分刈かつたままで、大きな敷布のようなものを肩から纏まとうている」

「元来どうしたのか」

「床屋から飛び出して来たのだ」

「どうして」

「髪を刈っておいたら、僕の影が鏡に写ったものだから、すぐ馳かけ出したんだそうだ」

「ハハハハそいつは驚ろいた」

「おれも驚ろいた。そうして尚志会しょうしかいの寄附金を無理に取って、また床屋へ引き返したぜ」

「ハハハハなるほど敏捷びんしょうなものだ。それじゃ御互になるべく食う事にしよう。敏捷にせんと、卒業してから困るからな」

「そうよ。文学士のように二十円くらいで下宿に屏息へいそくしていは人間と生れた甲斐かひはないからな」

高柳君は勘定をして立ち上った。ありがとうと云う下女の声に、文芸倶楽部の上につつ伏していた書生が、赤い眼をとろつかせて、睨にらめるように高柳君を見た。牛の乳のなかの酸に中毒でもしたの
だろう。

六

「私は高柳周作たかなぎしゅうさくと申すもので……」と丁寧ていねいに頭を下げた。

高柳君が丁寧ていねいに頭を下げた事は今まで何度もある。しかしこの時のように快よく頭を下げた事はない。教授の家を訪問しても、翻訳を頼まれる人に面会しても、その他の先輩に対しても皆丁寧ていねいに頭をさげる。せんだつて中野のおやじに紹介された時などはいよいよもつて丁寧ていねいに頭をさげた。しかし頭を下げるうちにいつでも圧迫を感じている。位地、年輩、服装、住居が睥睨へいげいして、頭を下げぬか、下げぬかと催促せいきされてやむを得ず頓首とんしゆするのである。道也先生どうやに対しては全く趣おもむきが違ちがう。先生の服装は中野君の説明したごとく、自分と伯仲はくちゆうの間にある。先生の書齋は座敷をかねる点において自分の室へやと同様である。先生の机は白木なるの点に

おいて、丸裸なるの点において、またもつとも無趣味に四角張つたる点において自分の机と同様である。先生の顔は蒼い点において瘠やせた点において自分と同様である。すべてこれらの諸点において、先生と弟ていたりがたく兄けいたりがたき間あいだがら柄がらにありながら、しかも丁寧ていねいに頭を下げるのは、逼せまられて仕方なしに下げるのではない。仕方あるにもかかわらず、こつちの好意をもつて下げるのである。同類に対する愛あい憐れんの念より生ずる真正の御辞儀おじぎである。世間に対する御辞儀はこの野郎がと心中に思いながらも、公然には反比例に丁寧ていねいを極きまめたる虚偽きよぎの御辞儀でありますと断わりたいくらいに思つて、高柳君は頭を下げた。道也先生はそれと覺さとつたかどうか知らぬ。

「ああ、そうですか、私が白井道也で……」とつくろつた景色もなく云う。高柳君にはこの挨拶振りが気に入った。両人はしばらくの間黙つて控えている。道也は相手の来意がわからぬから、先方の切り出すのを待つのが当然と考える。高柳君は昔しの關係を残りになく打ち開けて、一刻も早く同類相憐むの間柄になりたい。しかしあまり突然であるから、ちよつと言ひ出しかねる。のみならず、一昔し前の事とは申しながら、自分達がいじめて追ひ出した先生が、そのためにかく零落したのであるまいかと思ふと、何となく気がひけて云ひ切れぬ。高柳君はこんなところになるとすこぶる勇氣に乏しい。謝罪かたがた尋ねはしたが、いよいよと云う段になると少々怖くて罪滅しが出来かねる。

心にいろいろな冒頭を作つて見たが、どれもこれもきまりがわるい。

「だんだん寒くなりますね」と道也先生は、こつちの了りようけん簡けんを知らないから、超然たる時候の挨拶をする。

「ええ、だいぶ寒くなつたようで……」

高柳君の脳中の冒頭はこれでまるで打ち壊されてしまった。いっその事自白はこの次にしようという気になる。しかし何だか話して行きたい気がする。

「先生御忙おいそがしいですか……」

「ええ、なかなか忙がしいんで弱ります。貧乏閑ひまなしで」

高柳君はやり損そくなつたと思う。再び出直さねばならん。

「少し御話を承りうけたまわたいと思つて上がったんですが……」

「はあ、何か雑誌へでも御載おのせになるんですか」

あてはまたはずれる。おれの態度がどうしても向むこうには酌くみ取れないと見えると青年は心中少しく残念に思った。

「いえ、そうじゃないので——ただ——ただちや失礼ですが。」

——御邪魔ならまた上がつてもよろしゆうございますが……」

「いえ邪魔じゃありません。談話と云うからちよつと聞いて見ただけです。——わたしのうちへ話なんか聞きにくるものはありませんよ」

「いいえ」と青年は妙な言葉をもつて先生の辞ことばを否定した。

「あなたは何の学問をなさるですか」

「文学の方を——今年大学を出たばかりです」

「はあそうですか。ではこれから何かおやりになるんですね」

「やれば、やりたいのですが、暇ひまがなくて……」

「暇はないですね。わたしなども暇がなくて困っています。しかし暇はかえてない方がいいかも知れない。何ですね。暇のあるものはだいたいいるようだが、余り誰も何もやっていないようじやありませんか」

「それは人に依よりはしませんか」と高柳君はおれが暇さえあればと云うところを暗あんにほのめかした。

「人にも依るでしょう。しかし今の金持ちと云うものは……」と道也は句を半分で切つて、机の上を見た。机の上には二寸ほどの

厚さの原稿がのっている。障子には洗濯した足袋たびの影がさす。

「金持ちは駄目です。金がなくなつて困つてるものが……」

「金がなくなつて困つてるものは、困りなりにやればいいのです」と道也先生困つてる癖に太平な事を云う。高柳君は少々不満である。

「しかし衣食のために勢力をとられてしまつて……」

「それでいいのですよ。勢力をとられてしまつたら、ほかに何にもしないので構わないのです」

青年は啞然あぜんとして、道也を見た。道也は孔子様のように真面目まじめである。馬鹿にされてるんじゃないと高柳君は思う。高柳君は大抵の事を馬鹿にされたように聞き取る男である。

「先生ならいいかも知れません」とつるつると口を滑^{すべ}らして、はつと言い過ぎたと下を向いた。道也は何とも思わない。

「わたしは無論いい。あなただって好いですよ」と相手までも平気に捲^まき込もうとする。

「なぜですか」と二三歩逃げて、振り向きながら佇^{たたず}む狐のように探^{さぐ}りを入れた。

「だって、あなたは文学をやったと云われたじやありませんか。そうですか」

「ええやりました」と力を入れる。すべて他の点に関しては断^{だん}乎^こたる返事をする資格のない高柳君は自己の本領においては何^{なん}人^{びと}の前に出てもひるまぬつもりである。

「それならいい訳だ。それならそれでいい訳だ」と道也先生は繰り返して云った。高柳君には何の事か少しも分らない。また、なぜですと突き込むのも、何だか伏兵に罹る気持がして厭である。ちよつと手のつけようがないので、黙つて相手の顔を見た。顔を見ているうちに、先方でどうか解決してくれるだろうと、暗に催促の意を籠めて見たのである。

「分りましたか」と道也先生が云う。顔を見たのはやっぱり何の役にも立たなかつた。

「どうも」と折れざるを得ない。

「だつてそうじゃありませんか。——文学はほかの学問とは違うのです」と道也先生は凜然と云い放つた。

「はあ」と高柳君は覚え不_レ応答をした。

「ほかの学問はですね。その学問や、その学問の研究を阻害_{そがい}するものが敵である。たとえば貧_{ひん}とか、多忙_{ひん}とか、不_レ幸_{ひん}とか、悲酸_{ひさん}な事情とか、不和_{ひん}とか、喧嘩_{けんか}とかですね。これがあると学問が出来ない。だからなるべくこれを避けて時と心の余裕を得ようとする。文学者も今まではやはりそう云う了_り簡_{りょうけん}でいたのです。そう云う了_り簡_{りょうけん}どころではない。あらゆる学問のうちで、文学者が一番呑気_{のんき}な閑_{かん}日月_{じつげつ}がなくてはならんように思われていた。おかしいのは当人自身までがその氣でいた。しかしそれは間違_{まちが}です。文学は人生そのものである。苦痛_{くつう}にあれ、困窮_{こんきゆう}にあれ、窮_{きゆう}す。愁_{しゆう}にあれ、凡_{おほ}そ人生の行路_{およ}にあたるものはすなわち文学で、そ

れらを管^なめ得たものが文学者である。文学者と云うのは原稿紙を前に置いて、熟語字典を参考して、首をひねっているような閑^{ひまじ}人^んじゃありません。円熟して深厚な趣味を体して、人間の万事を臆^{おくめん}面なく取り捌^{さば}いたり、感得したりする普通以上の吾々を指^さすのであります。その取り捌き方や感得し具合を紙に写したのが文学書になるのです、だから書物は読まないでも実際その事にあたれば立派な文学者です。したがってほかの学問^{とわざ}が^かでき得る限り研究を妨害する事物を避けて、しだいに人世に遠^{とほざ}かるに引き易^かえ^えて文学者は進んでこの障害のなかに飛び込むのであります」

「なるほど」と高柳君は妙な顔をして云った。

「あなたは、そうは考えませんか」

そう考えるにも、考えぬにも生れて始めて聞いた説である。批評的の返事が出るときは大抵用意のある場合に限る。不意撃ふいうちに応ずる事が出来れば不意撃ではない。

「ふうん」と云つて高柳君は首を低たれた。文学は自己の本領である。自己の本領について、他人が答弁さえ出来ぬほどの説を吐はくならばその本領はあまり鞏きようこ固なものではない。道也先生さえ、こんな見すばらしい家に住んで、こんな、きたならしい着物をきているならば、おれは当然二十円五十銭の月給で沢山だと思つた。何だか急に広い世界へ引き出されたような感じがする。

「先生はだいぶ御忙おいそがしいようですが……」

「ええ。進んで忙しい中へ飛び込んで、人から見ると酔すいきよう興きような

苦勞をします。ハハハハ」と笑う。これなら苦勞が苦勞にたたない。

「失礼ながら今はどんな事をやっておいでで……」

「今ですか、ええいろいろな事をやりますよ。飯を食う方と本領の方と両方やろうとするからなかなか骨が折れます。近頃は頼まれてよく方々へ談話の筆記に行きますがね」

「随分御面倒でしょう」

「面倒と云いや、面倒ですがね。そう面倒と云うよりむしろ馬鹿ばか気げています。まあいい加減に書いては来ますが」

「なかなか面白い事を云うのがおもしろい」と暗あんに中野春なかのしゅんた台たいの事を釣り出そうとする。

「面白いの何のつて、この間はうま、うまの講釈を聞かされまし
た」

「うま、うまですか？」

「ええ、あの小供が食物こども たべものの事をうまうまと云いましょう。あれ

の来歴ですね。その人の説によると小供が舌が回り出してから一
番早く出る発音がうまうまだそうです。それでその時分は何を見
てもうまうま、何を見なくつてもうまうまだからつまりは何なににも
つけなくてもいいのだそうだが、そこが小供に取つて一番大切な
ものは食物だから、とうとう食物の方で、うまうまを専有してし
まったのだそうです。そこで大人もその癖おとながのこつて、美味なも
のをうまいと云うようになった。だから人生の煩悶はんもんは要するに

元へ還^{かえ}つてうまうまの二字に帰着すると云うのです。何だか寄席^{よせ}へでも行つたようじやないですか」

「馬鹿にしていますね」

「ええ、大抵は馬鹿にされに行くんですよ」

「しかしそんなつまらない事を云うつて失敬ですね」

「なに、失敬だつていいでさあ、どうせ、分らないんだから。そうかと思うとね。非常に真面目^{まじめ}だけれどもなかなか突飛^{とつぴ}なのがあつてね。この間は猛烈な恋愛論を聞かされました。もつとも若い人ですがね」

「中野じやありませんか」

「君、知つてますか。ありや熱心なものだつた」

「私の同級生です」

「ああ、そうですか。中野春台とか云う人ですね。よつぽど暇があるんでしょう。あんな事を真面目に考えているくらいだから」

「金持ちです」

「うん立派な家うちにいますね。君はあの男と親密なのですか」

「ええ、もとはごく親密でした。しかしどうもいかんです。近頃は——何だか——未来の細君か何か出来たんで、あんまり交際してくれないのです」

「いいでしょう。交際しなくつても。損にもなりそうもない。ハハハハ」

「何だかしかし、こう、一人坊ひとりぼつちのような気がして淋しくつて

いけません」

「一人坊つちで、いいでさあ」と道也先生またいいでさあを担かつぎ出した。高柳君はもう「先生ならいいでしょう」と突き込む勇気が出なかつた。

「昔から何かしようと思えば大概は一人坊つちになるものです。

そんな一人の友達をたよりにするようじゃ何も出来ません。ことによると親類とも仲なかがい違がになる事が出来て来ます。妻さいにまで馬鹿にされる事があります。しまいには下女までからかいます」

「私はそんなになつたら、不愉快で生きていられないだろうと思います」

「それじゃ、文学者にはなれないです」

高柳君はだまつて下を向いた。

「わたしも、あなたぐらいの時には、ここまでとは考えていなか
った。しかし世の中の事実は実際ここまでやって来るんです。う
そじやない。苦しんだのは耶蘇ヤソや孔子こうしばかりで、吾々文学者はそ
の苦しんだ耶蘇や孔子を筆の先でほめて、自分だけは呑氣のんきに暮し
て行けばいいのだなどと考えてるのは偽にせぶん文学者ですよ。そん
なものゝ耶蘇や孔子をほめる権利はないのです」

高柳君は今こそ苦しいが、もう少し立てば喬きょう木ぼくにうつる時
節があるだろうと、苦しいうちに絹糸ほどな細い望みを繋つないでい
た。その絹糸が半分ばかり切れて、暗い谷から上へ出るたよりは、
生きているうちは容易に來そうに思われなくなつた。

「高柳さん」

「はい」

「世の中は苦しいものですよ」

「苦しいです」

「知ってますか」と道也先生は淋しさびげげに笑った。

「知ってるつもりですけれど、いつまでもこう苦しくつちや……」

「やり切れませんか。あなたは御両親おあが御在ありか」

「母だけ田舎いなかにいます」

「おつかさんだけ？」

「ええ」

「御母おつかさんだけでもあれば結構だ」

「なかなか結構でないです。——早くどうかしてやらないと、もう年を取っていきますから。私が卒業したら、どうか出来るだろうと思つてたのですが……」

「さよう、近頃のように卒業生が殖^ふえちや、ちよつと、口を得^うるのが困難ですね。——どうです、田舎の学校へ行く気はないですか」

「時々は田舎へ行こうとも思ふんですが……」

「またいやになるかね。——そうさ、あまり勧められもしない。

私も田舎の学校はだいぶ経験があるが」

「先生は……」と言いかけたが、また昔の事を云い出しにくくなつた。

「ええ？」と道也は何も知らぬ気である。

「先生は——あの——江湖雑誌を御編輯になると云う事ですが、本当にそうなんで」

「ええ、この間から引き受けてやっています」

「今月の論説に解脱げだつと拘泥こうでいと云うのがありましたが、あの憂ゆうせ世子いしと云うのは……」

「あれは、わたしです。読みましたか」

「ええ、大変面白く拝見しました。そう申しちや失礼ですが、あれは私の云いたい事を五六段高くして、表ひょう出したしゅつようなもので、利益を享うけた上に痛快に感じました」

「それはありがたい。それじゃ君は僕の知己ですね。恐らく天下

唯ゆい一いつの知己かも知れない。ハハハハ

「そんな事はないでしょう」と高柳君はやや真面目まじめに云った。

「そうですか、それじゃなお結構だ。しかし今まで僕の文章を見てほめてくれたものは一人もない。君だけですよ」

「これから皆んな賞ほめるつもりです」

「ハハハハそう云う人がせめて百人もいてくれると、わたしも本ほん望ぼうだが——随分頓珍漢とんちんかんな事がありますよ。この間なんか妙な

男が尋ねて来てね。……」

「何ですか」

「なあに商人ですがね。どこから聞いて来たか、わたしに、あなたは雑誌をやっておいでだそうだが文章を御書きなさるだろうと

云うのです」

「へえ」

「書く事は書くともまあ云ったんです。するとねその男がどうぞ一つ、眼薬の広告をかいてもらいたいと云うんです」

「馬鹿な奴やつですね」

「その代り雑誌へ眼薬の広告を出すから是非一つ願いたいって——何でもてんめいすい点明水とか云う名ですがね……」

「妙な名をつけて——。御書きになつたんですか」

「いえ、とうとう断わりましたかね。それでまだおかしい事があるのですよ。その薬屋で売出しの日に大きな風船を揚げるんだと云うのです」

「御祝いのためですか」

「いえ、やはり広告のために。ところが風船は声も出さずに高い空を飛んでいるのだから、仰向けあおむば誰にでも見えるが、仰向けせなくつちやいけないでしょう」

「へえ、なるほど」

「それでわたしにその、仰向けせの役をやってくれって云うのです」

「どうするのです」

「何、往來をあるいていても、電車へ乗っていてもいいから、風船を見たら、おや風船だ風船だ、何でもありや点明水の広告に違いないって何遍も何遍も云うのだそうです」

「ハハハ随分思い切つて人を馬鹿にした依頼ですね」

「おかしくもあり馬鹿馬鹿しくもあるが、何もそれだけの事をするにはわたしでなくてもよからう。車引でも雇えば訳ないじやないかと聞いて見たのです。するとその男がね。いえ、車引なんぞばかりでは信用がなくなつていけません。やつぱり髭ひげでも生はやしてもつともらしい顔をした人に頼まないと、人がだまされませんか」と云うのです」

「実に失敬な奴ですね。全体何物なにものでしょう」

「何物つてやはり普通の人間ですよ。世の中をだますために人を雇いに来たのです。呑気のんきなものさハハハハ」

「どうも驚ろいちまう。私なら撲なぐつてやる」

「そんなのを撲つた日にや片かたつ端はしから撲らなくつちやあならない。

君そう怒るが、今の世の中はそんな男ばかりで出来てるんですよ」

高柳君はまさかと思つた。障子にさした足袋たびの影はいつしか消

えて、開あけ放はなつた一枚の間から、靴刷毛くつはけの端はしが見える。椽えんは泥だ

らけである。手ての平ひらほどな庭の隅に一株の菊が、清らかに先生の

貧ひんを照らしている。自然をどうでもいいと思つている高柳君もこ

の菊だけは美しくいと感すぎじた。杉垣すぎがきの遥はるか向むに大はきな柿かきの木が

見えて、空のなかへ五分珠ごぶだまの珊瑚さんごをかためて嵌はめ込んだように奇

麗なに赤く映る。鳴子なるこの音ねがして鳥からすがぱつと飛んだ。

「閑静な御住居おすまいですな」

「ええ。蛸寺たこでらの和尚おしょうが鳥を追つてゐるんです。毎日がらなが

らん云わして、鳥ばかり追っている。ああ云う生しょうがい涯がいも閑静でいいな」

「大変たくさん柿が生なつていますね」

「渋柿ですよ。あの和尚は何が惜しくて、ああ渋柿の番ばかりするのかな。——君妙な咳せきを時々するが、身体からだは丈夫ですか。だいぶ瘠やせてるようじゃありませんか。そう瘠やせてちやいかん。身体が資本だから」

「しかし先生だつて随分瘠やせていらつしやるじゃありませんか」「わたし？ わたしは瘠やせている。瘠やせてはいるが大丈夫」

白き蝶ちようの、白き花に、

小ちよき蝶の、小ちよき花に、

みだるるよ、みだるるよ。

長うれいき憂は、長うれいき髪に、

暗くき憂は、暗くき髪に、

みだるるよ、みだるるよ。

いたずらに、吹くは野のわき分の、

いたずらに、住むか浮世に、

白しろき蝶も、黒くろき髪も、

みだるるよ、みだるるよ。

と女はうたい了る。銀ぎんわん腕たまたに珠たまを盛りて、白魚しらうおの指うづこに揺かしたらば、こんな声がでようと、男は聴ききとれていた。

「うまく、唱うたえました。もう少し稽古けいこして音量が充分に出ると大きな場所で聴いても、立派に聴けるに違いない。今度演奏会であめしにやってみませんか」

「厭いやだわ、ためしだなんて」

「それじゃ本式に」

「本式にやなおできませんわ」

「それじゃ、つまりおやめと云う訳わけですか」

「だってたくさん人のいる前なんかで、——恥ちずかしくつて、声なんか出やしませんわ」

「その新体詩はいいでしょう」

「ええ、わたし大好き」

「あなたが、そうやって、唱つてるところを写真に一つ取りましようか」

「写真に？」

「ええ、厭ですか」

「厭じゃないわ。だけれども、取つて人に御見せなさるでしょう」
「見せてわるければ、わたし一人で見ています」

女は何にも云わずに眼を横に向けた。こぼれ梅を一枚の半襟はんえりの表おもてに掃き集めた真中まんなかに、明星みょうじょうと見まがうほどの留針とめはりがてきれきと耀かがやいて、男の眼を射る。
的

女の振り向いた方には三尺の台を二段に仕切つて、下には長方形の交趾こうちの鉢はちに細き蘭らんが揺ゆるがんとして、香かうの煙りのたなびくを待つてゐる。上段にはメロスの愛ヴィーナス神スの模像を、ほの暗へやき室の隅に夢かとはばかり据すえてある。女の眼は端はしなくもこの裸体像の上に落ちた。

「あの像は」と聞く。

「無論模造です。本物は巴理パリのルーヴルにあるそうです。しかし模造でもみごとですね。腰から上の少し曲つたところと両足の方向とが非常に釣合がよく取れている。——これが全身完全だと非常なものです、惜しい事に手が欠けてます」

「本物も欠けてるんですか」

「ええ、本物が欠けてるから模造もかけてるんです」

「何の像でしょう」

「ヴィーナス。愛の神です」と男はことさらに愛と云う字を強く云った。

「ヴィーナス！」

深い眼睫まつげの奥から、ヴィーナスは溶けるとばかりに見詰められている。冷やかなる石膏せっこうの暖まるほど、丸き乳首ちくびの、呼吸につれて、かすかに動くかと疑あやしまるるほど、女は瞳ひとみを凝こらしている。女自身も艶えんなるヴィーナスである。

「そう」と女はやがて、かすかな声で云う。

「あんまり見ているとヴィーナスが動き出しますよ」

「これで愛の神でしょうか」と女はようやく頭を回らした。

あなたの方が愛の神らしいと云おうとしたが、女と顔を見合した時、男は急に躊躇した。云えば女の表情が崩れる。この、訝るがごとく、訴うるがごとく、深い眼のうちに我を頼るがごとき女の表情を一瞬たりとも、我から働きかけて打ち壊すのは、メロスのヴィーナスの腕を折ると同じく大なる罪科である。

「気高過ぎて……」と男の我を援けぬをもどかしがって女は首を傾けながら、我からと顔の上なる姿を変えた。男はしまったと思う。

「そう、すこし堅過ぎます。愛と云う感じがあまり現われていない」

「何だか冷めたいような心持がしますわ」

「その通りだ。冷めたいと云うのが適評だ。何だか妙だと思つていたが、どうも、いい言葉が出て来なかつたんです。冷めたい――冷めたい、と云うのが一番いい」

「なぜこんなに、拵こしらえたんでしょう」

「やっぱりフヒジアス式だから嚴格なんでしょう」

「あなたは、こう云うのが御好き」

女は石像をさえ、自分と比較して愛人の心を窺うかがつて見る。ヴィーナスを愛するものは、自分を愛してはくれまいと云う掛念けねんがある。女はヴィーナスの、神である事を忘れている。

「好きつて、いいじゃありませんか、古今ここんの傑作ですよ」

女の批判は直覚的である。男の好尚こうしようは半ばなか伝説的である。なまじいに美学などを聴いた因果いんがで、男はすぐ女に同意するだけの勇気を失っている。学問は己れおのを欺くあざむとは心づかぬと見える。自から学問に欺かれながら、欺かれぬ女の判断を、いたずらに誤まりりとのみ見る。

「古今の傑作ですよ」と再び繰り返したのは、半ば女の趣味を教育するためであった。

「そう」と女は云ったばかりである。石火せつかを交えまじざる刹那せつなに、はつと受けた印象は、学者の一言のために打ち消されるものではない。

「元来ヴィーナスは、どう云うものか僕にはいやな聯想れんそうがある」

「どんな聯想なの」と女はおとなしく聞きつつ、双そとうの手を立ちながら膝ひざの上に重ねる。手頸てくびからさきが二寸ほど白く見えて、あとは、しなやかなる衣きぬのうちに隠れる。衣は薄うすくれない紅べにに銀の雨を濃く淡く、所まだらに降らしたような縞しま柄がらである。

上になつた手の甲うでの、五つに岐わかれた先の、しだいに細まりてかつ丸く、つやある爪つめに蔽おおわれたのが好いい感じである。指は細く長く、すらりとした姿を崩くずさぬほどに、柔らかな肉を持たねばならぬ。この調ととのえる姿が五本ごとに異ならねばならぬ。異なる五本が一つにかたまつて、纏まとまる調子をつくらねばならぬ。美しくしき手を持つ人は、美しくしき顔を持つ人よりも少ない。美しくしき手を持つ人には貴たつとき飾りが必要である。

女は燦^{さん}たるものを、細き肉に戴^{いた}ている。

「その指輪は見馴^{みな}れませんか」

「これ？」と重ねた手は解^とけて、右の指に耀^{かがや}くものをなぶる。

「この間父様を買^かっていたのだ」

「ダイヤモンド
金剛石ですか」

「そうですね。天賞堂から取^とったんですから」

「あんまり御父^{おとう}さんを苛^{いじ}めちゃいけませんよ」

「あら、そうじゃないのよ。父様の方^{あなた}から買^かって下さったのよ」

「そりや珍^{めづ}らしい現象^{げんじょう}ですね」

「ホホホ本当^{まこと}ね。あなたその訳^{わけ}を知^しってて」

「知るものですか、探^{たん}偵^{てい}じゃあるまいし」

「だから御存じないでしょうと云うのですよ」

「だから知りませんよ」

「教えて上げましょうか」

「ええ教えて下さい」

「教えて上げるから笑つちやいけませんよ」

「笑やしません。この通り真面目まじめでさあ」

「この間ね、池いけがみ上に競馬があつたでしょう。あの時父様があす

こへいらしつてね。そうして……」

「そうして、どうしたんです。——拾つて来たんですか」

「あら、いやだ。あなたは失敬ね」

「だって、待つててもあとをおつしやらないですもの」

「今云うところなのよ。そうして賭かけをなすつたんですつて」

「こいつは驚ろいた。あなたの御父さんもやるんですか」

「いえ、やらないんだけれども、試ためしにやって見たんだつて」

「やつぱりやつたんじやありませんか」

「やった事はやつたの。それで御金を五百円ばかり御取りになつたんだつて」

「へえ。それで買って頂いたのですか」

「まあ、そうよ」

「ちよつと拝見」と手を出す。男は耀かがやくものを軽かろく抑おさえた。

指輪は魔物である。沙翁さおうは指輪を種さに幾多の波瀾はらんを描いた。若い男と若い女を目に見えぬ空裏くうりに繋つなぐものは恋である。恋をその

まま手にとらすものは指輪である。

三重みえにうねる細き金の波の、環わと合うて膨ふくれ上るただ中を穿うがちて、動くなよと、安らかに据すえたる宝石の、眩まばゆさは天あめが下したを射れど、毀こぼたねば波の中より奪といがたき運命は、君ありての妾われ、妾われゆえ故ゆえにの君である。男は白き指もろ共に指輪を見詰めている。

「こんな指輪だったのか知らん」と男が云う。女は寄り添うて同じ長椅子ソフアを二人の間に分わかつ。

「昔こしさる好事家こうずかがヴィーナスの銅像を掘り出して、吾わが庭なの眺ながめにと橄欖かんらんの香かの濃く吹くあたりに据すえたそうです」

「それは御話？ 突然なのね」

「それから或ある日テニスをしていたら……」

「あら、ちつとも分らないわ。誰がテニスをするの。銅像を掘り出した人なの？」

「銅像を掘り出したのは人足にんそくで、テニスをしたのは銅像を掘り出さした主人の方です」

「どっちだって同じじやありませんか」

「主人と人足と同じじや少し困る」

「いいえさ、やっぱり掘り出した人がテニスをしたんでしよう」

「そう強情を御張りになるなら、それでよろしい。——では掘り出した人がテニスをする……」

「強情じゃない事よ。じや銅像を掘り出さした方がほうテニスをするの、ね。いいでしょう」

「どっちでも同じでさあ」

「あら、あなた、御怒りおおこなすつたの。だから掘り出さした方だつて、あやまつているじやありませんか」

「ハハハハあやまらなくつてもいいです。それでテニスをしているとね。指輪が邪魔になつて、ラケットが思うように使えないんです。そこで、それはずしてね、どこかへ置こうと思つたが小さいものだから置きなくすといけない。——大事な指輪ですよ。

結納ゆいのうの指輪なんです」

「誰と結婚をなさるの？」

「誰とつて、そいつは少し——やっぱりさる令嬢とです」

「あら、お話しになつてもいいじやありませんか」

「隠す訳じゃないが……」

「じゃ話してちょうだい。ね、いいでしょう。相手はどなたなの？」

「そいつは弱りましたね。実は忘れちゃった」

「それじゃ、ずるいわ」

「だって、メリメの本を貸しちゃってちよつと調べられないですもの」

「どうせ、御貸しになったんでしようよ。ようございます」

「困ったな。せつかくのところで名前を忘れたもんだから進行する事が出来なくなつた。——じゃ今日は御やめにして今度その令嬢の名を調べてから御話をしましょう」

「いやだわ。せつかくのところですよしたり、なんかして」

「だって名前を知らないんですもの」

「だからその先を話してちょうだいな」

「名前はなくてもいいのですか」

「ええ」

「そうか、そんなら早くすればよかった。——それでいろいろ考えた末、ようやく考えついて、ヴィーナスの小指へちよつとはめたんです」

「うまいところへ気がついたのね。詩的じゃありませんか」

「ところがテニスが済んでから、すっかりそれを忘れてしまつて、しかも例の令嬢を連れに田舎^{いなか}へ旅行してから気がついたのです。

しかしいまさらどうもする事が出来ないから、それなりにして、
未来の細君にはちよつとしたでき合あいの指環ゆびわを買つて結納ゆいのうにした
のです」

「厭いやな方ね。不人情だわ」

「だって忘れたんだから仕方がない」

「忘れるなんて、不人情だわ」

「僕なら忘れないんだが、異人いじんだから忘れちまつたんです」

「ホホホ異人だつて」

「そこで結納とどこおも滞りなく済んでから、うちへ帰つていよいよ結婚
の晩に——」でわざと句を切る。

「結婚の晩にどうしたの」

「結婚の晩にね。庭のヴィーナスがどたりどたりと玄関を上がつて……」

「おおいやだ」

「どたりどたりと二階を上がって」

「怖こわいわ」

「寢室の戸をあけて」

「気味がわるいわ」

「気味がわるければ、そこいらで、やめて置きましょう」

「だけれど、しまいにならぬの」

「だから、どたり、どたりと寢室の戸をあけて」

「そこは、よしてちょうだい。ただしまいにならぬの」

「では間を抜きましよう。——あした見たら男は冷めたくなくて死んでたそうです。ヴィーナスに抱きつかれたところだけ紫色に変つてたと云います」

「おお、厭いやだ」と眉まゆをあつめる。艶えんなる人の眉まゆをあつめたるは愛あ嬌いきように醋すをかけたようなものである。甘き恋に酔えい過ぎたる男は折々のこの酸味さんみに舌を打つ。

濃くひける新月の寄り合あいて、互あに頭かしらを擡もたげたる、うねりの下に、臃おぼろに見ゆる情けの波のかがやきを男はひたすらに打ち守る。

「奥さんはどうしたでしょう」女を憐あはむものは女である。

「奥さんは病氣なになつて、病院はに這入はいるのです」

「癒なるのですか」

「そうさ。そこまでは覚えていない。どうしたっけかな」

「癒らない法はないでしょう。罪も何もないのに」

薄きにもかかわらず豊ゆたかなる下したくちびる唇はぷりぷりと動いた。男は

女の不平を愚かなりとは思わず、情け深しと興がる。二人の世界は愛の世界である。愛はもつとも真まじめ面目なる遊戯である。遊戯なるが故に絶体絶命の時には必ず姿を隠す。愛に戯たわむるる余裕のある人は至幸である。

愛は真面目である。真面目であるから深い。同時に愛は遊戯である。遊戯であるから浮いている。深くして浮いているものは水底の藻もと青年の愛である。

「ハハハハ心配なさらんでもいいです。奥さんはきつと癒ります」

と男はメリメに相談もせず受合つた。

愛は迷まよである。また悟さとりである。愛は天地万有ばんゆうをその中うちに吸収こうしゅうして刻下こっかに異様の生命せいめいを与える。故ゆえに迷である。愛の眼まなこを放つとき、大千世界だいせんせかいはことごとく黄金おうごんである。愛の心に映る宇宙なせは深き情けの宇宙である。故に愛は悟りである。しかして愛の空気を呼吸するものは迷とも悟とも知らぬ。ただおのずから人を引きまた人に引かるる。自然は真空を忌いみ愛は孤立こりつを嫌きらう。

「わたし、本当に御氣の毒だと思えますわ。わたしが、そんなになつたら、どうしようと思うと」

愛は己おのれに対して深刻なる同情を有している。ただあまりに深刻なるが故に、享樂の満足ある場合に限りて、自己を貫つらぬき出でて、

人の身の上にもまた普通以上の同情を寄せる事ができる。あまりに深刻なるが故に失恋の場合において、自己を貫き出でて、人の身の上にもまた普通以上の怨恨えんこんを寄せる事が出来る。愛に成功するものは必ず自己を善人と思う。愛に失敗するものもまた必ず自己を善人と思う。成敗せいばいに論なく、愛は一直線である。ただ愛の尺度をもつて万事を律する。成功せる愛は同情を乗せて走る馬車馬しやうまである。失敗せる愛は怨恨を乗せて走る馬車馬ばしやうまである。愛はもつともわがままなるものである。

もつともわがままなる善人が二人、美しく飾りたる室しつに、深刻なる遊戯を演じている。室外の天下は蕭寥しょうりょうたる秋である。天下の秋は幾多の道也どうや先生を苦しめつつある。幾多の高柳君を淋

しがらせつつある。しかして二人はあくまでも善人である。

「この間の音楽会には高柳さんとごいつしよでしたね」

「ええ、別に約束した訳わけでもないんですが、途中で逢ったものですから誘ったのです。何だか動物園の前で悲しそうに立って、桜の落葉を眺ながめているんです。気の毒になってね」

「よく誘さそって御上おあげになったのね。御病氣おびやじやなくなつて」

「少し咳せきをしていたようです。たいした事ことじやないでしょう」

「顔の色が大変御おわるかつたわ」

「あの男はあんまり神経質しんけいしつだもんだから、自分で病氣びやきをこしらえるんです。そうして慰なぐさめてやると、かえって皮肉くにくを云うのです。

何だか近來はますます変まになるようです」

「御気の毒ね。どうなすつたんでしよう」

「どうしたつて、この好んで一人坊ひとりぼつちになつて、世の中をみんな敵かたきのように思うんだから、手のつけようがないです」

「失恋なの」

「そんな話もきいた事もないですがね。いつそ細君でも世話をしたらいいかも知れない」

「御世話をして上げたらいいでしょう」

「世話をするつて、ああきむ気六むずかしくつちや、駄目ですよ。細君がかわいそう可哀想だ」

「でも。御持ちになつたら癒なおるでしょう」

「少しは癒るかも知れないが、元がんらい来が性しょうぶん分ぶんなんですからね。

悲観する癖があるんです。悲観病に罹かかつてるんです」

「ホホホホどうして、そんな病気が出たんでしょう」

「どうしてですかね。遺伝かも知れません。それでなければ小供のうち何かあつたんでしよう」

「何か御聞おききになつた事はなくつて」

「いいえ、僕あまりそんな事を聞くのが嫌きらいだから、それに、あの男はいつこう何なんにも打ち明けない男でね。あれがもつと淡泊たんぱくに思つた事を云う風だと慰めようもあるんだけど」

「困こまつていらつしやるんじゃないやなくつて」

「生活にですか、ええ、そりや困こまつてるんです。しかし無暗むやみに金をやろうなんていつたら擲たきつけますよ」

「だって御自分で御金がとれそんなものじゃありませんか、文学士だから」

「取れるですとも。だからもう少し待ってるといいですが、どうも性^{せつかち}急で卒業したあくる日からして、立派な作家になって、有名になって、そうして楽に暮らそうって云うのだから六^むずかし

い」
「御国は一体どこなの」

「国は新潟県です」

「遠い所なのね。新潟県は御米の出来る所でしょう。やっぱり御百姓なの」

「農^{のう}、なんでしょう。——ああ新潟県で思い出した。この間あな

たが御出おいでのとき行き違ちがひに出て行つた男があるでしょう」

「ええ、あの長い顔の髭ひげを生はやした。あれはなに、わたしあの人
の下駄を見て吃驚びっくりしたわ。随分薄つぺらなのね。まるで草履ぞうりよ」

「あれで泰然たるものですよ。そうしてちつとも愛あい嬌きようのない
男でね。こつちから何か話しかけても、何なんにも応答をしない」

「それで何しに来たの」

「江湖雑誌こうこぎの記者と云うんで、談話の筆記に来たんです」

「あなたの？ 何か話しておやりになつて？」

「ええ、あの雑誌を送つて来ているからあとで見せましょう。――
―それである男について妙な話があるんです。高柳が国の中学
にいた時分あの人に習つたんです――あれで文学士ですよ」

「あれで？ まあ」

「ところが高柳なんぞが、いろいろな、いたずらをして、苛^{いじ}めて追い出してしまったんです」

「あの人を？ ひどい事をするのね」

「それで高柳は今となって自分が生活に困難しているものだから、後悔して、さぞ先生も追い出されたために難義^あをしたろう、逢^あつたら謝罪するって云ってましたよ」

「全く追い出されたために、あんなに零^れ落^{らく}したんでしようか。そうすると気の毒ね」

「それからせんだって江湖雑誌の記者と云う事が分つたでしょう。だから音楽会の帰りに教えてやったんです」

「高柳さんはいらしたでしようか」

「行ったかも知れませんよ」

「追い出したんなら、本当に早く御託おわびをなさる方がいいわね」

善人の会話はこれで一段落を告げる。

「どうです、あっちへ行つて、少しみんなと遊あそぼうじやありませんか。いやですか」

「写真は御やめなの」

「あ、すっかり忘れていた。写真は是非取らして下さい。僕はこれでなかなか美術的な奴を取るんです。うん、商売人の取るのは下等ですよ。——写真も五六年この方大變進歩かたしてね。今じゃ立派な美術です。普通の写真はだれが取ったって同じでしょう。近

頃のは個人個人の趣味で調子がまるで違つてくるんです。いろいろなものを抜いたり、いったいの調子を和やわらげたり、際きわどい光線の作用を全景にあらわしたり、いろいろな事をやるんです。早いものでもう景色専門家や人物専門家が出来てるんですからね」

「あなたは人物の専門家なの」

「僕？ 僕は——そうさ、——あなただけの専門家になろうと思
うのです」

「厭いやなかたね」

ダイヤモンド

金剛石がきらりとひらめいて、

薄うすくれない

袖そで

紅の袖のゆるる中から

細い腕かいなが男の膝ひざの方に落ちて来た。

軽かろく

あたたつたのは指先ばかり

である。

善人の会話は写真撮影に終る。

八

秋は次第に行く。虫の音はようやく細る。

筆硯ひつげんに命を籠こむる道也どうや先生は、ただ人生のいちだいじ一大事いんねん因縁いんねんに

着ちやくして、他たを顧かえりみるの暇いとまなきが故ゆえに、暮くるる秋の寒さむきを知らず、

虫の音の細るを知らず、世の人のわれにつれなきを知らず、爪つめの
先あかに垢あかのたまるを知らず、蝟たこでら寺でらの柿かきの落ちた事は無論知らぬ。

動くべき社会をわが力にて動かすが道也先生かたの天職である。高く、
偉おおいなる、公おおやけなる、あるものの方にかた一歩なりとも動かすが道也

先生の使命である。道也先生はその他を知らぬ。

高柳君はそうは行かぬ。道也先生の何事をも知らざるに反して、彼は何事をも知る。往来の人の眼つきも知る。肌寒く吹く風の鋭どきも知る。かすれて渡る雁の数も知る。美しくしき女も知る。黄金の貴きも知る。木屑のごとく取り扱わるる吾身のはかなくて、浮世の苦しみの骨に食い入る夕々を知る。下宿の菜の憐れにして芋ばかりなるはもとより知る。知り過ぎたるが君の癖にして、この癖を増長せしめたるが君の病である。天下に、人間は殺しても殺し切れぬほどある。しかしこの病を癒してくれるものは一人もない。この病を癒してくれぬ以上は何千万人いるも、おらぬと同様である。彼は一人坊っちになった。己れに足りて人に

待つ事なき呑気のんきな一人坊っちではない。同情に餓うえ、人間に渴かつしてやるせなき一人坊っちである。中野君は病氣と云う、われも病氣と思う。しかし自分を一人坊っちの病氣にしたものは世間である。自分を一人坊っちの病氣にした世間は危篤きとくなる病人を眼前に控うそぶえて嘯うそぶいている。世間は自分を病氣にしたばかりでは満足せぬ。半死の病人を殺さねばやまぬ。高柳君は世間を呪のろわざるを得ぬ。

道也先生から見た天地は人のためにする天地である。高柳君から見た天地は己れのためにする天地である。人のためにする天地であるから、世話をしてくれ手がなくても恨うらみとは思わぬ。己れのためにする天地であるから、己れをかまってくれぬ世を残酷と思うう。

世話をするために生れた人と、世話をされに生れた人とはこれほど違う。人を指導するものと、人にたよるものとはこれほど違う。同じく一人坊うちでありながらこれほど違う。高柳君にはこの違いがわからぬ。

垢染あかじみた布団ふとんを冷ひややかに敷ふいて、五分刈ごぶがりが七分ほどに延びた頭を薄うすぎたない枕まくらの上に横よこえていた高柳君はふと眼を挙あげて庭てい前の梧ご桐とうを見た。高柳君は述作をして眼がつかれると必ずこの梧桐を見る。地理学教授法を訳して、くさくさすると必ずこの梧桐を見る。手紙を書いてさえ行き詰まるときつとこの梧桐を見る。見るはずである。三坪ほどの荒庭あれにわに見るべきものは一本の梧桐を除いてはほかに何にもない。

ことにこの間から、気分がわるくて、仕事をする元気がないの
で、あやしげな机ほおづえに頬杖ほおづえを突いては朝な夕なに梧桐ごとうを眺めくら
して、うつらうつらとしていた。

一 葉いちよう落ちてと云う句は古い。悲しき秋は必ず梧桐から手を下くだ
す。ばつさりと垣あわせにかかる裕あわせの頃は、さまでに心を動かす縁よすがとも
ならぬと油断する翌よくあさ朝あさまたばさりと落ちる。うそ寒いからと早
く繰る雨戸の外にまたばさりと音がする。葉はようやく黄ばんで
来る。

青いものがしだいに衰える裏から、浮き上がるのは薄く流した
脂やにの色である。脂は夜よごとを寒く明けて、濃く変つて行く。婆娑
たる命は旦たんせき夕せきに逼せまる。

風が吹く。どこから来るか知らぬ風がすうと吹く。黄ばんだ梢こずえは動ゆるぐとも見えぬ先に一葉二葉がはらはら落ちる。あとはようやく助かる。

脂は夜ごとの秋の霜しもにだんだん濃こくなる。脂のなかに黒い筋が立つ。箒ほうきで敲たたけば煎餅せんべいを折るような音がする。黒い筋は左右へ焼けひろがる。もう危えんうい。

風がくる。垣すきの隙すきから、椽えんの下から吹いてくる。危えんういものは落ちる。しきりに落ちる。危えんういと思う心さえなくなるほど梢こずえを離れる。明らさまなる月がさすと枝の数が読まれるくらいあらわに骨が出る。

わずかに残る葉を虫が食う。渋しぶ色いろの濃いなかにぽつりと穴が

あく。隣りにもあく、その隣りにもぼつりぼつりとあく。一面が穴だらけになる。心細いと枯れた葉が云う。心細かろうと見ている人が云う。ところへ風が吹いて来る。葉はみんな飛んでしまう。

高柳君がふと眼を挙げた時、梧桐はすべてこれらの径路けいろを通り越して、から坊主ぼうずになつていた。窓に近く斜ななめに張つた枝の先にただ一枚の虫食葉むしくいばがかぶりついている。

「一人坊ひとりぼつちだ」と高柳君は口のなかで云つた。

高柳君は先月あたりから、妙な咳せきをする。始めは気にもしなかつた。だんだん腹に答えのない咳が出る。咳だけではない。熱も出る。出るかと思ふとやむ。やんだから仕事をしようかと思ふとまた出る。高柳君は首を傾けた。

医者に行つて見てもらおうかと思つたが、見てもらうと決心すれば、自分で自分を病氣だと認定した事になる。自分で自分の病氣を認定するのは、自分で自分の罪惡を認定するようなものである。自分の罪惡は判決を受けるまでは腹のなかで弁護するのが人情である。高柳君は自分の身体からだを医師の宣告にかからぬ先に弁護した。神経であると弁護した。神経と事実とは兄弟であると云う事を高柳君は知らない。

夜になると時々寝汗ねあせをかく。汗で眼がさめる事がある。真暗まっくらななかで眼がさめる。この真暗さが永久続いてくれればいいと思う。夜があけて、人の声がして、世間が存在していると云う事がわかると苦痛である。

暗いなかをなお暗くするために眼を眠^{ねむ}つて、夜着^{よぎ}のなかへ頭をつき込んで、もうこれぎり世の中へ顔が出したくない。このまま眠りに入つて、眠りから醒^さめぬ間に、あの世に行つたら結構だろうと考えながら寝る。あくる日になると太陽は無慈悲にも赫^{かくえき}奕として窓を照らしている。

時計を出しては一日に脈^{みやく}を何遍となく験^{けん}して見る。何遍験しても平^{へいみやく}脈ではない。早く打ち過ぎる。不規則に打ち過ぎる。どうしても尋常には打たない。痰^{たん}を吐^はくたびに眼を皿のようにして眺^{なが}める。赤いものの見えないのが、せめてもの慰安である。

痰^{たん}に血の交^{まじ}らぬのを慰安とするものは、血の交る時にはただ生きてゐるのを慰安とせねばならぬ。生きてゐるだけを慰安とする

運命に近づくかも知れぬ高柳君は、生きていられるだけを厭う人である。人は多くの場合においてこの矛盾を冒す。彼らは幸福に生きるのを目的とする。幸福に生きんがためには、幸福を享受すべき生そのものの必要を認めぬ訳には行かぬ。単なる生命は彼らの目的にあらずとするも、幸福を享け得る必須条件として、あらゆる苦痛のもとに維持せねばならぬ。彼らがこの矛盾を冒して塵界に流転するとき死なんとして死ぬ能わず、しかも日ごとに死に引き入れらるる事を自覚する。負債を償うの目的をもつて月々に負債を新たにしつつあると変りはない。これを悲酸なる煩悶と云う。

高柳君は床のなかから這い出した。瓦斯糸の蚊絨の綿入の上

から黒木綿くろもめんの羽織を着る。机に向う。やっぱり翻訳をする了りよう
簡けんである。四五日しごんちそのままにして置いた机の上には、障子の破
れから吹き込んだ砂が一面に軽くたまつている。硯すずりのなかは白く
見える。高柳君は面倒だと見えて、塵ちりも吹かずに、上から水をさ
した。水入みずいれに在る水ではない。五六輪の豆菊まめぎくを挿さした硝子ガラスの
小瓶こびんを花ながら傾けて、どつと硯の池に落した水である。さかに
磨り減らした古梅園こばいえんをしきりに動かすと、じやりじやり云う。
高柳君は不愉快の眉まゆをあつめた。不愉快の起る前に、不愉快を取
り除く面倒をあえてせずして、不愉快の起った時に唇くちびるを嚙かむのは
かかる人の例である。彼は不愉快を忍ぶべく余り鋭敏である。し
かしてあらかじめこれに備うべくあまり自棄じきである。

机上に原稿紙を展のべた彼は、一時間ほど呻しんぎん吟してようやく二
 三枚黒くしたが、やがて打ちやるように筆を擱おいた。窓の外には
 落ち損そくなつた一枚の桐きりの葉が淋しく残っている。

「一人坊ひとりぼつちだ」と高柳君は口のうちでまた繰り返した。

見るうちに、葉は少しく上に揺れてまた下に揺れた。いよいよ
 落ちる。と思う間に風ははたとやんだ。

高柳君は巻紙を出して、今度は故ふるさと里おつかの御母さんの所へ手紙を
 書き始めた。「寒気かんき相あ加かわりころ候いかが如何御暮あそし被遊ぼ候やや。
 不相あいか交かわらずら御丈夫ごさつたの事と奉よう遥さつた察ま候つり。私事そも無事ろ」とまでか

いて、しばらく考えていたが、やがてこの五六行を裂いてしまつ
 た。裂いた反古ほごを口へ入れてくちやくちや噛かんでいると思つたら、

ぽつと黒いものを庭へ吐き出した。

一人坊つちの葉がまた揺れる。今度は右へ左へ二三度首を振る。その振りがようやく収おさまつたと思う頃、颯さつと音がして、病葉わくらばはほたりと落ちた。

「落ちた。落ちた」と高柳君はさも落ちたらしく云った。

やがて三尺の押入あを開けて茶色の中なかおれ折を取り出す。門口かどぐちへ出て空を仰ぐと、行く秋を重いものが上から囲んでいる。

「御婆さん、御婆さん」

はいと婆さんが雑巾ぞうきんを刺す手をやめて出て来る。

「傘かさをとつて下さい。わたしの室へやの椽側えんがわにある」

降れば傘をさすまでも歩く考である。どこと云う目的あてもないが

ただ歩くつもりなのである。電車の走るのは電車が走るのが、なぜ走るのでかは電車にもわかるまい。高柳君は自分があるくだけは承知している。しかしなぜあるくのかは電車のごとく無意識である。用もなく、あてもなく、またあるきたくもないものを無理にあるさせるのは残酷である。残酷があるさせるのだから敵は取れない。敵が取りたければ、残酷を製造した兇頭人ほつとうにんに向うよりほかに仕方がない。残酷を製造した兇頭人は世間である。高柳君はひとり敵の中をあるいている。いくら、あるいてもやっぱり一人坊ひとりぼつちである。

ぽつりぽつりと折々降ってくる。初時はつしぐれ雨と云うのだろう。豆と腐屋うふやの軒下に豆を絞しぼった殻が、山のように桶おけにもつてある。山の

頂いただきがぼくりと欠けて四面から煙が出る。風に連れて煙は往来なびへ靡く。塩物屋しおものやに鮭さけの切身が、渋さびた赤い色を見せて、並んでいる。隣りに、しらす干がかたまって白く反そり返る。鰹節屋かつぶしやの小僧が一生懸命に土佐節とさぶしをささらで磨みがいている。ぴかりぴかりと光る。奥に婚礼用の松が真青まつさおに景氣を添える。葉茶屋はぢややでは丁稚でつちが抹まつち茶やをゆつくりゆつくり白うすで挽ひいている。番頭は往来にらを睨にらめながら茶を飲んでゐる。——「えつ、あぶねえ」と高柳君は突き飛ばされた。

黒紋付の羽織に山高帽を被かぶつた立派な紳士が綱つな曳ひきで飛んで行く。車へ乗るものは勢いきおいがいい。あるくものは突き飛ばされても仕方がない。「えつ、あぶねえ」と拳突けんつを喰くわされても黙もくつてお

らねばならん。高柳君は幽霊のようにあるいている。

青銅からかねの鳥居をくぐる。敷石の上に鳩が五六羽、時雨しぐれの中を遠

ちこち

近ちこちしている。唐人鬚とうじんまげに結いつた半玉はんぎよくが渋蛇しぶじやの目めをさして

鳩つまかわを見ている。あらい八丈はちじようの羽織を長く着て、素足すあしを爪皮つまかわ

のなかへさし込んで立つた姿を、下宿の二階窓から書生が顔を二

つ出して評している。柏手かしわでを打って鈴を鳴らして御賽銭おさいせんをな

げ込んだ後姿が、見ている間まにこつちへ逆戻ぎやくもどりをする。黒縮くろちり

緬めんへ三みつ柏がしわの紋をつけた意気な芸者がすれ違ちがうときに、高柳君

の方に一瞥いちべつの秋波しゅうはを送った。高柳君は鉛しよを背負しょつたような重

い心持ちになる。

石段を三十六おりる。電車がごうつごうつと通る。岩崎いわさきの堀へい

が冷酷に聳そびえている。あの塀こわへ頭をぶつけて壊してやろうかと思う。時雨しぐれはいつか休やんで電車の停留所に五六人待っている。背せの高い黒紋付が蝙蝠傘こうもりを畳んで空を仰いでいた。

「先生」と一人坊ひとりぼつちの高柳君は呼びかけた。

「やあ妙な所で逢あいましたね。散歩かね」

「ええ」と高柳君は答えた。

「天気のわるいのによく散歩するですね。——岩崎の塀まわを三度周るといい散歩になる。ハハハハ」

高柳君はちよつといい心持ちになった。

「先生は？」

「僕ですか、僕はなかなか散歩する暇あいかわなんかありません。不かわ相ら変ず」

多忙でね。今日はちよつと上野の図書館まで調べ物に行つたです」
高柳君は道也先生に逢あうと何だか元気が出る。一人坊つちでありながら、こう平氣にしている先生が現在世のなかにあると思うと、多少は心丈夫になると見える。

「先生もう少し散歩をなさいませんか」

「そう、少しなら、してもいい。どつちの方へ。上野はもうよそ
う。今通つて来たばかりだから」

「私はどつちでもいいのです」

「じゃ坂を上あがつて、本郷の方へ行きましょう。僕はあつちへ帰る
んだから」

二人は電車の路を沿うてあるき出した。高柳君は一人坊つちが

急に二人坊つちになつたような気がする。そう思うと空も広く見える。もう綱つなひき曳から突き飛ばされる氣遣きづかいはあるまいとまで思う。

「先生」

「何ですか」

「さつき、車屋から突き飛ばされました」

「そりや、あぶなかつた。怪我けがをしやしませんか」

「いいえ、怪我はしません、腹は立ちました」

「そう。しかし腹を立てても仕方がないでしょう。——しかし腹も立てようによるですな。昔し渡辺わたなべ華山かざんが松平侯の供とも先さきに粗そ忽こつで突き当つてひどい目に逢あつた事がある。華山がその時の事を

書いてね。——松平侯御横行——と云つてるですが。この御横行の三字が非常に面白いじゃないですか。尊たつとんで御おんの字をつけてるがその裏に立派な反抗心がある。気概がある。君も綱引御横行と日記にかくさ」

「松平侯つて、だれですか」

「だれだか知れやしない。それが知れるくらいなら御横行はしないですよ。その時発憤した華山はいまだに生きてるが、松平某なるものは誰も知りやしない」

「そう思うと愉快ですが、岩崎の堀へいなどを見ると頭をぶつけて、壊こわしてやりたくなります」

「頭をぶつけて、壊せりや、君より先に壊してるものがあるかも

知れない。そんな愚^ぐな事を云わずに正々堂々と創作なら、創作をなされば、それで君の寿命は岩崎などよりも長く伝わるのです」

「その創作をさせてくれないのです」

「誰が」

「誰がつて訳じやないですが、出来ないのです」

「からだでも悪いですか」と道也先生横から覗^{のぞ}き込む。高柳君の

頬^{ほお}は熱を帯びて、蒼^{あお}い中から、ほてっている。道也は首を傾けた。

「君坂^{きさか}を上がると呼吸^{いき}が切れるようだが、どこか悪いじやないで

すか」

強^しいて自分にさえ隠そうとする事を言いあてられると、言いあてられるほど、明白な事実であつたかと落^が胆^{っかり}する。言いあてら

れた高柳君は暗い穴の中へ落ちた。人は知らず、かかる冷酷なる同情を加えて憚はばからぬが多い。

「先生」と高柳君は往來に立ち留どまった。

「何ですか」

「私は病人に見えるでしょうか」

「ええ、まあ、——少し顔色は悪いです」

「どうしても肺病でしょうか」

「肺病？ そんな事はないです」

「いいえ、遠慮なく云つて下さい」

「肺の気けでもあるんですか」

「遺伝です。おやじは肺病で死にました」

「それは……」と云つたが先生返答に窮した。

膀胱ぼうこうにはち切れるばかり水を詰めたのを針ほどの穴に洩もらせば、針ほどの穴はすぐ白銅ほどになる。高柳君は道也の返答をきかぬがごとくに、しゃべつてしまう。

「先生、私の歴史を聞いて下さいますか」

「ええ、聞きますとも」

「おやじは町で郵便局の役人でした。私が七つの年に拘こういん引されてしまいました」

道也先生は、だまつたまま、話し手といっしよにゆるく歩ほを運ばして行く。

「あとで聞くと官金を消費したんだそうで——その時はなんにも

知りませんでした。母にきくと、おとっさんは今に帰る、今に帰ると云つてました。——しかしとうとう帰つて来ません。帰らないはずです。肺病になつて、牢屋ろうやのなかで死んでしまつたんです。それもずつとあとで聞きました。母は家を畳んで村へ引き込みました。……」

むこう向から威勢のいい車が二挺にちようそく束髪そくはつの女を乗せてくる。二人はちよつとよける。話はとぎれる。

「先生」

「何ですか」

「だから私には肺病の遺伝があるんです。駄目です」

「医者に見せたですか」

「医者には——見せません。見せたって見せなくったって同じ事です」

「そりや、いけない。肺病だつて癒ならんとは限らない」

高柳君は気味の悪い笑いを洩もらした。時雨しぐれがはらはらと降つて来る。からたち寺でらの門の扉に碧巖録へきがんろくていしよ提唱ちしようと貼りつけた紙が際立きわだつて白く見える。女学校から生徒がぞろぞろ出てくる。赤や、紫や、海老茶えびちやの色が往来へちらばる。

「先生、罪悪も遺伝するものでしょうか」と女学生の間を縫ほいながら歩ほを移しつつ高柳君が聞く。

「そんな事があるものですか」

「遺伝はしないでも、私は罪人の子です。切せつないです」

「それは切ないに違いない。しかし忘れなくっちゃいけない」

警察署から手錠てしょうをはめた囚人が二人、巡査に護送されて出てくる。時雨しぐれが囚人の髪にかかる。

「忘れても、すぐ思い出します」

道也先生は少し大きな声を出した。

「しかしあなたの生しょうがい涯がいは過去にあるんですか未来にあるんですか。君はこれから花が咲く身ですよ」

「花が咲く前に枯れるんです」

「枯れる前に仕事をするんです」

高柳君はだまっている。過去を顧かえりみれば罪である。未来を望めば病気である。現在は麵パン麩パフのためにする写字である。

道也先生は高柳君の耳の傍そばへ口を持って来て云った。

「君は自分だけが一人坊ひとりぼつちだと思うかも知れないが、僕も一人坊つちですよ。一人坊つちは崇高なものです」

高柳君にはこの言葉の意味がわからなかった。

「わかったですか」と道也先生がきく。

「崇高——なぜ……」

「それが、わからなければ、とうてい一人坊つちでは生きていられません。——君は人より高い平面にいると自信しながら、人がその平面を認めてくれないために一人坊つちなのでしよう。しかし人が認めてくれるような平面ならば人も上あがってくる平面です。

芸者や車くるまひき引ひに理會されるような人格なら低いにきまっています。

それを芸者や車引も自分と同等なものと思い込んでしまうから、先方から見くびられた時腹が立ったり、ほんもん煩悶するのです。もしあんなものと同等なら創作をしたって、やっぱり同等の創作しか出来ない訳だ。同等でなければこそ、立派な人格を發揮する作物さくぶも出来る。立派な人格を發揮する作物が出来なければ、彼らからは見くびられるのはもつともでしょう」

「芸者や車引はどうでもいいですが……」

「例はだれだって同じ事です。同じ学校を同じに卒業した者だって変りはありません。同じ卒業生だから似たものだろうと思うのは教育の形式が似ているのを教育の実体が似ているものと考え違ちがした議論です。同じ大学の卒業生が同じ程度のものであったら、

大学の卒業生はことごとく後世に名を残すか、またはことごとく消えてしまわなくってはならない。自分こそ後世に名を残そうと力りきむならば、たとい同じ学校の卒業生にもせよ、ほかのものは残らないのだと云う事を仮定してかからなければなりません。すでにその仮定があるなら自分と、ほかの人とは同様の学士であるにもかかわらずすでに大差別があると自認した訳じやありませんか。大差別があると自任しながら他ひとが自分を解してくれんと云つて煩悶するのは矛盾です」

「それで先生は後世に名を残すおつもりでやっけていらつしやるんですか」

「わたしのは少し、違います。今の議論はあなたを本位にして立

てた議論です。立派な作物を出して後世に伝えたいと云うのが、あなたの御希望のようだから御話しをしたのです」

「先生のが承^{うけたまわ}る事が出来るなら、教えて頂けますまいか」

「わたしは名前なんてあてにならないものはどうでもいい。ただ自分の満足を得^うるために世のために働くのです。結果は悪名になろうと、臭^{しゅうめい}名になろうと気^{きちがい}狂になろうと仕方がない。ただこう働かなくなつては満足が出来ないから働くまでの事です。こう働かなくなつて満足が出来ないところをもつて見ると、これが、わたしの道に相違ない。人間は道に従うよりほかにやりようのないものだ。人間は道の動物であるから、道に従うのが一番貴^{たつと}いのだらうと思つています。道に従う人は神も避けねばならんです。

岩崎の堀へいなんか何でもない。ハハハハ」

剥はげかかった山高帽を阿弥陀あみだに被かぶつて毛繻子張りの蝙蝠傘こうもりをさした、一人坊ひとりぼつちの腰弁当の細長い顔から後光ごこうがさした。高柳君ははつと思う。

往来のものは右へ左へ行く。往来の店は客を迎え客を送る。電車は出来るだけ人を載のせて東西に走る。織ちるがまたごとき街の中に喪そ家の犬うかのごとく歩む二人は、免職になりたての属官と、墮落した青書生と見えるだろう。見えても仕方がない。道也はそれでたくさんだと思う。周作はそれではならぬと思う。二人は四丁目の角でわかれた。

九

小春の日に温め返された別荘の小天地を開いて結婚の披露をする。

愛は偏狭を嫌う、また専有をにくむ。愛したる二人の間に有り余る情を挙げて、博く衆生を潤おす。有りあまる財を抛つて多くの賓格を会す。来らざるものは和樂の扇に磨く風を厭うて、寒き雪空に赴く鳧雁の類である。

円満なる愛は触れるところのすべてを円満にす。二人の愛は曇り勝ちなる時雨の空さえも円満にした。——太陽の真上に照る日である。照る事は誰でも知るが、だれも手を翳して仰ぎ見る事

ならぬくらい明かに照る日である。得意なるものに明かなる日の嫌なものはない。客は車を駆つて東西南北より来る。

杉の葉の青きを扱んで、丸柱の太きを装い、頭の上一丈にて二本を左右より平に曲げて続き合せたるをアーチと云う。杉の葉の青きはあまりに厳に過ぐ。愛の郷に入るものは、ただおごそかなる門を潜るべからず。青きものは暖かき色に和げられねばならぬ。裂けば煙る蜜柑の味はしらず、色こそ暖かい。小春の色は黄である。点々と珠を綴る杉の葉影に、ゆたかなる南海の風は通う。紫に明け渡る夜を待ちかねて、ぬつと出る旭日が、岡より岡を射て、万顆の黄玉は一時に耀く紀の国から、偷み来た香りと思われる。この下を通るものは酔わねば出る事を許されぬ掟である。

緑門アーチの下には新しき夫婦が立っている。すべての夫婦は新らし
 くなければならぬ。新しき夫婦は美しくなければならぬ。新しく
 美しき夫婦は幸福でなければならぬ。彼らはこの緑門の下に立っ
 て、迎へたる賓客にわが幸福の一分いちぶを与え、送り出す朋友ほうゆうにわ
 が幸福の一分を与えて、残る幸福に共とも白髪しらがの長き末までを耽ふけ
 べく、新らしいのである、また美しくしいのである。

男は黒き上着しまに縞ズボンの洋袴はを穿く。折々は雪あざむを欺く白き手ハンケチ拭が
 黒き胸のあたりに漂ただよう。女は紋つきである。裾すそを色どる模様はなの華
 やかなるなかから浮き上がるがごとく調子よくすらりと腰から上
 が抜け出でている。ヴィーナスは浪なみのなかから生れた。この女は
 裾模様はなのなかから生れている。

日は明かに女の頸筋くびすじに落ちて、角かどだたぬ咽喉のどの方はほの白き影となる。横から見るとときその影が消えるがごとく薄くなつて、はつきり然としたやさしき輪廓りんかくに終る。その上に紫むらさきのうずまは一朵いちだの暗き髪を束つかねながらも額ひたいぎわ際ぎわに浮かせたのである。金台かねだいに深しん紅くわんくの七宝しつぽうを鏤ちりばめたヌーボー式かんざしの簪かんざしが紫の影から顔だけ出している。

愛は堅きものを忌いむ。すべての硬性こうせいを溶化ようかせねばやまぬ。女の眼かみやに耀かがやく光りは、光りそれ自みずからの溶とけた姿である。不可思議ふかごつなる神境かみかたから双眸そうぼうの底そこに漂ただようて、視界しがいに入る万有ばんいうを恍惚こうこつの境かたに逍遙しょうようせしむる。迎むかえられたる賓客ひんかくは陶然とうぜんとして園内えんないに入る。「高柳たかやなぎさんはいらつしやるでしょうか」と女が小さな声で聞く。

「え？」と男は耳を持つてくる。園内では楽隊が越後獅子えちごじしを奏している。客は半分以上集まった。夫婦はなかへ這入はいつて接待をせねばならん。

「そうさね。忘れていた」と男が云う。

「もうだいぶ御客さまがいらしたから、向むこへ行かないじやわるいでしよう」

「そうさね。もう行く方がいいだろう。しかし高柳がくると可かわい哀想そとうだからね」

「ここにいらつしやらないとですか」

「うん。あの男は、わたしが、ここに見えないと門まで来て引き返すよ」

「なぜ？」

「なぜって、こんな所へ来た事はないんだから——一人で一人坊ひとりぼつちになる男なんだから——、ともかくもアーチを潜くぐらせてしまわないと安心が出来ない」

「いらつしやるんでしようね」

「来るよ、わざわざ行つて頼んだんだから、いやでも来ると約束すると来ずにいられない男だからきつとくるよ」

「御おいや厭いやなんですか」

「厭いやつて、なに別に厭いやな事もないんだが、つまりきまりがわるいのさ」

「ホホホ妙ですわね」

きまりのわるいのは自信がないからである。自信がないのは、人が馬鹿に思うからである。中野君はただきまりが悪いからだと云う。細君はただ妙ですわねと思う。この夫婦は自分達のきまりを悪^{わる}るがる事は忘れている。この夫婦の境^{きようがい}界^{がい}にある人は、いくらきまりを悪^{わる}るがる性^{しょうぶん}分^{ぶん}でも、きまりをわるがらずに生^{しょうがい}涯^{がい}を済ませる事が出来る。

「いらつしやるなら、ここにいて上げる方がいいでしょう」
「来る事は受け合うよ。——いいさ、奥はおやじや何かだいぶいるから」

愛は善人である。善人はその友のために自家の不都合を犠牲にするを憚^{はば}からぬ。夫婦は高柳君のためにアーチの下に待っている。

高柳君は来ねばならぬ。

馬車の客、車の客の間に、ただ一人高柳君は蹠跟そうろうとして敵地に乗り込んで来る。この海のごとく和氣みなぎの漲りたる園遊会——新夫婦おもての面に湛たえたる笑の波に酔うて、われ知らず幸福の同化うを享くる園遊会——行く年をしばらくは春に戻して、のどかなる日影に、窮きゆう陰いんの面まのあたりなるを忘るべき園遊会は高柳君にとつて敵地である。

富いきと勢おと得意と満足ぼつこの跋扈する所は東西球きゆうを極きわめて高柳君には敵地である。高柳君はアーチの下に立つ新しき夫婦を十歩の遠きに見て、これがわが友であるとはたしかに思わなかつた。多少の不都合を犠牲にしてまで、高柳君を待ち受けたる夫婦の眼に高柳

君の姿がちらと映じた時、待ち受けたにもかかわらず、待ち受け甲斐のある御客とは夫婦共に思わなかつた。友誼の三分一は服装が引き受ける者である。頭のなかで考えた友達と眼の前へ出て来た友達とはだいぶ違う。高柳君の服装はこの日の来客中でもっとも憐れなる服装である。愛は贅沢である。美なるもののほかに価値を認めぬ。女はなおさらに価値を認めぬ。

夫婦が高柳君と顔を見合せた時、夫婦共「これは」と思った。高柳君が夫婦と顔を見合せた時、同じく「これは」と思った。

世の中は「これは」と思った時、引き返せぬものである。高柳君は蹠踵として進んでくる。夫婦の胸にはつきざした「これは」は、すぐと愛の光りに姿をかくす。

「やあ、よく来てくれた。あまり遅いから、どうしたかと思つて心配していたところだった」いっわ「偽りもない事実である。ただ「これは」と思つた事だけを略したまでである。

「早く来ようと思つたが、つい用があつて……」これも事実である。けれどもやはり「これは」が略されている。人間の交際にはいつでも「これは」が略される。略された「これは」が重なると、喧嘩けんかなしの絶交となる。親しき夫婦、親しき朋友ほうゆうが、腹のなかの「これは、これは」でなし崩しくずに愛想あいそをつかし合つている。

「これが妻さいだ」と引き合わせる。一人坊ひとりぼつちに美しい妻君を引き合わせるのは好意より出た罪惡である。愛の光りを浴びたものは、嬉うれしさがはびこつて、そんな事に頓とん着じゃくはない。

何にも云わぬ細君はただしとやかに頭を下げた。高柳君はぼんやりしている。

「さあ、あちらへ——僕もいつしよに行こう」と歩を運めぐらす。十間ばかりあるくと、夫婦はすぐ胡麻塩ごましおおやじにつらまった。

「や、どうもみごとな御庭ですね。こう広くはあるまいと思つたが——いえ始めてで。おとっさんから時々御招きはあつたが、いつでも折悪しく用事があつて——どうも、よく御手入れが届いて、実に結構ですな……」

と胡麻塩はのべつに述べたてて容易に動かない。ところへまた二三人がやつてくる。

「結構だ」「何坪ですかな」「私も年来この辺へんを心掛けておりま

すが」などと新夫婦を取り捲まいてしまう。高柳君は慄然ぶぜんとして中心をはずれて立っている。

すると向うから、襷たすきかけの女が駈けて来て、いきなり塩瀬しおぜの五つ紋もんをつらまえた。

「さあ、いらつしやい」

「いらつしやいたつて、もうほかで御馳走ごちそうになつちまつたよ」

「ずるいわ、あなたは、他ひとにこれほど馳かけずり廻まわらせて」

「旨うまいものも、ない癖くせに」

「あるわよ、あなた。まあいいからいらつしやいてえのに」とぐいぐい引つ張る。塩瀬しおぜは羽織しおぜが大事だから引かれながら行く、途と端たんに高柳君に突き当あたった。塩瀬はちよつと驚おどろろいて振り向いたま

では、粗忽そこつをして恐れ入ったと云う面相めんそうをしていたが、高柳君の顔から服装を見るや否や、急に表情を変えた。

「やあ、こりや」と上からさげすむように云つて、しかも立つて見ている。

「いらつしやいよ。いいからいらつしやいよ。構わないでも、いいからいらつしやいよ」と女は高柳君を後目しりめにかけたなり塩瀬を引つ張つて行く。

高柳君はほつぽつ歩き出した。若夫婦は遥はるかあなたに遮さへぎられていつしよにはなれぬ。芝生しばふの真中に長い天幕テントを張る。中を覗のぞいて見たら、暗い所に大きな菊の鉢はちがならべてある。今頃こんな菊がまだあるかと思う。白い長い花卉が中心から四方へ数百片延び尽

して、延び尽した端はじからまた随意そに反り返りつつ、あらん限りの狂態を演じているのがある。背筋せすじの通つた黄な片ひらが中へ中へと抱き合つて、真中に大切なものを守護することく、こんもりと丸くなつたのもある。松の鉢も見える。玻璃盤はりばんに堆うずたかく林檎りんごを盛つたのが、白い卓布たくふの上に鮮あざやかに映る。林檎の頬が、暗きうちにも光っている。蜜柑を盛つた大皿もある。傍そばでけられらと笑う声がある。驚ろいて振り向くと、しるくはつとを被かぶつた二人の若い男が、二人共相好そうこうを崩くずしている。

「妙だよ。実に」と一人が云う。

「珍だね。全く田舎者いなかものなんだよ」と一人が云う。

高柳君はじつと二人を見た。一人は胸開むねあきの狭い。模様のある

チヨツキ
 胴衣を着て、右手の親指を胴衣のほっけつとへ突き込んだまま
 肘^{ひじ}を張っている。一人は細い杖^{つえ}に言訳^{いいわけ}ほどに身をもたせて、護^ゴ
 謨^ムびき靴の右の爪先^{つまさき}を、豎^{たて}に地に突いて、左足一本で細長いか
 らだの中心^{さき}を支えている。

「まるで給仕^{ウエーター}人だ」と一本足が云う。

高柳君は自分の事を云うのかと思つた。すると色胴衣が

「本当にさ。園遊会に燕尾^{えんびふく}服を着てくるなんて——洋行しない
 だつてそのくらいな事はわかりそうなものだ」と相鎚^{あいづち}を打つて
 いる。向うを見るとなるほど燕尾服がいる。しかも二人かたまつ
 て、何か話をしている。同類相集まると云う訳だろう。高柳君は
 ようやくあれを笑つてるのだなと気がついた。しかしなぜ燕尾服

が園遊会に適しないかはとうてい想像がつかなかった。

芝生の行き当りに葭簀掛よしずがけの踊舞台おどりぶたいがあつて、何かしきりにやつている。正面は紅白の幕で庇ひさしをかこつて、奥には赤い毛氈もうせんを敷いた長い台がある。その上に三味線を抱えた女が三人、抱えないのが二人並んでいる。弾ひくものと唄うたうものと分業にしたのである。舞台の真中に金紙きんがみの烏帽子えぼしを被かぶつて、真白に顔を塗ぬりたてた女が、棹さおのようなものを持つたり、落おしたり、舞扇まいおうぎを開いたり、つぼめたり、長い赤い袖そでを翳かざしたり、翳かさなかつたり、何でもしきりに身振しなをしている。半紙はんしに墨黒々と朝妻船あさづまぶねとかいて貼り出はしてあるから、おおかた朝妻船と云うものだろうと高柳君はしばらく後ろうしの方から小さくなつて眺ながめていた。

舞台を左へ切れると、御影みかげの橋がある。橋の向むこうの築山つきやまの傍わきて手には松が沢山ある。松の間から暖簾のれんのようなものがちらちら見える。中で女がききと笑っている。橋を渡りかけた高柳君はまた引き返した。楽隊が一度に満庭の空気を動かして起る。

そろそろと天幕テントの所まで帰って来る。今度は中を覗のぞくのをやめた。中は大勢でがやがやしている。入口へ回って見ると人で埋うづまつて皿の音がしきりにする。若夫婦はどこにいるか見えぬ。

しばらく様子を窺うかがっていると突然万歳と云う声が出た。楽隊の音は消されてしまう。石橋の向うで万歳と云う返事がある。これは迷子まいごの万歳である。高柳君はのそりと疝かんちがい違ちがいをした客のように天幕のうちに這入はいった。

皿だけ高く差し上げて人と人の間を抜けて来たものがある。

「さあ、御上おあがんなさい。まだあるんだが人が込んで容易に手が届かない」と云う。高柳君は自分にくれるにしては目の見当が少し違うと思つたら、後うしろの方で「ありがとう」と云う涼しい声が出た。十七八の桃もも色縮緬いろちりめんの紋付をきた令嬢が皿をもらったまま立っている。

傍にいた紳士が、天幕の隅すみから一脚の椅子いすを持って来て、「さあこの上へ御乗せなさい」と令嬢の前に据すえた。高柳君は一問ばかり左へ進む。天幕の柱に倚よりかかつて洋服と和服が煙草たばこをふかしている。

「葉巻はやめたのかい」

「うん、頭にわるいそうだから——しかしあれを呑みつけると、何だね、紙巻はとうてい呑めないね。どんな好い奴やつでも駄目だ」
「そりや、値段ねだんだけだから——一本三十銭と三銭とは比較にならないからな」

「君は何を呑むのだい」

「これをつやつて見たまえ」と洋服が鰐わにがわ皮の煙草入から太い紙巻を出す。

「なるほどエジプシアンか。これは百本五六円するだろう」

「安い割にはうまく呑めるよ」

「そうか——僕も紙巻でも始めようか。これなら日に二十本ずつにしても二十円ぐらいであるからね」

二十円は高柳君の全収入である。この紳士は高柳君の全収入を煙けむにするつもりである。

高柳君はまた左へ四尺ほど進んだ。二三人話をしている。

「この間ね、野添のぞえが例の人造肥料会社を起すので……」と頭の禿はげた鼻の低い金歯を入れた男が云う。

「うん。ありや当つたね。旨うまくやったよ」と真四角な色の黒い、煙草入の金具のような顔が云う。

「君も賛成者のうちに名が見えたじゃないか」と胡麻塩頭ごましおあたまの最前さいぜん中野君を途中で強奪ごうだつしたおやじが云う。

「それさ」と今度は禿げの番である。「野添が、どうです少し持つてくれませんか」と云うから、さようさ、わたしは今回はまあよ

しましよと断わつたのさ。ところが、まあ、そう云わずと、せめて五百株でも、実はもう貴所あなたの名前にしてあるんだからと云うのさ、面倒だからいい加減に挨拶あいさつをして置いたら先生すぐ九州へ立つて行つた。それから二週間ほどして社へ出ると書記が野添さんの株が大変あが上りました。五十円株が六十五円になりました。合計三万二千五百円になりましたと云うのさ」

「そりや豪勢だ、実は僕も少し持とうと思つてたんだが」と四角が云うと

「ありや實際意外だつた。あんなに、とんとん拍子びょうしにあがろうとは思わなかつた」と胡麻塩ごましおがしきりに胡麻塩頭かを搔く。

「もう少し踏み込んで沢山僕の名にして置けばよかつた」と禿はげは

三万二千五百円以外に残念がつている。

高柳君は恐る恐る三人の傍そばを通り抜けた。若夫婦に逢あつて挨拶して早く帰りたと思つて、見廻わすと一番奥の方に二人は黒いフロックと五色の袖そでに取り巻かれて、なかなか寄りつけそうもない。食卓はようやく人数が減つた。しかし残つている食品はほとんどない。

「近頃は出掛けるかね」と云う声ができる。仙せん台平だいひらをずるずる地がびたへ引きずつて白足袋しろたびに鼠緒ねずおの雪駄せったをかすかに出した三十恰がっこ好うの男だ。

「昨日須崎すさきの種田家たねだけの別荘へ招待されて鴨かもり猟りょうをやつた」と五ご分ぶ刈かりの浅黒いのが答えた。

「鴨にはまだ早いだろう」

「もういいね。十羽ばかり取ったがね。僕が十羽、大谷おおたにが七羽、

加瀬かせと山内やまのうちが八羽ずつ」

「じゃ君が一番か」

「いいや、斎藤は十五羽だ」

「へえ」と仙台平は感心している。

同期の卒業生は多いなかに、たった五六人しか見えん。しかもあまり親しくないものばかりである。高柳君は挨拶だけして別段話もしなかつたが、今となって見ると何だか恋しい心持ちがする。どこぞにおりはせぬかと思廻したが影も見えぬ。ことによると帰つたかも知れぬ。自分も帰ろう。

主客しゅかくは一である。主しゅを離れて客かくなく、客かくを離れて主しゅはない。

吾々が主客の別を立てて物我ぶつがの境きょうを判然ぶんぜんと分劃ぶんかくするのは生存上

の便宜べんぎである。形を離れて色なく、色を離れて形なき強しいて個別

するの便宜、着想を離れて技巧なく技巧を離れて着想なきをしば

らく両体となすの便宜と同様である。一たびこの差別を立りつしたる

時吾人ごじんは一の迷路に入る。ただ生存は人生の目的なるが故ゆえに、生

存に便宜なるこの迷路は入る事いよいよ深くして出いでずる事いよいよ

よかたきを感じひとず。独ひとり生存の欲を一刻たりとも擺脱はいだつしたるとき

にこの迷まよいは破いる事が出来る。高柳君はこの欲を刹那せつなも除去し得えざ

る男である。したがって主客を方寸に一致せしむる事のできがた

き男である。主は主、客は客としてどこまでも膠こうちやく着やくするが故

に、一たび優勢なる客に逢うとき、八方より無形の太刀を揮つて、打ちのめさるるがごとき心地がする。高柳君はこの園遊会において孤軍重囲のうちに陥つたのである。

蹠蹠そくそくとしてアーチを潜くぐつた高柳君はまた蹠蹠としてアーチを出いでざるを得ぬ。遠くから振り返つて見ると青い杉の環わの奥の方にテントテントが小さく映つて、幕のなかから、奇麗きれいな着物がかたまつてあらわれて来た。あのなかに若い夫婦も交つてるのであろう。

夫婦の方では高柳をさがしている。

「時に高柳はどうしたろう。御前おまえあれから逢あつたかい」

「いいえ。あなたは」

「おれは逢わない」

「もう御帰りになつたんでしようか」

「そうさ、——しかし帰るなら、ちつとは帰る前に傍そばへ来て話でもしそうなものだ」

「なぜ皆さんのいらつしやる所へ出ていらつしやらないのですしょう」

「損だね、ああ云う人は。あれで一人じややつぱり不愉快なんだ。不愉快なら出てくればいいのになおなお引き込んでしまう。気の毒な男だ」

「せっかく愉快にしてあげようと思つて、御招きするのにな」

「今日は格別色がわるかつたようだ」

「きつと御病氣ですよ」

「やっぱり一人坊ひとりぼつちだから、色が悪いのだよ」
高柳君は往来をあるきながら、ぞつと悪寒おかんを催もよおした。

十

道也どうや先生長い顔を長くして煤竹すすだけで囲まった丸火桶まるひおけを擁ようしている。外を木枯こがらしが吹いて行く。

「あなた」と次の間まから妻君が出てくる。紬つむぎの羽織の襟えりが折れていない。

「何だ」とこつちを向く。机の前しゆうじつにおりながら、終日しゆうじつ木枯こがらしに吹き曝さらされたかのごとくに見える。

「本は売れたのですか」

「まだ売れないよ」

「もう一カ月も立てば百や貳百の金は這入る都合だとおっしやつたじゃありませんか」

「うん言った。言ったには相違ないが、売れない」

「困るじゃござんせんか」

「困るよ。御前おまえよりおれの方が困る。困るから今考えてるんだ」

「だって、あんなに骨を折って、三百枚も出来てるものを——」

「三百枚どころか四百三十五頁ある」

「それで、どうして売れないんでしょう」

「やっぱり不景気なんだろうよ」

「だろうよじや困りますわ。どうか出来ないでしょうか」

なんめいどう

「南溟堂へ持つて行つた時には、有名な人の御序文があればと云うから、それから足立あだちなら大学教授だから、よかろうと思つて、足立にたのんだのさ。本も借金と同じ事で保証人がないと駄目だぜ」

「借金は借りるんだから保証人もいるでしょうが——」と妻君頭ひとさしのなかへ人指ゆびを入れてぐいぐい搔かく。束髪そくはつが揺れる。道也はその頭を見ている。

「近頃の本は借金同様だ。信用のないものは連帯責任でないと出版が出来ない」

「本当につまらないわね。あんなに夜遅くまでかかつて」

「そんな事は本屋の知らん事だ」

「本屋は知らないでしょうさ。しかしあなたは御存じでしょう」

「ハハハハ当人は知ってるよ。御前も知ってるだろう」

「知ってるから云うのでさあね」

「言ってくれても信用がないんだから仕方がない」

「それでどうなさるの」

「だから足立の所へ持って行つたんだよ」

「足立さんが書いてやるとおっしゃって」

「うん、書くような事を云うから置いて来たら、またあとから書けないって断わって来た」

「なぜでしょう」

「なぜだか知らない。厭いやなのだろう」

「それであなたはそのままにして御置きになるんですか」

「うん、書かんのを無理に頼む必要はないさ」

「でもそれじゃ、うちの方が困りますわ。この間御おめに兄さんに判を押して借りて頂いた御金ももう期限が切れるんですから」

「おれもその方を埋うめるつもりでいたんだが——売れないから仕方がない」

「馬鹿馬鹿しいのね。何のために骨を折ったんだか、分りやしない」

道也先生は火桶ひおけのなかの炭団たどんを火箸ひばしの先で突つつきながら「御前から見れば馬鹿馬鹿しいのさ」と云った。妻君はだまってしまう。

ひゆうひゆうと木枯こがらしが吹く。玄関の障子しょうじの破れが紙鳶たこのうなりのように鳴る。

「あなた、いつまでこうしていらつしやるの」と細君じゆつは術なげに聞いた。

「いつまでも考はない。食べればいつまでこうしていたっていいじゃないか」

「二ふた言目ことめには食べれば食べればとおつしやるが、今こそ、どうにかこうにかして行きますけれども、このぶんで押して行けば今に食べられなくなりますよ」

「そんなに心配するのかい」

細君はむっとした様子である。

「だって、あなたも、あんまり無^{むかんがえ}考^{こう}じやござんせんか。楽に暮せる教師の口はみんな断^{ことわ}つておしまいなすつて、そうして何でも筆で食うと頑固^{がんこ}を御張りになるんですもの」

「その通りだよ。筆で食うつもりなんだよ。御前もそのつもりにするがいい」

「食べるものが食べられれば私だってそのつもりになりますわ。

私も女房ですもの、あなたの御好きでおやりになる事をとやかに云うような差し出口はききやあしません」

「それじゃ、それでいいじゃないか」

「だって食べられないんですもの」

「たべられるよ」

「随分ね、あなたも。現に教師をしていた方が楽で、今の方がよっぽど苦しいじゃありませんか。あなたはやつぱり教師の方が御上手なんですよ。書く方は性に合しわないんですよ」

「よくそんな事がわかるな」

細君は俯うつむ向むいて、袂たもとから鼻紙を出してちいんと鼻をかんだ。

「私ばかりじゃ、ありませんわ。御おあ兄にいさんだつて、そうおつしやるじゃありませんか」

「御前は兄の云う事をそう信用しているのか」

「信用したつていいじゃありませんか、御兄さんですもの、そうして、あんなに立派りっぺいにしていらつしやるんですもの」

「そうか」と云つたなり道也先生は火鉢ひばちの灰を丁寧ていねいに搔かきならず。

中から二寸釘くぎが灰だらけになって出る。道也先生は、曲まった真しん鍮ちゆうの火箸ひばしで二寸釘をつまみながら、片手に障子をあけて、ほいと庭先へ抛ほうり出した。

庭には何にもない。芭蕉ばしやうがずたずたに切れて、茶色ながら立往生りやうじやうをしている。地面は皮が剥むけて、蓆むしろを捲まきかけたように反そくり返かえっている。道也先生は庭の面おもてを眺ながめながら

「だいぶ吹ふいてるな」と独ひとりごと語ことのように云いった。

「もう一遍足立あしだてさんに願ねがって御覧ごらんになつたらどうでしょう」

「厭いやなものに頼たのんだって仕方がないさ」

「あなたは、それだから困こるのね。どうせ、あんな、豪えらい方かたになれば、すぐ、おいそれと書いて下くださる事ことはないでしょうから……」

「あんな豪い方つて——足立がかい」

「そりや、あなたも豪いでしようさ——しかし向はともかくも大
学校の先生ですから頭を下げたつて損はないでしょう」

「そうか、それじゃおおせに従つて、もう一返頼んで見ようよ。

——時に何時かな。や、大変だ、ちよつと社まで行つて、校正を
してこなければならぬ。袴を出してくれ」

道也先生は例のごとく茶の千筋の嘉平治を木枯にぺらつか
すべく一着して飄然と出て行つた。居間の柱時計がぼんぼん
と二時を打つ。

思う事積んでは崩す炭火かなと云う句があるが、細君は恐らく
知るまい。細君は道也先生の丸火桶の前へ来て、火桶の中を、

丸く搔きならしている。丸い火桶だから丸く搔きならず。角な火桶なら角に搔きならずだろう。女は与えられたものを正しいものとする。そのなかで差し当りのないように暮らすのを至善しぜんと心得ている。女は六角の火桶を与えられても、八角の火鉢を与えられても、六角にまた八角に灰を搔きならず。それより以上の見識は持たぬ。

立つてもおらぬ、坐ってもおらぬ、細君の腰は宙に浮いて、膝ひざは火桶の縁ふちにつきつけられている。坐すわるには所を得ない、立たつては考えられない。細君の姿勢は中途半把ちゆうはんぱで、細君の心も中途半把である。

考えると嫁に来たのは間違っている。娘のうちの方が、いくら

氣樂で面白かったか知れぬ。人の女房はこんなものと、誰か教えてくれたら、来ぬ前によすはずであつた。親でさえ、あれほどに親切を尽してくれたのだから、二世にせの契りちぎと掟おきてにさえ出ている夫は、二重にも三重にも可愛がつてくれるだろう、また可愛がつて下さるよと受合うあわれて、住み馴れた家いえを今日限りと出た。今日限りと出た家うちへ二度とは帰られない。帰ろうと思つてもおとつさんもお母つかさんも亡くなつてしまつた。可愛がられる目的あてははずれて、可愛がつてくれる人はもうこの世にいない。

細君は赤い炭たん団の、灰の皮を剥むいて、火箸ひばしの先で突つつき始めた。炭火くずなら崩くずしても積む事が出来る。突つついた炭たん団は壊こわれたぎり、丸い元の姿には帰らぬ。細君はこの理を心得ているだろうか。し

きりに突ついている。

今から考えて見ると嫁に来た時の覚悟が間違っている。自分が嫁に来たのは自分のために来たのである。夫のためと云う考はずこしも持たなかつた。吾が身が幸福になりたいばかりに祝言しゅうげんの盃さかずきもした。父、母もそのつもりで高砂たかさごを聴いていたに違いない。思う事はみんなはずれた。この頃の模様を父、母に話したら定めし道也はけしからぬと怒おこるであろう。自分も腹の中では怒っている。

道也は夫の世話をするのが女房の役だと済ましているらしい。それはこつちで云いたい事である。女は弱いもの、年の足らぬもの、したがって夫の世話を受くべきものである。夫を世話する以

上に、夫から世話されるべきものである。だから夫に自分の云う通りになれと云う。夫はけつして聞き入れた事がない。家庭の生しょうがい

涯やがひ

はむしろ女房の生涯である。道也は夫の生涯と心得ている

らしい。それだから治おさまらない。世間の夫は皆道也のようなものかしらん。みんな道也のようだとすれば、この先結婚をする女はだんだん減るだろう。減らないところで見るとほかの旦那様は旦那様らしくしているに違ない。広い世界に自分一人がこんな思おもいをしてるかど気がつくど生涯の不幸である。どうせ嫁に來たからには出る訳わけには行かぬ。しかし連れ添う夫がこんなでは、臨終まで本当の妻と云う心持が起らぬ。これはどうかせねばならぬ。どうかして夫を自分の考え通りの夫にしなくては生きている甲か

斐いがない。——細君はこう思案しながら、火鉢をいじくっている。風が枯かれ芭蕉ぼしやうを吹き倒すほど鳴る。

表に案内がある。寒そうな顔を玄関の障子から出すと、道也の兄が立っている。細君は「おや」と云った。

道也の兄は会社の役員である。その会社の社長は中野君のおやじである。長い二重廻しを玄関へ脱いで座敷へ這はい入ってくる。

「だいぶ吹きますね」と薄うすい更紗さらさの上へ坐つて抜け上がった額ひたいを逆さかに撫なでる。

「御寒いのによく」

「ええ、今日は社の方が早く引けたものだから……」

「今御帰り掛けですか」

「いえ、いったんうちへ帰ってね。それから出直して来ました。

どうも洋服だと坐ってるのが窮屈で……」

兄は糸織の小袖こそでに鉄御納戸てつおなんどの博多はかたの羽織を着ている。

「今日は——留守ですか」

「はあ、たった今しがた出ました。おっつけ帰りましょう。どうぞ御緩ごゆっくり」と例の火鉢を出す。

「もう御構おかまいなさるな。——どうもなかなか寒い」と手を翳かざす。

「だんだん押し詰りましてさぞ御忙おいそがしゆう、いらっしやいましたよう」

「へ、ありがとう。毎年暮になると大頭痛、ハハハハ」と笑った。世の中の人はおかしい時ばかり笑うものではない。

「でも御忙がしいのは結構で……」

「え、まあ、どうか、こうかやってるんです。——時に道也はやはり不相変あいかわらずですか」

「ありがとう。この方はただ忙がしいばかりで……」

「結構でないかね。ハハハハ。どうも困った男ですねえ、御政おまささん。あれほど訳わけがわからないとまでは思わなかつたが」

「どうも御心配ばかり懸かけまして、私もいろいろ申しますが、女の云う事だと思つてちつとも取り上げませんので、まことに困り切ります」

「そうでしょう、私わたしの云う事だつて聞かないんだから。——わたしも傍そばにいるとつい気になるから、ついとやかく云いたくなくて

ね」

「ごもつともでございますとも。みんな当人のためにおつしやつて下さる事ですから……」

「田舎いなかにいりや、それまでですが、こつちにこうしていると、当人の氣にいつても、いらなくつても、やっぱり兄の義務でね。つい云いたくなるんです。——するとちつとも寄りつかない。全く変人だね。おとなしくして教師をしていりやそれまでの事を、どこへ行つても衝突して……」

「あれが全く心配で、私もあのためには、どんなに苦勞したか分りません」

「そうでしょうとも。わたしも、そりやよく御察し申しているん

です」

「ありがとうございます。いろいろ御厄介ごやっかいにばかりなりまして」

「東京へ来てからでも、こんなくだらん事をしないでも、どうにでも成るんでさあ。それをせっかく云ってやると、まるで取り合わない。取り合わないでもいいから、自分だけ立派にやって行けばいい」

「それを私も申すのでござんすけれども」

「いざとなると、やっぱりどうかしてくれと云うんでしょう」

「まことに御気の毒さまで……」

「いえ、あなたに何も云うつもりはない。当人がさ。まるで無鉄砲ですからね。大学を卒業して七八年にもなつて筆耕ひっこうの真似まねを

しているものが、どこの国にいるものですか。あれの友達の足立なんて人は大学の先生になって立派にしているじゃありませんか」

「自分だけはあれでなかなかえらいつもりでおりますから」

「ハハハハえらいつもりだつて。いくら一人でえらがつたつて、人が相手にしなくつちやしようがない」

「近頃は少しどうかしているんじゃないかと思ひます」

「何とも云えませんが。——何でもしきりに金持やなにかを攻撃するそうじゃありませんか。馬鹿ですな。そんな事をしたつてどこが面白い。一文にやならず、人からは擯ひんせき斥される。つまり自分の錆さびになるばかりでさあ」

「少しは人の云う事でも聞いてくれるといいんですけれども」

「しまいには人にまで迷惑をかける。——実はね、きよう社でもって赤面しちまつたんですがね。課長が私わたしを呼んで聞けば君の弟だそうだが、あの白井道也とか云う男は無暗むやみに不穩な言論をして富豪などを攻撃する。よくない事だ。ちつと君から注意したらよからうって、さんざん叱られたんです」

「まあどうも。どうしてそんな事が知れましたんでしよう」

「そりや、会社なんてものは、それぞれ探偵が届きますからね」
「へえ」

「なに道也なんぞが、何をかいたって、あんな地位のないものに世間せいけんが取り合うきづかい氣遣きづかいはないが、課長からそう云われて見ると、放ほうつて置けませんからね」

「ごもつともで」

「それで実は今日は相談に来たんですがね」

「生憎あいにく出まして」

「なに当人はいない方がかえっていい。あなたと相談さえすればいい。——で、わたしも今途中でだんだん考えて来たんだが、どうしたものでしょう」

「あなたから、とくと異見いけんでもしていただいて、また教師にでも奉職したら、どんなものでございましょう」

「そうなればいいですとも。あなたも仕合せしあわせだし、わたしも安心だ。——しかし異見いけんでおいそれと、云う通りになる男じゃありませんよ」

「そうでござんすね。あの様子じゃ、とても駄目でございませうか」

「わたしの鑑定じゃ、とうてい駄目だ。——それでここに一つの策があるんだが、どうでしょう当人の方から雑誌や新聞をやめて、教師になりたいと云う気を起させるようにするのは」

「そうなれば私は実にありがたいのですが、どうしたら、そう旨うまい具合に参りましたよう」

「あのこの間あいだじゆう中 当人がしきりに書いていた本はどうなりました」

「まだそのままになっております」

「まだ売れないですか」

「売れるどころじゃございません。どの本屋もみんな断わります
そうで」

「そう。それが売れなけりやかえって結構だ」

「え？」

「売れない方がいいんですよ。——で、せんだってわたしが周旋
した百円の期限はもうじきでしょう」

「たしかこの月の十五日だと思えます」

「今日が十一日だから。十二、十三、十四、十五、ともう四日よっか
すね」

「ええ」

「あの方を手厳てきびしく催促させるのです。——実はあなただから、

今打ち明けて御話しするが、あれは、わたしが印を押している体たいにはなっているが本当はわたしが融通したのです。——そうしな
いと当人が安心していけないから。——それであの方を今云う通
り責める——何かほかに工面くめんの出来る所がありますか」

「いいえ、ちつともございません」

「じゃ大丈夫、その方でだんだん責めて行く。——いえ、わたし
は黙って見ている。証文の上の貸手が催促に来るのです。あなた
も済すましていなくっちゃいけません。——何を云つても冷淡に済ま
していなくっちゃいけません。けっしてこちらから、一言も云わ
ないのです。——それで当人いくら頑固がんこだつて苦しいから、また、
わたしの方へ頭を下げて来る。いえ来なけりやならないです。そ

の、頭を下げて来た時に、取つて抑おさえるのです。いいですか。そうたよつて来るなら、おれの云う事を聞くがいい。聞かなければおれは構わん。と云いやあ、向むこでも否いやとは云われんです。そこでわたしが、御政おまささんだつて、あんなに苦勞してやっている。雑誌なんかで法螺ほらばかり吹き立てていたつて始まらない、これから性し根ようねを入れかえて、もつと着実な世間に害のないような職業をやり、教師になる気なら心当りを奔走ほんそうしてやろう、と持もち懸かけるのですね。——そうすればきつと我々の思わく通りになると思うが、どうでしょう」

「そうなれば私はどんなに安心が出来るか知れませんが」

「やつて見ましようか」

「何分宜しく願います」
なにぶんよろ

「じゃ、それはきまつたと。そこでもう一つあるんですがね。今日社の帰りがけに、神田を通つたら清輝館せいきかんの前に、大きな広告があつて、わたしは吃驚びっくりさせられましたよ」

「何の広告でござんす」

「演説の広告なんです。——演説の広告がいいが道也が演説をやるんですぜ」

「へえ、ちつとも存じませんでした」

「それで題が大きいから面白い、現代の青年に告ぐと云うんです。まあ何の事やら、あんなものの云う事を聞きにくる青年もなさそうじゃありませんか。しかし劍呑けんのおんですよ。やけになつて何を云

うか分らないから。わたしも課長から忠告された矢先だから、すぐ社へ電話をかけて置いたから、まあ好いですが、何なら、やらせたくないものですね」

「何の演説をやるつもりでござんしょう。そんな事をやるとまた人様に御迷惑がかかりましょうね」

「どうせまた過激な事でも云うのですよ。無事に済めばいいが、つまらない事を云おうものなら取って返しがつかないからね。——どうしてもやめさせなくっちゃ、いけないね」

「どうしたらやめるでござんしょう」

「これもよせったって、頑固だから、よす気遣はない。やつぱり欺すより仕方がないでしょう」

「どうして欺したらいいでしょう」

「そうさ。あした時刻にわたしが急用で逢あいたいからつて使をよこして見ましようか」

「そうでござんすね。それで、あなたの方へ参るようだと宜よろしゅうございませが……」

「聞かないかも知れませぬ。聞かなければそれまでさ」

初はつ冬ふゆの日はもう暗くなりかけた。道也先生は風のなかを帰つてくる。

今日もまた風が吹く。汗氣あせけのあるものをことごとく乾から鮭さけにするつもりで吹く。

「御おあにい兄にいさんの所から御使ごしです」と細君が封書を出す。道也は坐まつたまま、体たいをそらして受け取とつた。

「待つてるかい」

「ええ」

道也は封を切つて手紙を読み下す。やがて、終りから巻き返して、再び状袋のなかへ収めた。何にも云わない。

「何か急用でもござんすか」

道也は「うん」と云いながら、墨を磨すつて、何かさらさらと返事したたを認めめている。

「何の御用ですか」

「ええ？　ちよつと待った。書いてしまうから」

返事はわずか五六行である。宛名をあてなかいて、「これを」と出す。細君は下女を呼んで渡してやる。自分は動かない。

「何の御用なんですか」

「何の用かわからない。ただ、用があるから、すぐ来てくれとかいてある」

「いらつしやるでしょう」

「おれは行かない。なんならお前行つて見てくれ」

「私が？　私は駄目ですわ」

「なぜ」

「だって女ですもの」

「女でも行かないよりいいだろう」

「だって。あなたに來いと書いてあるんでしよう」

「おれは行かれないもの」

「どうして？」

「これから出掛けなくっちゃならん」

「雑誌の方なら、一日ぐらい御休みになつてもいいでしょう」

「編^{へん}輯^{しゅう}ならいいが、今日は演説をやらなくっちゃならん」

「演説を？ あなたがですか？」

「そうよ、おれがやるのさ。そんなに驚ろく事はなからう」

「こんなに風が吹くのに、よしになさればいいのに」

「ハハハハ風が吹いてやめるような演説なら始めからやりやしない」

「ですけども滅多めったな事はなさらない方がよござんすよ」

「滅多な事とは。何がさ」

「いいえね。あんまり演説なんかなさらない方が、あなたの得とくだと云うんです」

「なに得な事があるものか」

「あとが困るかも知れないと申すのです」

「妙な事を云うね御前は。——演説をしちやいけないと誰か云つたのかね」

「誰がそんな事を云うものですか。——云いやしませんが、御おあに

兄いさんからこうやって、急用だつて、御使が来ているんですか
ら行つて上げなくつては義理がわるいじゃありませんか」

「それじゃ演説をやめなくつちやならない」

「急にさしつかえ差支さしつかえが出来たつて断わつたらいいでしょう」

「今さらそんな不義理が出来るものか」

「では御兄さんの方へは不義理をなすつても、いいとおつしやる
んですか」

「いいとは云わない。しかし演説会の方は前からの約束で——そ
れに今日の演説はただの演説ではない。人を救うための演説だよ」
「人を救うつて、誰を救うのです」

「社のもので、この間の電車事件を煽せんどう動したと云う嫌疑けんぎで引つ

張られたものがある。——ところがその家族が非常な惨状おちいに陥つて見るに忍びないから、演説会をしてその収入をそちらへ廻してやる計画なんだよ」

「そんな人の家族を救うのは結構な事に相違ないでしょうが、社会主義だなんて間違えられるとあとが困りますから……」

「間違えたって構わないさ。国家主義も社会主義もあるものか、ただ正しい道がいいのさ」

「だって、もしあなたが、その人のようになったとして御覧なさい。私はやつぱり、その人の奥さん同様な、ひどい目に逢わなければならぬでしょう。人を御救いなさるのも結構ですが、ちつとは私の事も考えて、やって下さらなくっちゃ、あんまりですわ」

道也先生はしばらく沈吟ちんぎんしていたが、やがて、机の前を立ちながら「そんな事はないよ。そんな馬鹿な事はないよ。徳川政府の時代じゃあるまいし」と云った。

例の袴はかまを突っかけると支度したくは一分たたぬうちに出来上った。玄関へ出る。外はいまだに強く吹いている。道也先生の姿は風の中に消えた。

清輝館せいきかんの演説会はこの風の中に開かれる。

講演者は四名、聴衆は三百名足らずである。書生が多い。その中に文学士高柳周作がいる。彼はこの風の中を襟巻えりまきに顔を包んで咳せきをしながらやって来た。十銭の入場料を払って、二階あがに上った時は、広い会場はまばらに席をあましてむしろ寂寞せきばくの感があ

った。彼は南側のなるべく暖かそうな所に席をとった。演説はす
でに始まっている。

「……文士保護は独立しがたき文士の言う事である。保護とは貴
族的時代に云うべき言葉で、個人平等の世にこれを云々するの
は恥辱の極きよくである。退いて保護を受くるより進んで自己に適当な
る租税を天下から払わしむべきである」と云つたと思つたら、引
き込んだ。聴衆は喝かつさい采する。隣りに薩摩さつまがすり絣の羽織を着た書生
がいて話している。

「今のが、黒田東陽くろだとうようか」

「うん」

「妙な顔だな。もっと話せる顔かと思つた」

「保護を受けたら、もう少し顔らしくなるだろう」

高柳君は二人を見た。二人も高柳君を見た。

「おい」

「何だ」

「いやに睨めるじゃねえか」

「おつかねえ」

「こんだ誰の番だ。——見ろ見ろ出て来た」

「いやに、ひよろ長いな。この風にどうして出て来たろう」

ひよろながい道也先生は綿服めんぷくのまま壇上にあらわれた。かれ

はこの風の中を金釘かなくぎのごとく直立して来たのである。から風に

吹き曝さらされたる彼は、からからの古瓢箪ふるびょうたんのごとくに見える。

聴衆は一度に手をたたく。手をたたくのは必ずしも喝采の意と解すべからざる場合がある。独り高柳君のみは肅然として襟を正した。

「自己は過去と未来の連鎖である」

道也先生の冒頭は突如として来た。聴衆はちよつと不意撃を食つた。こんな演説の始め方はない。

「過去を未来に送り込むものを旧派と云い、未来を過去より救うものを新派と云うのであります」

聴衆はいよいよ惑つた。三百の聴衆のうちには、道也先生をひやかす目的をもつて入場しているものがある。彼らに一寸の隙でも与えれば道也先生は壇上に嘲殺されねばならぬ。角力は呼

吸きゆうである。呼吸を計らんでひやかせばかえつて自分が放ほうり出されるばかりである。彼らは蛇のごとく鎌かまくび首を持ち上げて待構えている。道也先生の眼中には道の一字がある。

「自己のうちに過去なしと云うものは、われに父ふ母ぼなしと云うがごとく、自己のうちに未来なしと云うものは、われに子を生む能力なしというと一般である。わが立脚地はここにおいて明めい瞭りょうである。われは父ふ母ぼのために存在するか、われは子のために存在するか、あるいはわれそのものを樹立せんがために存在するか、吾ご人じん生存の意義はこの三者の一を離るる事が出来なのである」

聴衆は依然として、だまっている。あるいは煙けむに捲まかれたのかも知れない。高柳君はなるほど聴いている。

「文芸復興は大なる意味において父母のために存在したる大時期である。十八世紀末のゴシック復活もまた大なる意味において父母のために存在したる小時期である。同時にスコット一派の浪漫派らんぱを生まんがために存在した時期である。すなわち子孫のため存在したる時期である。自己を樹立せんがために存在したる時期の好例はエリザベス朝の文学である。個人について云えばイブセンである。メレジスである。ニイチエである。ブラウニングである。耶蘇教徒ヤソキようとは基督キリストのために存在している。基督いにしは古えの人である。だから耶蘇教徒は父のために存在している。儒者じゆしゃは孔子こうしのために存在している。孔子いにしも昔えの人である。だから儒者は父のために生きている。……」

「もうわかった」と叫ぶものがある。

「なかなかわかりません」と道也先生が云う。聴衆はどつと笑つた。

「あわせ 袷ひとえもの のために存在するですか、綿入のために存在するですか。または袷自身のために存在するですか」と云つて、一応聴衆を見廻した。笑うにはあまり、奇警である。慎つしむにはあまり飄ひょうきんである。聴衆は迷うた。

「六むずかしい問題じゃ、わたしにもわからん」と済ました顔で云つてしまう。聴衆はまた笑つた。

「それはわからんでも差さしつかない。しかし吾われわれ々は何のために存在しているか？ これは知らなくてはならん。明治は四十年立

つた。四十年は短かくはない。明治の事業はこれで一段落を告げた……」

「ノー、ノー」と云うものがある。

「どこかでノー、ノーと云う声がある。わたしはその人に賛成である。そう云う人があるだろうと思うて待っていたのである」

聴衆はまた笑った。

「いや本当に待っていたのである」

聴衆は三たびとき関をあ揚げた。

「わたし私は四十年の歳月を短かくはないと申した。なるほど住んで見れば長い。しかし明治以外の人から見たらやはり長いだろうか。

望遠鏡の眼鏡は一寸の直径である。しかしめがね愛宕山あたごやまから見ると品

川の沖がこの一寸のなかに這入はいつてしまう。明治の四十年を長いと云うものは明治のなかに齷齪あくせくしているもの云う事である。後世から見ればずっと縮まつてしまふ。ずっと遠くから見ると一いち弾指ちだんしの間に過ぎかんん。——一弾指の間に何が出来る」と道也はテールたブルの上をとんと敲たたいた。聴衆はちよつと驚ろいた。

「政治家は一大事業をしたつもりでいる。学者も一大事業をしたつもりでいる。実業家も軍人もみんな一大事業をしたつもりでいる。したつもりでいるがそれは自分のつもりである。明治四十年の天地に首を突き込んでから、したつもりになるのである。

——一弾指の間に何が出来る」

今度は誰も笑わなかった。

「世の中の人は云うている。明治も四十年になる、まだ沙翁さおうが出ない、まだゲエテが出ない。四十年を長いと思えばこそ、そんな愚痴ぐちが出る。一弾指の間に何が出る」

「もうでるぞ」と叫んだものがある。

「もうでるかも知れん。しかし今までに出ておらん事は確かである。——一言にして云えば」と句を切った。満場はしんとしている。

「明治四十年の日月じつげつは、明治開化の初期である。さらに語ごを換かえてこれを説明すれば今日の吾人ごじんは過去かこを有もたぬ開化のうちに生息せいそくしている。したがって吾人は過去を伝うべきために生れたのではない。——時は昼ちゆうや夜やを舍すてず流れる。過去のない時代はない。

——諸君誤解してはなりません。吾人は無論過去を有している。しかしその過去は老耄ろうもうした過去か、幼稚な過去である。則のつとるに足るべき過去は何にもない。明治の四十年は先例のない四十年である」

聴衆のうちになかなかと云う顔をしている者がある。

「先例のない社会に生れたものほど自由なものはない。余は諸君がこの先例のない社会に生れたのを深く賀するものである」

「ひや、ひや」と云う声しよしよが所々に起る。

「そう早合点はやがてんに賛成されては困る。先例のない社会に生れたものは、自から先例を作らねばならぬ。束縛うのない自由を享けるものは、すでに自由のために束縛されている。この自由をいかに使

いこなすかは諸君の権利であると同時に大なる責任である。諸君。偉大なる理想を有せざる人の自由は墮落であります」

言い切った道也先生は、両手を机の上に置いて満場を見廻した。雷が落ちたような気合である。

「個人について論じてもわかる。過去を顧みる人は半白の老人である。少壮の人に顧みるべき過去はないはずである。前途に大なる希望を抱くものは過去を顧みて恋々たる必要がないのである。——吾人が今日生きている時代は少壮の時代である。過去を顧みるほどに老い込んだ時代ではない。政治に伊藤侯や山県侯を顧みる時代ではない。実業に渋沢男や岩崎男を顧みる時代ではない。……」

「だいきえん大気」と評したのは高柳君の隣りにいたさつまがすり薩摩緋である。
高柳君はむつとした。

「文学に紅葉氏一葉氏を顧みる時代ではない。これらの人々は諸君の先例になるがために生きたのではない。諸君を生むために生きたのである。最さいぜん前の言葉を用いればこれらの人々は未来のために生きたのである。子のために存在したのである。しかして諸君は自己のために存在するのである。——およそ一時代にあつて初期の人は子のために生きる覚悟をせねばならぬ。中期の人は自己のために生きる決心が出来ねばならぬ。後期の人は父のために生きるあきらめをつけなければならぬ。明治は四十年立つた。まおおいず初期と見て差さしつかえ支なかりう。すると現代の青年たる諸君は大

に自己を發展して中期をかたちづくらねばならぬ。後ろを顧みる必要なく、前を氣遣きづかう必要もなく、ただ自我を思おもひのままに發展し得る地位に立つ諸君は、人生の最大愉快を極きわむるものである」

満場は何となくどよめき渡つた。

「なぜ初期のものが先例にならん？ 初期はもつとも不秩序の時代である。偶然の跋扈ばつこする時代である。僥倖ぎようこうの勢いきおいを得る時代である。初期の時代において名を揚げあげたるもの、家を起したるもの、財を積みたるもの、事業をなしたるものは必ずしも自己の力量に由よつて成功したとは云われぬ。自己の力量によらずして成功するは士のもつとも恥辱とするところである。中期のものはこの点において遙はるかに初期の人々よりも幸福である。事を成すのが困

難であるから幸福である。困難にもかかわらず僥倖が少ないから幸福である。困難にもかかわらず力量しだいで思うところへ行けるほどの余裕があり、発展の道があるから幸福である。後期に至るとかたまってしまふ。ただ前代を祖述そじゆつするよりほかに身動きがとれぬ。身動きがとれなくなつて、人間が腐つた時、また波瀾はらんが起る。起らねば化石するよりほかにしようがない。化石するのがいやだから、自みずから波瀾を起すのである。これを革命と云うのである。

「以上は明治の天下にあつて諸君の地位を説明したのである。かかる愉快な地位に立つ諸君はこの愉快に相当する理想を養わねばならん」

道也先生はここにおいて一いってんご転語を下した。聴衆は別にひやかす気もなくなつたと見える。黙つている。

「理想は魂である。魂は形がないからわからない。ただ人の魂の、行為に発現するところを見てほうふつ髣髴するに過ぎん。惜しいかな現代の青年はこれを髣髴することが出来ん。これを過去に求めでもない、これを現代に求めてはなおさらない。諸君は家庭あに在つて父母を理想とする事が出来ますか」

あるものは不平な顔をした。しかしだまつている。

「学校に在つて教師を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「社会に在つて紳士を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「事実上諸君は理想をもつておらん。家に在つては父母を軽蔑し、学校に在つては教師を軽蔑し、社会に出でては紳士を軽蔑している。これらを軽蔑し得るのは見識である。しかしこれらを軽蔑し得るためには自己により大なる理想がなくてはならん。自己に何らの理想なくして他を軽蔑するのは墮落である。現代の青年は滔々として日に墮落しつつある」

聴衆は少しく色めいた。「失敬な」とつぶやくものがある。道也先生は昂然として壇下を睥睨している。

「英国風を鼓吹して憚からぬものがある。気の毒な事である。己れに理想のないのを明かに暴露している。日本の青年は滔々とし

て墮落するにもかかわらず、いまだここまでは墮落せんと思う。すべての理想は自己の魂である。うちより出いでねばならぬ。奴隷の頭脳に雄大な理想の宿りようがない。西洋の理想に圧倒せられて眼がくらむ日本人はある程度において皆奴隷である。奴隷をもつて甘んずるのみならず、争つて奴隷たらんとするものに何らの理想が脳裏のうりに醜はつこ醜うし得る道理があろう。

「諸君。理想は諸君の内部から湧わき出なければならぬ。諸君の学問見識が諸君の血となり肉となりついに諸君の魂となつた時に諸君の理想は出来上るのである。付焼刃つけやきばは何にもならない」

道也先生はひやかされるなら、ひやかして見ろと云わぬばかりに片手の拳げんこつ骨をテーブルの上に乗せて、立っている。汚くない黒

ろもめん
木綿の羽織に、べんべらの袴はかまは最前さいぜんほどに目立たぬ。風の音がごうと鳴る。

「理想のあるものは歩くべき道を知っている。大なる理想のあるものは大なる道がある。迷子まいごとは違う。どうあつてもこの道があるかねばやまぬ。迷いたくても迷えんのである。魂がこちらこちらと教えるからである。

「諸君のうちには、どこまで歩くつもりだと聞くものがあるかも知れぬ。知れた事である。行ける所まで行くのが人生である。誰も自分の寿命を知ってるものはない。自分に知れない寿命は他人にはなおさらわからない。医者在家業にする専門家でも人間の寿命を勘定する訳には行かぬ。自分が何歳まで生きるかは、生き

たあとで始めて言うべき事である。八十歳まで生きたと云う事は八十歳まで生きた事実が証拠立ててくれねばならん。たとい八十歳まで生きる自信があつて、その自信通りになる事が明瞭めいりょうであるにしても、現に生きたと云う事実がない以上は誰も信ずるものはない。したがつて言うべきものでない。理想の黙示もくじを受けて行くべき道に行くのもその通りである。自己がどれほどに自己の理想を現実にし得るかは自己自身にさえ計られん。過去がこうであるから、未来もこうであろうぞと臆測おくそくするのは、今まで生きていたから、これからも生きるだろうと速断するようなものである。一種の山やましである。成功を目的にして人生の街頭に立つものはすべて山師やましである」

高柳君の隣りにいた薩摩^{さつまがすり}緋は妙な顔をした。

「社会は修羅場^{しゆらじよう}である。文明の社会は血を見ぬ修羅場である。

四十年前^{ぜん}の志士は生死^{あいだ}の間に^{しゆつにゆう}出入して維新の大業を成就した。

諸君の冒^{おか}すべき危険は彼らの危険より恐ろしいかも知れぬ。血を

見ぬ修羅場は砲声剣光の修羅場よりも、より深刻に、より悲惨で

ある。諸君は覚悟をせねばならぬ。勤王の志士以上の覚悟をせね

ばならぬ。斃^{たお}るる覚悟をせねばならぬ。太平の天地だと安心して、

拱^{きようしゆ}手^てして成功^{こいねがはい}を冀^{こいねがはい}う輩^{はい}は、行くべき道^{つまず}に躓^{つまず}いて非業^{ひごう}に死した

る失敗^じの児^じよりも、人間の価値^{はる}は遥かに乏しいのである。

「諸君は道を行かんがために、道を遮^{さえ}ぎるものを追わねばならん。

彼らと戦うときに始めて、わが生^{しょうがい}涯^{がい}の内^{ないせいめい}生命^{せいめい}に、勤王の諸

士があえてしたる以上の煩悶はんもんと辛慘しんさんとを見出し得るのである。——今日は風が吹く。昨日きのうも風が吹いた。この頃の天候は不穩である。しかし胸裏きょうりの不穩はこんなものではない」

道也先生は、がたつく硝子窓ガラスまどを通して、往来の方を見た。折から一陣の風が、会釈えしやくなく往来の砂を捲まき上げて、屋やの棟むねに突き当つて、虚空こくうを高く逃のがれて行つた。

「諸君。諸君のどれほどに剛健なるかは、わたしには分らん。諸君自身にも知れぬ。ただ天下後世が証拠だてるのみである。理想の大道たいどうを行き尽して、途上に斃せつる刹那せつなに、わが過去を一瞥いちべつのうちうちに縮め得て始めて合点がてんが行くのである。諸君は諸君の事業そのものに由よつて伝えられねばならぬ。単に諸君の名に由つて伝

えられんとするは軽薄である」

高柳君は何となくきまりがわるかった。道也の輝やく眼が自分の方に注いでいるように思われる。

「理想は人によつて違ふ。吾々は学問をする。学問をするもの理想は何であろう」

聴衆は黙然として応ずるものがない。

「学問をするものの理想は何であろうとも——金でない事だけはたしかである」

五六カ所に笑声が起る。道也先生の裕福ならぬ事はその服装を見たものの心から取り除けられぬ事実である。道也先生は羽織のゆきを左右の手に引つ張りながら、まず徐ろにわが右の袖を見

た。次に眼を転じてまた徐ろにわが左の袖を見た。黒木綿くろもめんの織目のなかに砂がいつぱいたまっている。

「随分きたない」と落ちつき払って云った。

笑しょうせい声

が満場に起る。これはひやかしの笑声ではない。道也

先生はひやかしの笑声を好意の笑声で揉もみ潰つぶしたのである。

「せんだって学問を専門にする人が来て、私わたしも妻さいをもろうて子が出来た。これから金を溜ためねばならぬ。是非共子供に立派な教育をさせるだけは今のうちに貯蓄して置かねばならん。しかしどうしたら貯蓄が出来るでしょうかと聞いた。

「どうしたら学問で金がとれるだろうと云う質問ほど馬鹿気た事はない。学問は学者になるものである。金になるものではない。

学問をして金をとる工夫くふうを考えるのは北極へ行つて虎狩をするよ
うなものである」

満場はまたちよつとどよめいた。

「一般の世人は労力と金の関係について大なる誤謬ごびゆうを有して
いる。彼らは相応の学問をすれば相応の金がとれる見込のあるもの
だと思う。そんな条理は成立する訳がない。学問は金に遠ざかる
器械である。金がほしければ金を目的にする実業家とか商買人に
なるがいい。学者と町人とはまるで別途の人間であつて、学者が
金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして丁稚てっちに住
み込むようなものである」

「そうかなあ」と突飛とつぴな声を出す奴やつがいる。聴衆はどつと笑つた。

道也先生は平然として笑のしずまるのを待っている。

「だから学問のことは学者に聞かなければならん。金が欲しければ町人の所へ持つて行くよりほかに致し方はない」

「金が欲しい」とまぜかえす奴が出る。誰だかわからない。道也先生は「欲しいでしょう」と云ったぎり進行する。

「学問すなわち物の理がわかると云う事と生活の自由すなわち金があると云う事とは独立して関係のないのみならず、かえつて反対のものである。学者であればこそ金がないのである。金を取ることから学者にはなれないのである。学者は金がない代りに物の理がわかるので、町人は理窟りくつがわからないから、その代りに金を儲もけ

る」

何か云うだろうと思つて道也先生は二十秒ほど絶句して待つてゐる。誰も何も云わない。

「それを心得んで金のある所には理窟もあると考へているのは愚^ぐの極^{きよく}である。しかも世間一般はそう誤認している。あの人は金持ちで世間が尊敬しているからして理窟もわかつてゐるに違ない、カルチュアーもあるにきまつてゐると——こう考へる。ところがその実はカルチュアーを受ける暇がなければこそ金をもうける時間が出来たのである。自然は公平なもので一人の男に金ももうけさせる、同時にカルチュアーも授けると云うほど鼻^{ひいき}にはせんのである。この見やすき道理も弁^{べん}ぜずして、かの金持ち共は己^{うぬぼ}惚^ぼれて……」

「ひや、ひや」「焼くな」「しっ、しっ」だいぶ賑にぎやかになる。

「自分達は社会の上流に位して一般から尊敬されているからして、世の中に自分ほど理窟りくつに通じたものはない。学者だろうが、何だろうがおれに頭をさげねばならんと思うのは憫びんぜん然ぜんのしだいで、彼らがこんな考を起す事自身がカルチュアーの無いと云う事実を証明している」

高柳君の眼は輝やいた。血が双そうきよう頬ほに上のぼってくる。

「訳わけのわからぬ彼らが己惚うぬぼれはどうてい濟度さいどすべからざる事とするも、天下社会から、彼らの己惚をもつともだとは是認するに至つては愛想あいその尽きた不見識と云わねばならぬ。よく云う事だが、あの男もあのくらしいな社会上の地位にあつて相応の財産も所有してい

る事だから万更そんな訳のわからない事もなからう。豈計らんあにはかやある場合には、そんな社会上の地位を得て相当の財産を有しておればこそ訳がわからないのである」

高柳君は胸の苦しみを忘れて、ひやひやと手を打った。隣の薩さつまがすり摩つ縊まがすりはえへんと嘲ちやうろうてき弄せきばらい的いな咳せきばらい払いをする。

「社会上の地位は何できまると云えば——いろいろある。第一カもんばつルもんばつチュアもんばつーもんばつできまる場合もある。第二門もんばつ閥もんばつできまる場合もある。第三には芸能できまる場合もある。最後に金できまる場合もある。しかしてこれはもつとも多い。かようにいろいろの標準があるのを混同して、金で相場がきまつた男を学問で相場がきまつた男と相互に通用し得るように考えている。ほとんど盲目めくら同然である」

エヘン、エヘンと云う声が散らばつて五六カ所に起る。高柳君は口を結んで、鼻から呼吸いきをはずませている。

「金で相場のみまつた男は金以外に融通は利きかぬはずである。金はある意味において貴重かも知れぬ。彼らはこの貴重なものを擁ようしているから世の尊敬を受ける。よろしい。そこまでは誰も異存はない。しかし金以外の領分において彼らは幅はばを利かし得る人間ではない、金以外の標準をもつて社会上の地位を得る人の仲間入は出来ない。もしそれが出来ると云えば学者も金持ちの領分へ乗り込んで金銭本位の区域内で威張つても好いい訳になる。彼らはそうはさせぬ。しかし自分だけは自分の領分内におとなしくしている事を忘れて他の領分までのさばり出ようとする。それが物のわ

からない、好い証拠である」

高柳君は腰を半分浮かして拍手をした。人間は真似まねが好すきである。高柳君に誘い出されて、ぱちぱちの音が四方に起る。冷笑党いきおいは勢の不可なるを知つて黙した。

「金は労力の報酬である。だから労力を余計にすれば金は余計にとれる。ここまでは世間も公平である。(否いなこれすらも不公平な事がある。相場師などは労力なしに金を攫つかんでいる)しかし一歩進めて考えて見るが好いい。高等な労力に高等な報酬が伴うであろうか——諸君どう思います——返事がなければ説明しなければならん。報酬なるものは眼前の利害にもつとも影響の多い事情だけできめられるのである。だから今の世でも教師の報酬は小商人こあきんど

の報酬よりも少ないのである。眼前以上の遠い所高い所に労力を費やすものは、いかに将来のためになろうとも、国家のためになろうとも、人類のためになろうとも報酬はいよいよ減るのである。だによつて労力の高下こうげでは報酬の多寡たかはきまらない。金銭の分配は支配されておらん。したがつて金のあるものが高尚な労力をしたとは限らない。換言すれば金があるから人間が高尚だとは云えない。金を目安めやすにして人物の価値をきめる訳には行かない」

滔々とうとうとして述べて来た道也はちよつとここで切つて、満場の形勢を觀望した。活版に押した演説は生命がない。道也は相手しだいで、どうとも変わるつもりである。満場は思ったより静かである。

「それを金があるからと云うてむやみにえらがるのは間違っている。学者と喧嘩けんかする資格があると思つてるのも間違つてゐる。品のある人々に頭を下げさせるつもりでゐるのも間違つてゐる。

——少しは考えても見るがいい。いくら金があつても病氣の時は医者に降参しなければなるまい。金貨を煎せんじて飲む訳には行かない……」

あまり熱心な滑稽こっけいなので、思わず嘖き出したものが三四人ある。道也先生は気がついた。

「そうでしょう——金貨を煎せんじたつて下痢げりはとまらないでしょう。

——だから御医者に頭を下げる。その代り御医者は——金に頭を下げる」

道也先生はにやにやと笑った。聴衆もおとなしく笑う。

「それで好いのです。金に頭を下げた結構です——しかし金持はいけない。医者に頭を下げる事を知つてながら、趣味とか、嗜好とか、気品とか人品とか云う事に関して、学問のある、高尚な理窟くつのわかつた人に頭を下げることを知らん。のみならずかえつて金の力で、それらの頭をさげさせようとする。——盲目蛇めくらへびに怖おじずとはよく云つたものですねえ」

と急に会話調になつたのは曲折があつた。

「学問のある人、訳のわかつた人は金持が金の力で世間に利益を与うると同様の意味において、学問をもつて、わけの分つたところをもつて社会に幸福を与えるのである。だからして立場こそ違

え、彼らはとうてい冒し得べからざる地位に確たる尻を据えてい
るのである。

「学者がもし金銭問題にかかれば、自己の本領を棄てて他の縄
張内に這入るのだから、金持ちに頭を下げるが順当であろう。

同時に金以上の趣味とか文学とか人生とか社会とか云う問題に関
しては金持ちの方が学者に恐れ入って来なければならん。今、学
者と金持の間に葛藤が起るとする。単に金銭問題ならば学者は
初手から無能力である。しかしそれが人生問題であり、道徳問題
であり、社会問題である以上は彼ら金持は最初から口を開く権
能のないものと覚悟をして絶対的に学者の前に服従しなければ
ならん。岩崎は別荘を立て連らねる事において天下の学者を圧倒

しているかも知れんが、社会、人生の問題に関しては小児と一般である。十万坪の別荘を市の東西南北に建てたから天下の学者をへこ凹ましたと思うのは、りようんかく凌雲閣を作ったからせんじん仙人が恐れ入ったろうと考えるようなものだ……」

聴衆は道也の勢いきおいと最後の一句の奇警なのに気を奪われて黙っている。独りひと高柳君がたまらなかつたと見えて大きな声を出して喝か采つさいした。

「商人が金を儲もつけるために金を使うのは専門上の事で誰も容喙ようかいが出来ぬ。しかし商買上に使わないで人事上にその力を利用するときは、訳のわかつた人に聞かねばならぬ。そうしなければ社会の悪みずかを自ら釀じょうぞう造して平氣でいる事がある。今の金持の金のあ

くる木^{こがらし}枯^{おく}は屋^{うご}を撼^{うご}かして去る。

十二

「ちつとは、好^いい方かね」と枕元へ坐る。

六畳の座敷は、畳がほけて、とんと打つたら夜でも埃^{ほこ}りが見え
 そうだ。宮島産の丸盆に薬^{くすり}瓶^{びん}と駿^{けん}温器^{おんき}がいつしよに乗^のつて
 いる。高柳君は演説を聞いて帰^{かえ}つてから、とうとう喀^{かっけつ}血^{けつ}してし
 まつた。

「今日はだいいい」と床の上に起き返^{かえ}つて後^{うしろ}から搔^か卷^{まき}を背^せの
 半分までかけている。

中野君は おおしまつむぎ 大島紬 たもと の袂から ロシアがわ 魯西亜皮の まきたばこいれ 巻 蓆 入 を出しかけ

たが、

「うん、たばこ 煙草を飲んじや、わるかつたね」とまた袂のなかへ落す。

「なに構わない。どうせ煙草ぐらいで癒りなおやしないんだから」と
ぶぜん 惘然としている。

「そうでないよ。はじめ 初が かんじん 肝心だ。今のうち養生しないといけない。
きのう 昨日医者へ行つて聞いて見たが、なに心配するほどの事も無い。

来たかい医者は」

「今朝来た。あつた 暖かにしていると云つた」

「うん。暖かにしているがいい。この室は少し寒いねえ」と中野
 君は わび 侘し げ 氣に あたり 四方を見廻した。

「あの障子しょうじなんか、宿の下女にでも張らしたらよかろう。風が這はい入はいって寒いだろう」

「障子だけ張ったって……」

「転地でもしたらどうだい」

「医者もそう云うんだが」

「それじゃ、行くがいい。今朝そう云ったのかね」

「うん」

「それから君は何と答えた」

「何と答えるったって、別に答えようもないから……」

「行けばいいじゃないか」

「行けばいいだろうが、ただはいかれない」

高柳君は元氣のない顔をして、自分の膝頭へ眼を落した。
ガスふたこ 瓦斯双子の端から 鼠色のフラネルが二寸ばかり食み出している。
寸法も取らず別々に仕立てたものだろう。

「それは心配する事はない。僕がどうかする」

高柳君は潤のない眼を膝から移して、中野君の幸福な顔を見た。
この顔しだいで返答はきまる。

「僕がどうかするよ。何だつて、そんな眼をして見るんだ」

高柳君は自分の心が自分の両眼から、外を覗いていたのだ
など急に気がついた。

「君に金を借りるのか」

「借りないでもいいさ……」

「貰うのか」

「どうでもいいさ。そんな事を気に掛ける必要はない」

「借りるのはいやだ」

「じゃ借りなくってもいいさ」

「しかし貰う訳には行かない」

「六^むずかしい男だね。何だつてそんなにやかましくいうのだい。

学校にいる時分は、よく君の方から金を借せの、西洋料理を奢^{おご}れ
のとせびつたじゃないか」

「学校にいた時分は病気なんぞありやしなかつたよ」

「平^{ふだん}生ですら、そうなら病気の時はなおさらだ。病気の時に友達

が世話をするのは、誰から云つたつておかしくはないはずだ」

「そりや世話をする方から云えばそうだろう」

「じゃ君は何か僕に対して不平な事でもあるのかい」

「不平はないさありがたいと思つてるくらいだ」

「それじゃ心こころよ快く僕の云う事を聞いてくれてもよかろう。自分

で不愉快の眼鏡を掛けて世の中を見て、見られる僕らまでを不愉快にする必要はないじゃないか」

高柳君はしばらく返事をしない。なるほど自分は世の中を不愉快にするために生きてるのかも知れない。どこへ出ても好かれた事がない。どうせ死ぬのだから、なまじい人の情なさけを恩に着るのは

かえつて心苦しい。世の中を不愉快にするくらいな人間ならば、中野一人を愉快にしてやっつたつて五十歩百歩だ。世の中を不愉快

にするくらいな人間なら、また一日も早く死ぬ方がましである。

「君の親切を無むにしては気の毒だが僕は転地なんか、したくないんだから勘かんべん弁べんしてくれ」

「またそんなわからずやを云う。こう云う病気は初期が大切だよ。時期を失しつすると取り返しがつかないぜ」

「もう、とうに取り返しがつかないんだ」と山の上から飛び下りたような事を云う。

「それが病気だよ。病気のせいでそう悲観するんだ」

「悲観するって希望のないものは悲観するのは当たり前だ。君は必要がないから悲観しないのだ」

「困った男だなあ」としばらく匙さじを投げて、すいと起たつて障子を

あける。例の梧桐ごとうが坊主ぼうずの枝を真直まっすぐに空に向つて曝さらしている。

「淋さびしい庭だなあ。桐きりが裸で立っている」

「この間まで葉が着いてたんだが、早いものだ。裸の桐に月がさすのを見た事があるかい。凄すごい景色けしきだ」

「そうだろう。——しかし寒いのに夜る起きるのはよくないぜ。

僕は冬の月は嫌きらいだ。月は夏がいい。夏のいい月夜に屋根舟に乗つて、隅田川から綾瀬あやせの方へ漕こがして行って銀扇ぎんせんを水に流して遊んだら面白いだろう」

「気楽云つてらあ。銀扇を流すたどうするんだい」

「銀泥ぎんていを置いた扇を何本も舟へ乗せて、月に向つて投げるのさ。きらきらして奇麗きれいだろう」

「君の発明かい」

「昔むかしの通つうじん人はそんな風流をして遊んだそうだ」

「贅ぜいたく沢な奴らだ」

「君の机の上に原稿があるね。やっぱり地理学教授法か」

「地理学教授法はやめたさ。病気になって、あんなつまらんものがやれるものか」

「じゃ何だい」

「久しく書きかけて、それなりにして置いたものだ」

「あの小説か。君の一代の傑作か。いよいよ完成するつもりなのかい」

「病気になる、なおやりたくなる。今まではひまになったらと

思っていたが、もうそれまで待っちゃいられない。死ぬ前には非書き上げないと気が済まない」

「死ぬ前は過激な言葉だ。書くのは賛成だが、あまり凝こるとかえつて身体からだがわるくなる」

「わるくなつても書けりやいいが、書けないから残念でたまらない。昨夜ゆうべは続きを三十枚かいた夢を見た」

「よつほど書きたいのだと見えるね」

「書きたいさ。これでも書かなくっちゃ何のために生れて来たのかわからない。それが書けないときまった以上は穀潰ごくつぶし同然ださ。だから君の厄やっかい介かいにまでなつて、転地するがものはないんだ」

「それで転地するのがいやなのか」

「まあ、そうさ」

「そうか、それじゃ分つた。うん、そう云うつもりなのか」と中野君はしばらく考えていたが、やがて

「それじゃ、君は無意味に人の世話になるのが厭いやなんだろうから、そこのとこを有意味にしようじゃないか」と云う。

「どうするんだ」

「君の目下もっかの目的は、かねて腹案のある述作を完成しようとするのだらう。だからそれを条件にして僕が転地の費用を担任しようじゃないか。逗子ずしでも鎌倉かまくらでも、熱海あたまでも君の好な所すきへ往いつて、呑気のんきに養生する。ただ人の金を使って呑気に養生するだけでは心が済まない。だから療養かたがた気が向いた時に続きをかくさ。

そうして身体からだがよくなって、作さくが出来上ったら帰ってくる。僕は費用を担任した代り君に一大傑作を世間へ出して貰う。どうだい。それなら僕の主意も立ち、君の望のぞみも叶かなう。一挙両得じゃないか」

高柳君は膝ひざ頭がしらを見詰めて考えていた。

「僕が君の所へ、僕の作を持って行けば、僕の君に対する責任は済む訳なんだね」

「そうさ。同時に君が天下に対する責任いちぶの一分が済むようになるのさ」

「じゃ、金を貰おう。貰いつ放しに死んでしまうかも知れないが——いいや、まあ、死ぬまで書いて見よう——死ぬまで書いたら書けない事もなからう」

「死ぬまでかいちや大変だ。暖かい相州^{そうしゅうへん}辺へ行つて氣を楽^{らく}にして、時々一頁二頁ずつ書く——僕の条件に期限はないんだぜ、君」

「うん、よしきつと書いて持つて行く。君の金を使つて茫^{ぼう}然^{ぜん}としていちや済まない」

「そんな済むの済まないのと考えてちやいけない」

「うん、よし分つた。ともかくも転地しよう。明日^{あした}から行こう」

「だいぶ早いな。早い方がいいだろう。いくら早くつても構わな
い。用意はちやんと出来てるんだから」と懐中から七子^{ななこ}の三折^{みつお}れ
の紙入を出して、中から一束の紙幣^{しへい}をつかみ出す。

「ここに百円ある。あとはまた送る。これだけあつたら当分はい

いだろう」

「そんなにいるものか」

「なにこれだけ持って行くがいい。実はこれは妻さいの発議ほつぎだよ。妻の好意だと思つて持つて行つてくれたまえ」

「それじゃ、百円だけ持つて行くか」

「持つて行くがいいとも。せつかく包んで来たんだから」

「じゃ、置いて行つてくれたまえ」

「そこでと、じゃ明日あす立つね。場所か？ 場所はどこでもいいさ。

君の気の向いた所がよかろう。向むこうへ着いてからちよつと手紙を出

してくれればいいよ。——護送するほどの大病人でもないから僕は停車場へも行かないよ。——ほかに用はなかつたかな。——な

に少し急ぐんだ。実は今日は妻を連れて親類へ行く約束があるんで、待ってるから、僕は失敬しなくっちゃならない」

「そうか、もう帰るか。それじゃ奥さんよろしく」

中野君は欣然きんぜんとして帰って行く。高柳君は立って、着物を着換えた。

百円の金は聞いた事がある。が見たのはこれが始めてである。

使うのはもちろんの事始めてである。かねてから自分を代表するほどの作物さくぶつを何か書いて見たいと思うていた。生活難あいまの合間合間に一頁二頁と筆を執とった事はあるが、興きようが催もよおすと、すぐやめねばならぬほど、饑うえは寒さむさは容赦なくわれを追うてくる。この容子ようすでは当分仕事らしい仕事は出来そうもない。ただ地理学教授法を記

して露命を繋いでいるようでは馬車馬が秣を食つて終日馳け
あるくと変りはなさそう。おれにはおれがある。このおれを出
さないでぶらぶらと死んでしまうのはもつたない。のみならず
親の手前世間の手前面目ない。人から土偶のようにうとまれるの
も、このおれを出す機会がなくて、鈍根にさえ立派に出来る翻
訳の下働きなどで日を暮らしているからである。どうしても無念
だ。石に噛みついてとも思う矢先に道也の演説を聞いて床につい
た。医者は大胆にも結核の初期だと云う。いよいよ結核なら、と
ても助からない。命のあるうちにとまた旧稿に向つて見たが、緋
る縄は遅く、逃げる泥棒は早い。何一つ見やげも置かないで、消
えて行くかと思うと、熱さえ余計に出る。これ一つ纏めれば死ん

でも言訳いいわけは立つ。立つ言訳を作るには手当もしなければならん。

今の百円は他日の万金よりも貴たつとい。

百円を懐ふところにして室へやのなかを二度三度廻る。気分も爽さわやかに胸も涼

しい。たちまち思い切つたように帽を取つて師走しわすの市いちに飛び出し

た。黄昏たそがれの神楽坂かぐらざかを上あがると、もう五時に近い。気の早い店で

は、はや瓦斯ガスを点じている。

毘沙門びしゃもんの提灯ちようちんは年内に張りかえぬつもりか、色が褪さめて

暗いなかで揺れている。門前の屋台で職人てぬぐいが手拭はんを半んだすき纏まとにと

つて、しきりに寿司すしを握にぎっている。露店の三馬さんまは光るほどに色が

寒い。黒足袋くろたびを往来へ並べて、頬ほお被かぶりに懐ふところ手でをしたのがあ

る。あれでも足袋は売れるかしらん。今川焼は一銭に三つで婆おばさ

んの自製にかかる。六錢五厘の万年筆は安過ぎると思う。まんねんふで

世は様々だ、今ここを通っているおれは、翌あすの朝になると、もう五六十里先へ飛んで行く。とは寿司屋すしやの職人も今川焼の婆さんも夢にも知るまい。それから、この百円を使い切ると金の代りに金より貴いあるものを懐にしてまた東京へ帰つて来る。とも誰も思うものはあるまい。世は様々である。

道也先生に逢あつて、実はこれこれだと云つたら先生はそうかと微笑するだろう。あす立ちますと云つたらあるいは驚ろくだろう。一世一代の作を仕上げてかえるつもりだと云つたらさぞ喜ぶであろう。——空想は空想の子である。もつとも繁殖力に富むものをのうり脳裏に植えつけた高柳君は、病の身にある事を忘れて、いつの間

にか先生の門かどぐち口に立つた。

誰か来客のようであるが、せつかく来たのをとわざと遠慮を抜いて「頼む」と声をかけて見た。「どなた」と奥から云うのは先生自身である。

「私です。高柳……」

「はあ、御おほい這入り」と云つたなり、出てくる景色けしきもない。

高柳君は玄関から客間へ通る。推察の通り先客がいた。市いち楽らく

の羽織に、くすんだ縞しまものを着て、帯の紋博多もんはかただけがいちじる

しく眼立つ。額の狭い頬骨の高い、鈍栗眼どんぐりまなこである。高柳君は

先生に挨拶あいさつを済ました、あとで鈍栗に黙礼をした。

「どうしました。だいぶ遅く来ましたね。何か用でも……」

「いいえ、ちよつと——実は御暇乞おいとまごいに上がりました」

「御暇乞？ 田舎いなかの中学へでも赴任ふにんするんですか」

間の襖あいふすまをあけて、細君が茶を持って出る。高柳君と御辞儀おじぎの交換をして居間しりぞへ退く。

「いえ、少し転地しようかと思ひまして」

「それじゃ身体からだでも悪いんですね」

「大した事もなかうと思ひますが、だんだん勧める人もありませんから」

「うん。わるけりや、行くがいいですとも。いつ？ あした？

そうですか。それじゃまあ緩ゆっくり話したまえ。——今ちよつと用談を済ましてしまうから」と道也先生は鈍栗の方へ向いた。

「それで、どうも御気の毒だが——今申す通りの事情だから、少し待ってくれませんか」

「それは待って上げたいのです。しかし私の方の都合もありまして」

「だから利子を上げればいいでしょう。利子だけ取って元金は春まで猶^{ゆうよ}予してくれませんか」

「利子は今まででも滞^{とど}りなくちようだいしておりますから、利子さえ取れば好^いい金なら、いつまでも御用立てて置きたいのですが……」

「そうはいかんでしょうか」

「せっかくの御^{おたのみ}頼だから、出来れば、そうしたいのですが……」

「いけませんか」

「どうもまことに御気の毒で……」

「どうしても、いかんですか」

「どうあつても百円だけ^{こしら}え^ていたただかなくつちやならんので」

「今夜中にですか」

「ええ、まあ、そうですね。昨日^{きのう}が期限でしたね」

「期限の切れたのは知ってます。それを忘れるような僕じゃない。だからいろいろ奔走して見たんだが、どうも出来ないから、わざわざ君の所へ使をあげたのです」

「ええ、御手紙はたしかに拝見しました。何か御著述があるそうで、それを本屋の方へ御売渡しになるまで延期の御申込でした」

「さよう」

「ところがですて、この金の性質がですて——ただ利子を生ませる目的でないものですから——実は年末には是非入用だがと念を押して御おあにい兄さんに伺ったくらいなのです。ところが御兄さんが、いやそりや大丈夫、ほかのものなら知らないが、弟に限ってけつして、そんな不都合はない。受合う。とおっしゃるものですから、それで私も安心して御用立て申したので——今になって御違約でははなはだ迷惑します」

道也先生は黙もくねん然ぜんとしている。鈍どんぐり栗りは煙草たばこをすばすば呑む。

「先生」と高柳君が突然横合から口を出した。

「ええ」と道也先生は、こつちを向く。別段赤面した様子も見え

ない。赤面するくらいなら用談中と云つて面会を謝絶するはずである。

「御話し中はなはだ失礼ですが。ちよつと伺つても、ようございましょうか」

「ええ、いいです。何ですか」

「先生は今御著作をなさつたと承うけたまりましたが、失礼ですが、その原稿を見せていただく訳には行きますまいか」

「見るなら御覧、待つてるうち、読むのですか」

高柳君は黙っている。道也先生は立って、床の間に積みかさねた書籍の間から、厚さ三寸ほどの原稿を取り出して、青年に渡しながら

「見て御覧」という。表紙には人格論と楷書かいしよでかいてある。

「ありがとう」と両手に受けた青年は、しばしこの人格論の三字をしけじけと眺ながめていたが、やがて眼を挙あげて鈍栗の方を見た。

「君、この原稿を百円に買って上げませんか」

「エへへへ。私は本屋じゃありません」

「じゃ買わないですね」

「エへへへ御冗談ごじょうだんを」

「先生」

「何ですか」

「この原稿を百円で私に譲って下さい」

「その原稿?……」

「安過ぎるでしょう。何万円だって安過ぎるのは知っています。

しかし私は先生の弟子だから百円に負けて譲って下さい」

道也先生は茫然ぼうぜんとして青年の顔を見守っている。

「是非譲って下さい。——金はあるんです。——ちやんとここに持っています。——百円ちやんとあります」

高柳君は懐ふところから受取ったままの金包を取り出して、二人の間に置いた。

「君、そんな金を僕が君から……」と道也先生は押し返そうとする。

「いいえ、いいんです。好いいから取って下さい。——いや間違っ
たんです。是非この原稿を譲って下さい。——先生私はあなたの、

弟子です。——越後の高田で先生をいじめた追いついた弟子の一人です。——だから譲つて下さい」

愕然がくぜんたる道也先生を残して、高柳君は暗き夜の中に紛れ去つた。彼は自己を代表すべき作物さくぶつを転地先よりもたらし帰る代りに、より偉大なる人格論を懐ふところにして、これをわが友中野君に致いたし、中野君とその細君の好意に酬むくいんとするのである。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年12月1日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 2」筑摩書房

1972（昭和47）年1月

初出：「ホトトギス」

1907（明治40）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年2月24日公開

2015年4月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

野分

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>